

99-24

野口保興著

世界大地理誌

あじあ洲

明治 38 4 21 内交

東京

成美堂
目黒書店合梓

世界大地誌

例言

- 一 社會の活動たるや日進月歩底止するの期なし、斯る積極的場裡に立ちて宇内の大勢を觀察するは蓋、吾人が急務とする所にして、特に飛躍的發展の機運に向ひつつある我が日本人に於ては最、必要なる事實なりとす、是筆を執て本書を著はすに至りし所以なり。
- 一 本書は予が多年の備忘録に説明的潤飾を加へて少しく整頓せんと試みたるものに外ならず、題して世界大地誌と云ふは不遜の嫌なき能はずと雖、是予が著書中に於ける比較的の題目たるのみ、讀者幸に之を諒せよ。
- 一 本書を分ちて汎論、アジア洲、オセアニア洲、ヨーロッパ洲、アフリカ洲及アメリカ洲の六巻と爲し、汎論に於ては世界地理の梗概を説き且重要事項の比較的研究を試み、其の他に於ては各洲の地理を詳述して列國の情勢を知らしめんとす。

一 本書の特色とする所、質的に重きを置きしこと其の一なり、研究的なること其の二なり、而して本書記載の事實中、明確を缺けるものに就きては、断定を輕下せざらんことに注意せし爲、多少讀者をして要領を得るに苦ましむるの弊あるを免れずと雖、是事實的研究を重視せし結果に過ぎずして、又各箇の意見に依りて自由に取捨肯定するの餘地を存せんが爲、なりと知るべし。

一 本書挿入の繪畫は徒に多きを貪ることを避けて、説明を補ふに資すべきもの若しくは標準たるべきものに止めたり、又地圖に關しては、拙著世界地圖總覽の完成せんとするあるを以て之に譲りしもの多し。

一 本書を著述するに當り、學友高橋勝君を勞すること甚多し、特に一言して感謝の意を表す。

明治三十八年三月

著者識

世界大地誌

あじあ洲

参考書目

「あじあ洲」に關して参考に供せし書籍中主要なるもの左の如し

Dictionnaire de géographie—Vivien de St-Martin.

Nouvelle géographie universelle—Elisée Reclus.

The advanced classbook of modern geography—W. Hughes.

International geography—H. R. Mill.

A textbook of Commercial geography—O. C. Adams.

L'Asie (Choix de lectures de géographie)—L. Lanier.

Géographie de l'Asie.—F. Schrader et L. Gallouédec.

L'Asie.—Vidal de la Blache et Camens d'Almeida.

Asia—Kean.

世界大地誌 あじあ洲 参考書目

Asien—W. Sievers.

朝鮮水路誌

朝鮮八域誌

韓半島

朝鮮開化史

大韓地誌

Korea—A. Hamilton.

支那海水路誌

水道提綱

支那地誌總體部

清國地誌

支那通覽

用支那帝國地理

再版支那通商

水路部

青華山人原著

信夫淳平著

恒屋盛服著

韓國學部編

水路部

齊召南編錄

參謀本部編纂

岸田吟香著

山中峯雄著

清國內府編纂

支那調查會纂

支那貿易事情

支那貿易

Empire du Milieu—E. et O. Reclus.

Un empire russo-chinoise—Alexandre Ular.

Chine du Nord—Madrolle.

Chine du Sud—Madrolle.

Geographical dictionary of China—Playfaire.

歷代地理叢書

日知錄

滿洲地誌

Manchuria—A. Hosie.

蒙古地誌

Déserts d'Asie—Sven Hedin.

Album géographique—Marcel Dubois et Camille Guy.

世界大地誌 及び 洲 參考書目

吉田虎雄著

織田一著

李洸洛輯

顧炎武著

參謀本部編纂

參謀本部編纂

- L' Indo-chine—Albéric Neron.
 Indo-chine, Indes, Siam—Madrolle.
 Laos et le protectorat français—Gosselin.
 安南史
 佛領印度支那
 Voyage aux Philippines et en Malaisie—J. Montano.
 Java et ses habitants—J. Chailley-Bert.
 Dans l' Inde—André Chevrillon.
 Handbook for India, Burma and Ceylon—J. Murray.
 L' Inde d' aujourd'hui—Albert Méhin.
 L' Arabie centrale—W.—G. Palgrave.
 阿拉伯地誌
 A travers la Sibérie—Edmond Cotteau.
 En Sibérie—Jules Legras.

引田利章譯述
 南條文雄
 高橋順次郎
 共述

參謀本部編纂

- Ile de Saldhaline—Paul Labbé.
 Almanach de Gotha—Justus Perthes.
 Statesman's yearbook—Macmillan & Co.
 Hazell's Annual—Hazell, Waston & Viney.
 Geographien kalender (1904—1905)—Justus Perthes.
 The Century cyclopedia of Names—The Century Co.
 Concise gazetteer of the World—W. & R. Chambers.
 A Brief history of Eastern Asia—L. C. Hannah.
 Dictionnaire de biographie—Grégoire et Wahl.
 Handatlas—Adolf Stieler.
 Allgemeiner Handatlas—Andree.
 Atlas de géographie moderne—F. Schrader.
 Physikalischer Handatlas—Herm. Berghaus.
 Atlas of Meteorology—J. G. Bartholomew.

Taschen-Atlas—Justus Perthes

See-Atlas—Justus Perthes

官報

通商彙纂

地學雜誌

内閣印刷局

外務省通商局

地學協會

世界大地誌

あじあ洲

目次

● 總論

名稱	一
位置	一
境域	二
廣袤	三
面積	三
海灣	四
海峽	五
島嶼	五
半島	六
地角	六
地峽	七
海岸	七

地質	一
山誌	一〇
河流	二〇
沼湖	三三
地勢	三六
氣候	四一
天産	五三
人口	五八
人種	五九
宗教	六四
分國	六八
生業	七五

世界大地誌 あじあ洲 目次

●韓國

境域	七九	氣候	九六
海部	七九	風俗	九七
陸部	七九	政治	九九
海岸	八一	行政區劃	九九
山誌	八一	兵備	一〇四
水誌	八三	外交	一一四
地勢	八六	財政	一一五
氣候	八七	生業	一一八
天產	八八	交通	一二四
沿革	八八	處誌	一二九
種族	九三	京畿道	一三〇
人口	九三	關西面	一三四
官語	九四	關北面	一三七
教育	九五	三南面	一三九
宗教	九六		

●清國

名稱	一四七	海岸	一四九
位置	一四七	山誌	一五〇
境域	一四八	水誌	一五三

◎漢土

地勢	一六〇	教育	一七三
氣候	一六一	政體	一七四
天產	一六二	行政區劃	一七六
沿革	一六三	兵備	一八二
人口	一六五	財政	一八四
人種	一六八	生業	一八七
宗教	一七〇	交通	一九九
風俗	一七二		

◎滿洲

境域	二〇八	人種	二一九
海岸	二〇九	政治	二三〇
山誌	二一〇	兵備	二三九
水誌	二一一	生業	二四二
地勢	二一二	交通	二四七
氣候	二一三	處誌	二四九
天產	二一五	其一 北部	二五〇
沿革	二一六	其二 中部	二七二
人口	二一七	其三 南部	二九二

山岳	三二〇	種族	三三二
河流	三二二	言語	三三四
沼湖	三二五	宗教	三三五
地勢	三二七	政治	三三五
氣候	三二七	兵備	三三七
天產	三二九	財政	三三八
沿革	三二九	生業	三三八
人口	三三二	處誌	三四七
◎蒙古			
境域	三五六	沿革	三六四
山誌	三五六	住民	三六六
水誌	三五八	政治	三六八
地勢	三六一	兵備	三七〇
氣候	三六一	生業	三七一
天產	三六三	處誌	三七二
◎新疆			
境域	三七八	氣候	三八二
山誌	三七八	沿革	三八三
水誌	三七九	住民	三八四
地勢	三八二	政治	三八五
◎青海			
境域	三九一	地勢	三九五
山誌	三九二	沿革	三九六
水誌	三九二	政治	三九六
◎チベット			
名稱	三九八	言語	四〇八
境域	三九八	宗教	四〇八
山誌	三九九	教育	四〇九
水誌	四〇〇	風俗	四〇九
地勢	四〇三	政治	四一一
氣候	四〇四	兵備	四一二
天產	四〇五	生業	四一三
沿革	四〇六	交通	四一四
人口	四〇七	處誌	四一五
種族	四〇七		

◎香港	四一七
◎租借地	四一七
◎香港	四二六
◎香港	四二六

世界大地誌 あしあ洲 目次
五

● 瑪港

四二九

● 印度支那

四三〇

名稱	四三〇	水誌	四三五
位置	四三〇	地勢	四四一
廣袤	四三一	氣候	四四二
面積	四三二	天產	四四三
境域	四三二	種族	四四四
海岸	四三二	分國	四四五
山誌	四三三		

◎ フランス領印度支那

四四九

名稱	四四九	政治	四五九
沿革	四五〇	商業	四六二
境域	四五四	交通	四六四
住民	四五五		

其一 トンキン

四六七

名稱	四六七	天產	四七四
境域	四六七	住民	四七六
面積	四六八	政治	四七六

海岸	四六八	財政	四八〇
地勢	四六九	生業	四八〇
水誌	四七〇	處誌	四八九
氣候	四七三		

其二 アンナム

四九五

名稱	四九五	天產	四九九
境域	四九五	住民	五〇〇
海岸	四九六	政治	五〇〇
山岳	四九六	生業	五〇一
河流	四九七	交通	五〇四
氣候	四九八	處誌	五〇七

其三 コシエンシヌ

五一四

名稱	五一四	氣候	五一六
境域	五一四	住民	五一六
海岸	五一四	行政	五一八
地勢	五一五	生業	五二〇
河流	五一五	處誌	五二三

其四 ラオス

五二六

名稱	五二六	沿革	五二七
----	-----	----	-----

世界大地誌 あじあ洲 目次

境域	五二七	生業	五三〇
山河	五二八	行政	五三一
氣候	五二八	處誌	五三二
住民	五二九		

其五 カンボヂア

名稱	五三七	住民	五三八
境域	五三七	政治	五四〇
地勢	五三七	生業	五四一
氣候	五三八	處誌	五四二
天産	五三八		

◎ シアム 國

名稱	五四五	沿革	五四三
境域	五四五	住民	五四四
海岸	五四六	種族	五四五
地質	五四六	教育	五四八
山岳	五四七	政治	五四九
水誌	五四八	兵備	五五二
地勢	五五一	財政	五六三
氣候	五五一	生業	五六四
天産	五五二	處誌	五七〇

◎ バルマ

境域	五七七	天産	五八〇
海岸	五七八	沿革	五八〇
山誌	五七八	住民	五八二
水誌	五七八	政治	五八四
地勢	五七九	生業	五八五
氣候	五七八	處誌	五八六

◎ アンダマンニコバル

◎ マラッカ半島

境域	五九三	氣候	五九五
海岸	五九三	天産	五九五
山岳	五九四	住民	五九五
河流	五九四	分國	五九六

其一 シアム領

其二 イギリス領

海峽殖民地	五九九	サイホール	六〇九
マライ保護國	六〇六		

世界大地誌 あじあ洲 目次

● マライ群島

名稱	六二一	氣候	六一四
領域	六一一	住民	六一四
區劃	六一一	沿革	六一六
火山	六一三	分國	六一七

○ フィリッピン

名稱	六一八	名稱	六一八
領域	六一八	沿革	六一八
地勢	六二二	住民	六二九
河流	六二三	政治	六三〇
地震	六二四	生業	六三〇
氣候	六二四	處誌	六三二
天産	六二六		

◎ インシヤリンド

領域	六四五
----	-----

其一 オランダ領

名稱	六四八	政治	六四九
住民	六四九	生業	六五〇

ジヤバ

領域	六五六	沿革	六六三
面積	六五六	住民	六六四
海岸	六五六	官語	六六五
山岳	六五七	宗教	六六六
河流	六五九	教育	六六六
地勢	六六〇	行政	六六六
氣候	六六一	生業	六六七
天産	六六二	處誌	六七〇

スマトラ

位置	六七三	氣候	六七八
廣袤	六七三	天産	六七九
面積	六七四	住民	六八〇
海岸	六七四	行政	六八二
山脈	六七五	生業	六八三
河湖	六七六	處誌	六八四

バンカ	六八七
リウ	六八七
ピリト	六八九

ボルネオ

境域	六九〇	天産	六九五
海岸	六九〇	住民	六九六
地質	六九二	人口	六九七
山岳	六九二	行政	六九七
河流	六九三	生業	七〇一
氣候	六九四	處誌	七〇二

セレベス

境域	七〇四	住民	七〇七
海岸	七〇五	行政	七〇七
土地	七〇五	生業	七〇八
氣候	七〇六	處誌	七〇九
天産	七〇六		

アンボン

テルナテ

チモール

バリールロンボック

其二 イギリス領

七一六

其三 ボルトガル領

七一九

◎ 印度

七二一

◎ 印度半島

七二二

名稱	七二一	種族	七三五
位置	七二二	宗教	七四一
境域	七二二	教育	七四二
海岸	七二二	言語	七四三
山誌	七二三	風俗	七四四
水誌	七二六	美術	七四五
地勢	七三一	沿革	七四六
氣候	七三二	分國	七四九
天産	七三三		
人口	七三五		

其一 獨立國

七五〇

其二 イギリス領

七五一

ネパール

ブータン

政治

七五二

世界大地誌 あじあ洲 目次

處誌……………七六九

其三 **ポルトガル領**……………七八七

其四 **フランス領**……………七八九

◎ **セイラン島**……………七九二

名稱……………七九二

境域……………七九三

海岸……………七九三

山河……………七九三

氣候……………七九四

天産……………七九四

沿革……………七九四

住民……………七九五

政治……………七九五

生業……………七九六

處誌……………七九七

◎ **イラン高原**……………八〇〇

境域……………八〇〇

海岸……………八〇〇

山誌……………八〇一

水誌……………八〇二

地勢……………八〇四

◎ **バルチスタン**……………八〇八

住民……………八〇五

天産……………八〇五

氣候……………八〇六

土産……………八〇六

氣候……………八〇七

天産……………八〇九

沿革……………八〇九

◎ **アフガニスタン**……………八一三

住民……………八一〇

政治……………八一〇

生業……………八一〇

處誌……………八一〇

◎ **ペルシア**……………八一三

住民……………八一六

政治……………八一七

生業……………八一七

處誌……………八一七

◎ **アラビア半島**……………八二一

沿革……………八二一

住民……………八二二

政治……………八二二

生業……………八二二

處誌……………八二二

世界大地誌 あじあ洲 目次

境域	八三一	天産	八三四
海岸	八三一	沿革	八三四
土地	八三二	住民	八三五
氣候	八三三	分國	八三五

◎ 獨立部 八三七

オマーン	八三七	シムマル	八三八
ソマリア	八三七		

◎ 屬領部 八三八

トルコ屬地	八三八	イギリス領	八三八
-------	-----	-------	-----

● アジアトルコ 八四〇

境域	八四〇	天産	八四八
海岸	八四一	沿革	八四八
山誌	八四二	住民	八四九
水誌	八四三	政治	八五〇
地勢	八四七	生業	八五三
氣候	八四七	處誌	八五四

◎ サモス島 八五八

◎ キプロス島 八五九

● アジアロシア 八六〇

◎ コーカシア 八六一

境域	八六一	沿革	八六七
海岸	八六一	住民	八六八
山誌	八六一	行政	八七一
水誌	八六四	兵備	八七二
地勢	八六六	生業	八七二
氣候	八六六	處誌	八七四
天産	八六七		

◎ 中央アジア 八七六

境域	八七六	住民	八八四
山誌	八七六	政治	八八四
地勢	八七七	生業	八八五
水誌	八七七	處誌	八八六
氣候	八八二	屬地	八八九
天産	八八二	アハラ	八八九
沿革	八八三	ヒバ	八九一

◎ シベリア 八九二

名稱	九三二	人口	九二〇
位置	八九三	種族	九二二
境域	八九三	宗教	九一七
海岸	八九三	教育	九一七
山誌	八九五	政治	九一八
水誌	八九八	兵備	九一九
地勢	九〇五	生業	九二〇
氣候	九〇六	交通	九二五
天産	九〇八	處誌	九二七
沿革	九〇九		

サハリン島

名稱	九三四	湖沼	九四三
沿革	九三五	氣候	九四四
位置	九四一	住民	九四五
面積	九四二	行政	九四六
海岸	九四二	天産	九四七
山岳	九四二	生業	九四七
河流	九四三	都邑	九五〇

本書挿入圖書並に地圖目次

一 民家井に大邱府大市の景(韓國)	九八一―九九
一 武昌漢口漢陽(清國)	二八六―二八七
一 翠牛井に家屋(チベット)	四〇六―四〇七
一 トンキン地方に於ける山岳井にメコン河の増水	四六六―四六七
一 モイバーナルの村落井にアングコルの寺院	五三六―五三七
一 アンナム人井にシム人	五五六―五五七
一 「マングローブ」井に土家管理官(インシウリンド)	六四八―六四九
一 「メニヤン」樹井に寺院(インド)	七五〇―七五一
一 ハタル大帝廟及ウラガストク	八九二―八九三
一 サハリン島	九三四―九三五



あ
洲

野口保興著

名稱 アジア(亞細亞)はイギリヌ人のエーシア或はエーシア(Asia)フランドス人のアジー(Asie)ドイツ人のアジエン(Aisien)なり此の名稱は往昔コーカシア地方、アゾフ海の東部に居住せしアシエ(Asie)人(たアセエ)より起れるものなるべしと云ふ。

位置 アジア洲は舊大陸の北部より東部に亘れる陸地にして、全部殆ど北半球の内にあり、茲に其の四極點の位置を示せば左の如し。

極南 ¹ ロッチ島の南端

南緯凡々 一一〇〇分

世界大地誌

極北	チリウスキン岬	北緯凡	七七	五〇
極西	ストラチオ島の西端	東經凡	二四	五五
極東	デチネフ岬(東岬)	西經凡	一七一	五〇

然れどもマライネ群島の南東部(南方マライ)を除けば、極南はバリ島の南端南緯八度五十二分と成り、該群島の全部を除けばマライ半島のブル岬はアジア洲とアジア大陸との極南の地を兼ねて北緯凡二度十七分に當れるが、嘗て極南の地とせしロマニア岬は北緯一度二十二分三十秒なり、又ババ岬を以て極西とするときは東經凡二十六度五分なり、尙其の他の極地を擧ぐれば南方ユモリン岬は北緯八度五分にありて南西のラスメンヘリ岬は同十二度四十三分二十秒、北西に於けるカラの河口は同六十九度に位せり。境域 本洲は北に北極洋を控え、北東は淺きベーリング海峡(九二杆)に依りてアメリカ洲と隔り、東は太平洋に面し、南東はアラブラ海、チモル海等を以てオセアニア洲と境するが、南方マライの諸島を除けばセレベス海、マカ、東海峽、マラエ海峡を挟んで該洲のマレシアに對することと成り、マライ群島

全部を省けば南支那海、マラカ海峡は兩洲の限界と成るなり、南は印度洋に瀕し、西はカラ河、ウラル山脈、ウラル河、カスピ海、マニチ沼河(カフカズ山脈とつわり)黒海、ボスポロス海峡、マルマラ海、ダネル海峡等に依りてヨーロッパと境を接し、スエズ地峽に依りて僅にアフリカ洲に連なれり。

此の如く本洲の境界は概して天然の地形に基づくに似たれども亦人為的に出づるもの少なしとせず、例合ばヨーロッパ洲との境はオプ河、トボル河等を以てすべきにウラル山脈を以てするが如し、而して東部に於ける沿岸の島嶼は西洋人の所謂「フロン」(Fron)花葉鏈の形狀を呈し、本洲をして北はアメリカ洲に連接せしめ、南はオセアニア洲に繼續せしめ、以て此等の三大洲の間に區別の有無を疑はしむ。

廣袤 本大陸は不正四邊形の狀態を呈し、五大陸中にて廣袤最、夫にして、南北は凡七十七度、東西は凡百六十二度に亘れるが、南北は八千杆を有し、東西は一萬杆以上に達す。

面積 本洲の南東部に於ける大群島の全部若しくは一部を本洲に附屬

せしむると否とに依りて地積は四千四百五十五萬方紵と成り又は四千三百九十八萬方紵と成り或は尙減じて四千二百五十萬方紵と成る而して第三の地積と雖、アメリカ洲の地積より大なるのみならず、殆どヨーロッパ、アフリカ、オセアニアの三大洲を合はせたるものに等しく、第一の面積は我が日本の百七倍地球全陸地の三分の一強、地球全面積の十一分の一強に當れり。海灣 本洲は三大洋に面す、北岸は甚だ簡單にして多くは河灣たるに過ぎざれども、東岸并に南岸には顯著なる海灣少なからず、而して西岸は最、屈曲に富めども規模の大なるものなし、今左に一表を作りて本洲附屬の海灣に就きて稍、著しきものを列擧せん。

北極洋

カラ海 オブ(オビ)灣 イニセイ灣 タイムイル(タイムル)灣

ノルデンシールド海

太平洋

ベーリング海 オホーク海 タタル灣 日本海 黄海 渤海 東

1. Nordenskiöld

支那海(東海) 南支那海(南海) トンキン灣 シム灣 スーロー海
 セレベス海 ジバ海 バンダ海 フラフラ海 チモル海
 印度洋
 バルマ(バグー)海 ベンガル海 アラビア海 オマーン灣
 ペルシア灣 アデン灣 紅海
 地中海
 アレクサンドレタ灣 エーゲ海 マルマラ(マルモラ)海 黒海
 海峡 北より東南西に越くの順序に依りて海峡の主要なるものを列擧すれば左の如し。

1. Bosphorus

ベーリング 間宮(タタル) 朝鮮 直隸 臺灣 マカッサル マラッカ
 バルク オルムス バブエルマンデブ ダルダネル¹ ボスボロス
 島嶼 本洲に屬する島嶼は其の數少なからざれども、配置は東方に偏して主要なるものは概、大陸の縁邊に近く位せり、而して島嶼の面積は全洲の十六分の一に當れり。

I. Swjtkoi
1895

北部 新シベリア群島、ウランゲル島

千島列島、日本群島カラフト島、九州島、四國島、琉球列島、臺灣島

東部 海南島、フィリピン群島ミンダナオ島、ボルネオ島、セレベス島

モルッカ群島、大ソンドラ列島スマトラ島、小ソンドラ列島チモール島

南部 アンダマン列島、ニコバル列島、セイラン(セイロン)島

西部 キプロス島、ロドス島、サモス島、キオス島、レスボス島

半島 本洲に属する半島の地積は全洲の五分の一に當り、大陸部に屬して顯著なるものは概して太平洋及印度洋面にありて南向に突出せり。

北部 ヤルマル、タイムイル(タイミル)

東部 チクチ、カムチツカ、朝鮮、遼東、山東、雷州

南部 印度支那、マライ、印度デカン

西部 アラビア、シナイ、小アジア(アナトリア)

地角 本洲に於ける地角中最著しきものは左の如し

北部 チェリウスキン岬、スピエトイノス岬

東部 デチネフ岬、ロバトカ岬

南部 カンボヂア(カマオ)岬、ロマニア岬、ブル岬、ネグライス岬

西部 ラスマンヘリ岬、パバ岬

地峡 本洲に於ける半島と大陸とを連絡する部分は幅廣きを常とす、從て地峡の著しきもの少なくマライ半島のクラ(四二籽)及本洲とアフリカ洲との間に於けるスエズ(一一七籽)との二あるのみ。

海岸 本大陸北部の海岸は甚だ簡單にして海灣の凹入及陸地の突出共に至りて少なく、港灣の存するもの多くは河口、河灣たるに過ぎず、又地角は無きにしもあらざれども、其の盡頭の尖銳なるもの少なし、東部に於ては北方のペーリング海峡より南方のシム灣に至るまでの内海は、半島或は島嶼の爲に多少區劃せらるるも相互に連絡せり、而して此等の海の中に就きて黄海の朝鮮灣に於けるが如く、渤海の直隸、遼東、萊州の三灣に於けるが如く、南支那海のトンキン灣、シム灣に於けるが如く、大陸に接近するの地に於て

I. Ras el
Had

海岸線

更に港灣を形成するあり、南部に於ける海岸は顯著なる半島又は海灣を形成し、其の東方の海灣は開濶廣大なれども、其の西方に於けるものは狹長にして殆ど閉塞せるが如き形狀を呈せり、西部の海岸は最、彎曲に富める處なるが狹小なる半島多くして海灣は深く陸地に侵入せり。

此の如くにして本洲海岸線の延長を約六萬杆とすれば、海岸線一杆に就き地積七百四十二方杆面積四四一五萬方杆、海岸線五八千杆とせば七六一方杆、面積四二五〇萬方杆、海岸線五五千杆とせば七七三方杆と成り、ヨーロッパ(二九〇)、北アメリカ(四〇七)、南アメリカ(六八九)、オーストラリア(五三四)に比して、其の發達頗、劣り、僅にアフリカ(一四二〇)に優れるのみなるが、海洋と大陸の中心との相距ることアジアの如く甚しき處は他に類例を見る能はずと云ふ。

地質 アジアの地質に就きては未、探究を経ざる處少なからざるを以て詳細に之を知る能はずと雖、探究せられたる地に就きて其の面積を比較すれば、第四紀の地最、多く、太古界始原界之に次ぎ、第三紀の地は最、少なきに似たり。

第四紀層

第四紀層はアルタイ山系アラタウ山脈、アラル海、ウラル山脈にて界せらるる地方を以て第一とし、ゴビ沙漠、タクラマカン沙漠の周邊、黄河の下流地方、印度半島の北部及、東海岸、ヤルマル、タイムイル兩半島地方、レナ河の中流地方、メソポタミア、スマトラ島の南東部等に發達し、第三紀層は印度支那半島の西部、イラン高原の南部及、西部、アラビア半島の南東部及、南部の沿海地方、小アジア半島、ボルネオ島、其他、ヒマラヤ山系、天山山系等の地方に存在せり。

中古界

中古界はアラビア半島の北部、オズ河の下流地方の外、秦嶺山脈と夏至線との間に於ける漠土、レナ河の流域并に天山山系、カフカズ山脈等の地方に多し。

太古界

太古界はヒマラヤ山系の西部、パミル高原、天山山系、アルタイ山系、黄河、揚子江より印度支那に亘れる地方、印度半島等にあるが殊にスタニスボイ山脈とイニセイ河との間に大露出あり。

始原界

始原界及、舊噴出岩の地はデカン半島に能、發達し、ヒマラヤ、カラコラム崑

新噴出岩

新噴出岩

嵩天山、アルタイ、サヤンの諸山系、山脈地方、バイカル湖地方、レナ河の支流なるキリウイ河地方、アムル河の流域、スタノボイ山脈の南西部、朝鮮半島、漢土、印度支那の各地、ボルネオ島、セレベス島、アラビア半島の北西部、ウラル山脈、其の他の諸地方に廣く散布せられ、以てアジアの骨格を爲せり。

新噴出岩の好露出は、デカン半島の北西部にあり、イニセイ河の支流なる下ツングスカの流域にも亦廣く見らる。此の外、カムチャツカ半島、千島列島、リソングダ列島に至る沿岸島嶼、アルメニア地方、アラビア、小アジアの兩半島にあり、而してイラン高原、興安山脈等の地方にも多少之を見ることを得。

山誌 本洲の山岳は全世界中最顯著にして、南北の趨勢を呈するものもあれども、其の多數は略東西の方向に走り、世界の屋棟と稱せらるるパミル高原を中心とす。此の處より起りて北東に越くものは天山山系、アルタイ山脈、サヤン山脈、スタノボイ山脈と成り、東に走るものはカラコルム山脈、崑崙山系、支那山系と成り、南東に於てはヒマラヤ山系と成り、西方に於ては一はヒンヅークシ、エルブールスカフカズ、タウルス等の山脈と成り、別脈はシリ

火山質山脈

山岳表

1. Kaufmann

ア山脈、アラビアの諸山と成れり、而してアルタイ山脈より出づる一支脈はキルギスの丘陵と成りて遙にウラル山脈に達し、又印度支那半島にアラカシヨマ、ベグーヨマ、シアンヨマ、アンナム山脈等の數脈あり、印度半島にはピンダア山脈、東西のガッツ山脈あり。

東部の沿岸島嶼には南北に之を貫ける火山質の山脈あり、南は大ソングダ列島のジャバ島よりフリッピン群島を経て我が臺灣島に入り、日本群島を過ぎりてカムチャツカ半島に越けるが、此の火山脈は太平洋の周邊を圍繞する火山線の一部なりと云ふ。

今茲に一表を作りて本洲山脈の概略を知らしめんとす、但し峠越と特記したるものの外、山系、山嶺、山脈、高原の名稱の下に細書せる地名は山岳の名稱にして括弧内の數字は海拔を表示する米突數なり。

中部 パミル高原 (5000) カウフマン (5000)

天山山系 ハンテシリ (5000) デスメゲンウラ (5000) ボグドウラ (5000)

アルタイ山脈 ツツサグドボグド (5000) ビエルハ (3500)

北東部 世界大地誌

天山山系

天山山系は東經六十七度より同九十五度に亘る大山系にして、幅は西部に廣く東部に狭く、長二千五百軒、面積一百萬方軒以上の地を占め、五條の並行山脈より成れるが、主として東西の方向を取れり、此の山脈は清國及ロシアの兩國に跨り、ロシアトルキスタンの高峯をセメノウ(四六八五)と云ひ、全脈中の最高峯ハンテンリ(七三四〇)は兩國の境に聳ゆ、而して尙、東方にグルムグリマイロありて、其の海拔は六千米突に近しと云ふ、氷河は少なからずして、インククル地方に舊火山の存在を認む。

アルタイ山脈

アルタイ(阿爾泰)山脈は、金山と云ふ、東西八度四十分、長六百六十八軒、幅四百四十五軒、面積約十四萬方軒にして、清國及ロシアの界内に亘れるが、平均高度は二千二百十九米突乃至一千三百七十二米突にして、最高峯ビエルカ(小白山)と雖、三千四百米突に及ばず、本山脈は北西より南東に走る數脈より形成せられ、タルバガタイなる一支脈はウラル山脈に向ひて

サヤン山脈

サヤン(塞楊)山脈は東經九十五度二十分より百六度三十分に至り、シベリア、蒙古の界を爲して、清國とロシアとに跨り、雪線は二千七百四十三米突乃至三千三百五十三米突なるが、最高峯をムンクサルヂク(三四九〇)と云ふ、本山脈とアルタイ山脈とを合稱してアルタイ非サヤン山系又は單にアルタイ山系と稱することあり。

スタノボイ山脈

スタノボイ山脈は始、ヤジロノイの名を以て蒙古の北方に起り、北東に伸びて、アジテロシアの外、バイカルに入り、蜿蜒して遂にベーリング海峡に達す、長四千二百七十軒あるも、高度は著しからず。

崑崙山系

崑崙山系は世界屈指の大山系の一なり、東西四十二度、四千軒に亘り、顯著なる隆起帯を爲せるが、古代の現出に係れり、分ちて三部とす、其の西、崑崙はパミル高原の東方に起りて、數多の並行山脈を爲し、北西西より南東東に走り、平均海拔は六千米突内外なるが、最高峯と雖、此の平均を超過すること九百米突以下なるべし、主脈、崑崙は東向してアカタヘと成り、北東に走りてツ

グスタバンタヘ、アルチンタヘと成る。其の中、崑崙は東經八十九度より同百四度に亘り、北西西より南東東に趣きて大河の水源地たり、平均海拔四千米突以上は西部に讓れども亦高峯に乏しからずして、殊に深谷幽谿に富めり、南北の幅は十五度に達し分かれて三派と成りツァイダムの如き高臺地を抱けり、北にブルハンブダ、西傾南山の諸脈あり、中にマルコボロ、積雪等の山脈あり、南にバヤンヘラ(巴顏喀喇)、ダンラ(當拉)等の數脈あり、其の東、崑崙は東經百四度に起りて同百十八度以上に達するが、漢土にありて南北の二脈に分かれ、北脈は大行山脈、其の他の山脈を抱きて黄河の北に趣き、南脈は岷山山脈より分岐して北派の秦嶺、伏牛等の山脈を爲し、南派の欄山山脈、大巴山脈等を爲す、海拔は漸、低下して三千米突を超過すること稀なるが、其の趨向も複雑と成りて方位は概括し難し。

支那山系

支那山系は一に南山山系と云ふ、漢土の南東部、八十萬方秊の地に亘る山岳丘陵の總稱にして、地勢の方向は大體に於て南西より北東に走れるも、宏大なる山脈、山嶺の存するなく、起伏凡庸にして、海拔は五百乃至七百米突に

過ぎず、最高峯と雖、二千米突に達するものなく、各處に於ける山嶺即、峠の如きも概、交通に困難を來たすに至らず、又東海の沿岸は鋸齒狀を呈して數多の港灣を抱けり、而して本山系は海を隔てて遙に日本群島の中央に達すと云ふ、要するに廣袤の宏大なると状態の特殊なるとに於ては世界に其の比を見ざる山系たるを失はず。

カラコラム山脈

カラコラム(喀喇崑崙)山脈は一にムスタヘ(氷山)山脈と稱す、長、八百秊内外、幅百五十秊あり、此の山脈の中には山岳の副王ダブサン(八六一九)を有するが、ラキポチ(七七九一)の如きは、ギルギット谷地を抜くこと六千米突に及べり又ムスタヘ峠(五七八二)、カラコラム峠(五六五四)、カラタハ越(五四〇〇)あり、海拔の平均、氷河の面積等に於てはヒマラヤ山系に優れるものあり、而して本山脈の雪線は北面に五千九百二十米突、南面に五千六百七十米突なりとす、ヒマラヤ(喜馬拉耶)山系は高山秀嶺に富めること世界第一なり、東西二十五度(東經七十五度より同、二十二百五十秊に亘り、南北の二脈より成れり、其の北脈は一千六百秊の長を以て印度とチベットとの分水嶺を爲せるが、西方ナ

ヒマラヤ山系

ンガバルバト(Nanga Parbat)峯に起り、カシミヤの中部を貫き、ヌンクン(Nunken)峯を戴き、ドラス(Dras)峠に於ては三千三百四十三米突、バララチ(Bara Lachit)峠に於ては四千九百二十八米突に下り、スピチの峡谷を形成し、ニチ越を興へ、ガンガの水源に當りて本脈の最高處たるバンデルブンチ及イブンガミン(Du Gamin)ガurlラマンダタの如き高峯を現はし、マリアンラ山脈(四七二五)を分派してサトレチとザンボとの流域を劃し、東方に趣くに從て稍低下するも尙五千米突以上に達することあり、其の南脈は西、中、東の三部に分かたれるが、四千米突内外の海拔を以てインドス河の東に起り、カシミヤの南西境を爲したる後、世界の最高峯たるガウリサンカルを始とし、カンチンジンガ(八五八二)ダワラギリ(八一七六)シースル(八四七二)等八千米突以上の高峯を現はせり、而して東方は未だ探検を経ざる處多し、本山系の雪線は北面に五千六百米突、南面に四千九百米突なるが、氷河には廣大なるものあり。

ヒンヅークシ山脈は一にヒンヅコー山脈と云ふ、アジア諸山脈の結節たるバミル高原より出づる西派大山脈の一部にして七度、六百五十軒に亘り

ヒンヅークシ山脈

エルブールズ山脈

五千米突以上の高峯に乏しからず、殊にナラチミル(七七五〇)は脈中の最高峯にして四時氷雪を以て蔽はる、本山脈は印度、アフガニスタンの境域を離れたる後、尙西に趣きてエルブールズに連なり、アナトリア高原に達せり。

エルブールズ山脈はカスピ海の南岸に並行してイラン高原の北界を爲せり、最高峯デマベンド(五四六五)は火山質にして之に次げる高峯はタフトインレイマン(Takht-i-Soleiman)四四〇〇なり。

アルメニア山脈

アルメニア山脈はロシア、トルコ、ベルシア三國の境に亘れるが、最高峯大アララト山(五一五七)はベルシア人のクヒノア(ノア)にして宗教上名高き火山なり、其の他にアラゲス(四〇九五)、ザブラーン(四八一三)等あり、又水源地としてエウフラト、ムラドタイ、チグリリス、クルル、アラス、チオロフ等の流出するあり。

カフカズ山脈

カフカズ山脈はカスピ海と黒海との間にありて、北西より南東に走り、長一千二百軒あり、一方に於てはバルハン山脈、コベットタハ山脈等に依りてヒンヅークシに連なり、他方に於てはヨーロッパのクリミア半島の諸山に接せり。

タウルス山脈

り脈中五千米突以上のもの數峯あり、エルブルーズ(五六四七)を最高とす。タウルス山脈は小アジア(アナトリア)高原の南を限れるが、海拔は顯著ならず、キプロス、クレタ等の島を経てヨーロッパ大陸に及べり。

河流 本洲の水脈に關する分水線は、常に顯明を缺くのみならず、又自然に反するものあり、即ち江河の多くは山間、山麓を洗ひて低地を求むるの順路に依らずして、山脈を縦横に切斷して進行流下せり、蓋し此等の河流は源を内部の臺地に發するを以て、其の外縁に當る山脈を横斷するに非ざれば、外海に注入する能はざるが故ならん。

水源地

本洲は其の境域内に降下する雨水の配流に對し、二大中心を呈供せり、其の一はヒマラヤ山系及びチベット高原にして、黄河、揚子江、メコン河、サルキン河、イラワチ河、ブラマプトラ河、ガンガ河、インドス河等の水源地なり、其の二はアルタイ、サヤン山系地方にして、黒龍江、レナ河、イニセイ河、オブ河等の巨流を發す、此の外パミル高原、アルメニア山嶽も各一小中心と稱し得べし、而して本洲の河流の中には水を大洋若しくは其の他の外海に注入せざるも

姉妹流

の少なからずして或は沼湖に入るあり、或は砂礫の中に流失するあり。

本洲の河流に就きて特に奇とすべきは二水脈が一對に流下して所謂姉妹流を爲すにあり、即ち水源は相接近するの地に發し、中流に至りて多少離隔すれども、下流は再び相近づく、若しくは相合して海に注げり、例合ばオブとイニセイ、黄河と揚子江、ガンガとブラマプトラ、インドスとサトレヂシルと、アマ、チグリスとエウフラトの如し。

本洲はアフリカ洲の如く一大土塊を爲さざるが故に高地と低地との配置も一様ならずして、爲にシベリア、支那、印度、イラン等數個の別世界を形成せり、從て江河も速に山地、高地を流下し、廣漠たる平野に出でて之を貫流し、數千紆の地を潤したる後、海に入るもの少なからず、さればアジアの巨流は概して中流以下に於て通舟の便を與へ、オブ、イニセイの二流を除けば、自餘の江河は概其の河口に於て三角洲を形成せり、而して三角洲の中には或は海中に突出するあり、或は溷底を填充するに止まるあり、左に本洲の主要なる河流を列舉せん。

本流	水源	河口	河長	支流
北極洋斜面 ウルング イルチシ オプ セレンガ アンガラ イニセイ レナ	アルタイ山系(南部) アルタイ山系(北東部) バイカル山脈	オプ海 イニセイ海 ノルテンシエルト海	五八五 四七五 四五〇	イシム トホル 中ツンアスカ 下ツンアスカ アルダン キリウイ
太平洋斜面 黒龍江 黄河 揚子江 西江 珠江(廣東河) メコン	ケンテイ山脈 パヤンハラ山脈(北面) パヤンハラ山脈(南面) 雲南地方 ダンラ山脈東端	サレン海 直隸海 東支那海 廣東海 南支那海	四四八 四九五 五〇〇 二〇〇 四八〇	松花江 烏蘇里江 汾水、渭水、洛水 岷江、嘉陵江、漢江 北江 東江 セマン セコン
印度洋斜面 サルキン イラワヂ	ニアリホルス地方 ダンラ山脈 チベットの高原南縁	マルタバン海 マルタバン海	三五七 二八〇 一九〇	ナムバン ナムガン ナムドキン シウエリ

ナルガン アラマ トラ ガンガ ゴタベリ インドス エウフラト シフト エルアラブ	ヒマラヤ山系(北面) ヒマラヤ山系(南面) 西ガツ山脈 ヒマラヤ山脈(北面) アルメニア山麓	ベنگガル海 ベنگガル海 ベングガル海 アラビア海 ペルシア海	二五三 二七〇 一四四 三一九 二六〇	アラマクンダ スマンシリ ジブナ ゴアラ カアール パンジブ チグリス
地中海斜面 キジルイルマク	アルメニア山麓	黒海	八五〇	
凹窪地 クラ ウラル アム シル	アルメニア山麓 ウラル山脈 パミル高原	カスピ海 カスピ海 アラル海	二三七 二七九 二五〇	アラス
閉塞地 テクス イリ	天山山系 天山山系	アラル海 アラル海	一六五〇	
世界大地誌 テクス イリ	天山山系	バルハシ湖	一五〇〇	クンハス カシ

本洲の河流を長さの順に列記すればイルチシ|| オプ、揚子江、メコン、セレンガ|| アンガラ|| イニセイ、レナ、アムル、黄河、インドス、サルキン、ガンガ、等を得流域の廣に依りて列舉すればウルング|| イルチシ|| オプ、セレンガ|| アンガラ|| イニセイ、レナ、アムル、揚子江、ブラマプトラ、インドス、メコン、黄河、ガンガ、等を得れども、現下の情況に基づきて吾人を裨益するの程度如何を考査すれば先、指を揚子江に屈す、之に次げるはガンガにして所謂無用の長物たるの嘆あるべきオプ、イニセイ、レナを措き、利害相半する黄河、便益を供するに充分ならざる黒龍江、インドス河等を擧ぐるよりも寧ろ西江、イラワヂ、エウフラト、メナン、等を推すの至當なるを觀るべし。

オプ(オビ)河は二源流を有し共にアルタイ地方より出づ、其の西派なるカツン河(六七二籽)はビエルハ山(三三五〇米突)より出で、其の東派なるビヤ河

ヤルカンド タリム	カラコラム山脈	ロブノル	カシガル
ヘルメンド	ヒンヅークシ山脈	ハムウン沼	ホタン
ヨルダン	アンチリパノン山脈	死海	二一〇 △サバタラ アルハンタア
			三五

(二三五籽)はテレツコエ湖五二〇米突を南東に距ること百餘籽の地に發し相合してオプ河と成り、チアルイシ、トム、チリム、等の水を容れ、北西に流れ、サマロスコイ附近にて北に轉じ、河幅四十籽の大河と成り、オプ灣を形成して北極洋に越けり、而してイルチシ河は略オプと並流せるがエクタハアルタイの南面に發してウルング河と云ひ、ウルング湖を出でてカライルチシと稱せられ、清國の域内を出だたる後、サイサン湖(四一三)を経てイルチシと成り、イシム河、トボル河と合し、トボルスク以下に於ては方向を北に變じてオプに會す、流域は三百五十萬方籽にしてウルング|| イルチシ|| オプの長は五千六百八十五籽に達せり。

セレンガ(薛靈哥)河(一二〇〇)はアルタイ山系中の杭愛山に發し、北東に流れてオルホン(幹兒洄)河(六〇〇)を合はせ、北に向ひてシベリアに入り、バイカル湖に注ぐ、同湖より出づる水はアンガラ(上ツングスカ)河と稱せられ、北流又西流してイニセイスク省の南方に至り、南來のイニセイ河に合す、イニセイ河はサヤン山脈の南面に發し、フケム(華克穆)河と成りて西方に向ひべく

ム(貝、克、穆)河と合して大克穆河と成り西流してケムチク(克、穆、齊、克)河を合はせ北流してロシアの地に越き、アングラ河を容れて北行し中下二流のツングスカを受け、一大河灣を爲して海に入る、而してセレンガリアンガラレイニセイは流域二百九十五萬方糎、長四千七百五十糎ありて北極洋斜面第二の長流なるも、數月の間凍結することシベリアに於ける他の諸流の如し。

レナ河

レナ河はバイカル湖畔の山脈に發源し、北東流してヤクーツクを經、方向を北に轉じ、三角洲(二萬方糎)を爲してノルデンシールド海に入る、支流にキチム、オレクマ、アルダン、キリウイ等あり、河身の全長は四千五百糎にして流域は凡そ二百四十萬方糎なり。

アムル河

アムル河は一に黒龍江と云ふ源流に二あり、其の一はシムルカ(什、勒、喀)河にしてシベリアのツホンド山(三四五〇)より發するインゴタ河と蒙古のケンタイ山脈より出づるオノン(敖、嫩)河との合流より成り、其の二はケンテイ山脈の南面に發してケルレン(克、魯、倫)河と稱し、バルハゴル并にブイノルの水を提げ來るウルスン(額爾順)河とフロン(呼、倫)湖に於て相會し、ダライゴルと

成りて流出し、大興安山脈よりクルヅルの名を以て出でたるハイラル(海拉爾)河を合はするオルクナ(額、爾、古、納)河(一にハルホーンと云ふ、西人は訛なり、二流の相合するや始めてアムル又は黒龍江と稱せられ、清國とロシアとの境を爲して曲々南東に越き、ゼヤ、ブレヤを容れ、松花江を受くる頃より次第に北東に轉じ、烏蘇里江と合してより、全く清國の地を離れ、タタル海峡の北に注ぐ、ケルレン、オルクナ、アムルの長は四千四百八十糎に近く、流域凡そ二百萬方糎あり、本江は水量多く、小汽船は水源より四百餘糎の所に達し得べきも、十一月より六月まで氷結するの不便あり。

黄河

黄河はバヤンハラ山脈の北東の面に起り、上流をアルタン(阿、爾、坦)河と云ひ、東流してチャリン(札、凌)及、オリン(鄂、凌)の二小湖(四二七〇)を過ぎ、屈折して甘肅省に入り、黄河と稱せられ、長城を横ぎりて北に出で、東に轉じ、一大彎曲を描きて、長城の南に下りて、渭水を合はせ、之より漸次北東に越きて、渤海灣に入る、本河は約四千二百糎の長、九十八萬方糎の流域とを有せるが、水勢急にして水淺く、河道一定せざるを以て、便益を供すること少なき河流なり、支

揚子江

流も亦著しきものに乏し。

揚子江は本洲第一の大河なり、上流をムルイウス、木魯伊鳥蘇と云ひ、パヤンハラ山脈の南西面に發するナムチツ、那木齊圖、トクトナイ、托克托乃、カチ（喀齊）等の數島蘭木倫（蒙古語にて）の合流より成れり、而して四川省に入りて金沙江、白水江と稱せられ、雅龍江を容れたる後、長江又は大江の名を得、南京以下を揚子江と云ふ、其の流向は洱海の北東までは畧、南南東なるも之より次第に北東、東南東等に屈曲し、崇明島の南を過ぎりて海に入る、本流の全長約五千百斤、流域百八十萬方斤あり、大汽船と雖、二千二百餘斤の上流なる宜昌に溯ることを得、灌溉、交通の便を與ふること實に大なり、支流には雅龍江の外、岷江、嘉陵江、烏江、漢江等あり、洞庭、鄱陽二湖の水も亦本江に入る。

西江

西江は雲南地方に發し、北盤江、南盤江の二源流を有せり、數水を合はせて西江と成り、東に流れて北江、東江を容れ、珠江と成りて廣東灣に注ぐ、其の長一千六百斤に過ぎざれども、漕運、灌溉の便を與ふる點に於ては本洲屈指の河流たるに耻ぢずと云ふべし。

メコン河

メコン河はチベット高原のダンラ山脈の東端に發し、上流をルンモンチツ、チツ、チムドチツ、ナムチツと云ひ、雲南省に入りて瀾滄江と云ふ、峡谷を南流して印度支那半島に來るや、ナムコンと稱せられ、メコンと成る、流向に屈折多く水勢穩ならざるも、コン瀑流以下に至れば、佳良の航路を與へ、ブノムベン附近に於てトンレサプ湖の水を受け、前河、後河を派して所謂四肢流を爲し、三角洲を抱きて海に入る、長は四千五百乃至四千八百斤と計上せらるるも、流域は一百万方斤を超過せざるべし、支流にナムフ、セムン、セコン等あり。

I. Quatre-bras

サルキン河

サルキン河はチベットの西部又は東部に發源すとせられ、未だ確説なし、上流をナプチツと云ひ、峡谷を流れてウイルチツ、ヌチツ、怒江、ルキアン、潞江、ルツエキアン（潞子江）等の名の下に、ヘム、雲南を経て、パルマに來り始めてサルキンと稱するが、ナムハ、ナムバン、ナムボン、スング等の支流を合はせ、アタラン河に會したる後、二派に分かれ、ビルガイオン島を抱きてマルタバン灣に注ぐ、河長は三千五百七十斤なりと云ひ、或は二千八百斤に過ぎずと云ふ、流域の如きも四十一萬八千方斤若しくは三十萬方斤と概算せらる。

ナルザンボ(チベット語にて高地)、雅爾藏布河は一にザンボと云ふ、ヒマラヤ山脈の北面、マナサラワル湖を東に距ること遠からざる、海拔約四千九百米突の地に起り、東流したる後、北東に趣き、北緯九十度、東經九十四度に達し、之より南東に折れてヒマラヤ山脈を迂回し、暫、チボン河と呼ばれ、多量の水を輸送して海に入る、流域百五十萬方糎、長二千五百糎以上あるも、効用は著しからず、支流にデボン、ブラマクンダ、スパンシリ等あり。

ガンガ恒河はイブンガミンの麓、直立四千二百米突以上の地に發す、アラクナンダ、バギラチ、デアナビの三源流は相合して南西に流れ、ハルドワルに至れば、水源を距ること二百三十七糎に過ぎざるに、海拔は僅に三百一十一米突に降り、之よりヒマラヤ山地とデカン高原との間を流れ、方向を南に轉じ、ブラマプトラと共に廣大なる三角洲を爲してベンガル海に注ぐ、河長は二千七百糎に餘り、九十三萬方糎の流域には無双の良耕地あり、灌溉、交通の便や絶大なり、支流はジムナ、ソングムチ、ゴグラ、ガンダク等を著しとす。
インドス河即、シンド河は一に印度河と云ふ、水源をチベット高原に於ける

海拔六千七百餘米突の地に發して、シंगाパー河と稱せられ、シエーク河を合はせてインドス河と成り、ギルキット附近に於て方向を南西に轉じ、スアール沙漠を左岸に控え、下流は十一派に分かれて三角洲を爲し、遂にアラビア海に注ぐ、長は三千糎以上に達し、流域は百十萬方糎に及べども、効用はガンガ河に及ばざること遠し、支流にはカブール、グアブ等あるが、殊にパンジブ(五河)を著しとす。

エウフラト河は水源をアルメニア山麓に發し、東西の二源流あり、相合して屈流し、漸次方向を南東に轉じて、メソポタミア平野を流れ、チグリス河を合はせて、シトネルアラブ河と成り、ベルシア灣に注水す、源委通じて二千六百糎あるも、航行の便は多からず、チグリス河はアルメニア高原の南西部チアルベグルの山地に發し、流勢急速なり。

クラ河はクル河とも云ふ、海拔三千百五十二米突のキシルギアダハに發し、北東或は東に流れ、漸次南東に趣きて、カスピ海に注ぎ、長一千三百二十七糎あり、支流のアラス即、アラクスはビンゴルダハ(三三三〇)の麓に起り、北東に

流れてロシアの地に入り、ロシア、ベルシア兩國の境を爲し彎曲を呈し、遂にシオアド附近に至りクラ河に合す。

ウラル河

ウラル河はウラル山脈中、北緯約五十五度の地に發し南流してオルスクに至り、流向を西に轉じ、ウラルスク以下は再び南流と成り三角洲を爲してカスピ海に注ぐ。本流は長約二千四百軒あり、オレンブルグ以下は大船を通ず。

アム河

アム河即ちアマダリアは古名をオクソスと云ふ、パミル高原の南東隅に發しヒアンヂと稱し、西流してサリコル湖より出づるバミル河を合はせたる後、流向を南に轉じ、カラコル湖より出で、アクス河を合はせ來るムルグアブを容れ、バダクシオン地方を過ぎ、アフガニスタン、プハラの境を爲して西に流れ漸く北西に向ひ、三角洲を抱きてアラル海に注ぐ。本流は四十五萬方軒の流域を有し、源委通じて二千五百軒あり、ヒバ泉地に灌溉の便を與ふること少なからず。

シル河

シル河即ちシルダリアは上流をナリンと云ひ、天山山系中のベトロフ氷河に發す、而して本河は多少屈曲せるも、アム河と畧し並流し、三角洲を爲して亦

テクス河

アラル海に入り、一千六百五十軒の長と二十八萬方軒の流域とを有せるが下半部は航行するを得べし。

テクス(特克斯)河は天山山系ハンラン山の北西に發して、清國內の地に越きクングス(崆格斯)河に會し、カシ河を容れてイリ(伊犁)河と成り、西に向ひてロシアの地に還り、北西流してバルハシ湖に入る。長は一千五百軒内外なるが下流は數派に分かる。

沼湖 本洲は著大なる沼湖に乏しからずして、中には海と云ふ名稱を附するの穩當なるものあり、然れども多くは閉塞地若しくは凹窪地に水の溜せしに外ならざれば、水底の深きものは甚だ多からず、特にロブノル、ハムウンの如きは乾涸濕潤常ならずして廣袤の一定せざる沼地なり、又バイカル湖の如く山間湖にして重厚なる水層を湛えたるものも亦少なからざるが、廣袤は甚だ顯著ならず、左に本洲の主要なる湖沼を列舉せり。

湖沼名	面積	長	淵	高度	水深	水質	排水口

カスピ海	四三、八六九〇 ^方	一二六〇 ^方	四五〇 ^方 (海面) 三六 ^方	九四六 ^方	無	
アラル海	六、七九六〇	三五〇	二八〇	六八	無	
バイカル湖	三、四九七五	六七二	一〇〇	四七〇	二四八	淡
バルハシ湖	二、〇六〇〇	五四七	八五	二七五	一五〇	鹹
イシククル	五七八〇	二〇〇	五三二	五五四	?	淡
ココノル(青海)	五二〇〇	一〇七	六三三	〇五〇	?	鹹
洞庭湖	五〇〇〇	一一〇	六〇	?	?	淡
鄱陽湖	四五〇〇	一三〇	五〇	?	?	淡
ウルミア湖	四四二〇	一三五	四六二	二八九	一四	鹹
ハンカ湖	四三八二	九六	八五	四九	一一	淡
パン湖	三六九〇	一二五	四五	一六二	五	鹹
クスクル湖	三三〇〇	一三〇	四八	一六二	?	淡
ロブノル	二二〇〇	一〇七	二一	七九〇	四	淡
トシレサブ湖	一六〇〇	一一〇	四〇	?	一五	淡

三十四

ゴクチア湖	二二九九	七一	二七一	一九三二	一一〇	淡
死海	九一五	七六	一七	(海面) 三五四	四〇〇	鹹
						無

カスピ海即ち裏海は世界第一の大湖にして西、北、東の三面はロシアの地、南の一面はペルシアの地に依りて圍まれたる無口の鹹湖なるが、面積約四十四萬方軒ありて我が日本より長く、長一千二百軒を超え、湖四百五十軒あり、其の水面は黒海面に比すれば二十六米突低下し、水深は九百四十六米突を示す處あり、ボルガ、ウラル等の諸河此處に注ぐ。

アラル海は無口湖にしてアム、シルの二河を受くるも、水質鹹味を帯び、面積は縮少しつつあるが約六萬八千方軒あり、長三百五十軒、湖二百八十軒にして海拔四十八米突に位し、水深一般に浅く六十七米突を以て最大とす。

バイカル湖は本洲第一の淡水湖にして約三萬五千方軒の面積を有し、長は六百七十二軒、湖は三十乃至一百軒に達し、海拔は四百七十米突に過ぎざるも、水深は一千二百四十八米突に及びて世界の最深湖なり、而して百七十五流の水を受くと稱すれども顯著なるはセレンガ、アンガラ、バルグジン等

にして湖水は上ツングスカ河即下アンガラ河に依りて流出しイニセイ河に通ず。

バルハシ湖は亦無口の鹹湖なるが二萬方糎以上の面積を有し、長約五百五十糎、淵八十五糎あり、海拔は二百七十五米突にして水深は百五十米突以内なりとす、然れども湖上に洲嶼多く湖岸明確ならずして、イリ其の他の河水を受くるも湖水は漸次减退して其の跡を失ふに至るかを疑はしむ。

地勢 本洲は高嶺秀嶺に富むを以て、五大洲中、地勢最高く、平均高度は九百五十米突なり、而して高地と低地との配置に就きても一種特別の状態を呈せり、アフリカ及オーストラリアに於ては、周圍に山脈を繞らし、中央に低處を包む一塊の臺地なるが、之に反してヨーロッパに於ては、山地は半島狀を爲し、凹處は海水の浸す所となり、平野、臺地の如きは其の廣袤甚大ならず、然るにアジアの地貌を觀るに高原は殆皆相連續し、其の主要なるものに至りては廣袤敢てオーストラリアに譲らざるが如し、而して小アジアの三面とイランの南面とを除けば、其の他の高原は直接に海洋に接することなくし

山地

て、廣漠たる平野は高原の周邊を圍繞するか或は其の間に侵入せり、此の特異の地貌は本洲をして風俗を同じうせざる數個の別世界の集合地たらしめたる所以にして、メソポタミア、印度及支那の三世界相互の關係が疎なりしは實に本洲がヨーロッパ、アフリカ等の他大洲に對すると一般なりしなり。山地は本洲の中央に横たはれるパミル、チベット、イランの高原を始とし、東は天山山系、アルタイ山系、カムチアツカ山脈等に存し、西はアルメニア、アナトリア(小アジア)の高原、カフカズ山脈等に在りて、海拔は二千米突以上に達し、面積は七八百萬方糎を占む。

パミル高原

パミル(キルギス山系)高原は天山、崑崙、カラコラム、ヒンヅークシ等の諸山系山脈の會合する處にして、パムイヅニア(Bam-i-Dunia)世界の屋棟と稱せられ、北にアライ、トランスアライの諸山脈、カウフマン山(七〇一〇)、キシルアルト峠(四四四〇)、東にカシガル諸山、ムスタハアタ(七八六〇)、ウスベル峠(四六三〇)、ネサタン峠(四五五〇)、南にヒンヅークシ山脈、チラチミル(七七五〇)、パロキル峠(三七〇八)等を控え、西方に向ひて、豁谷を開けり、面積は僅に十萬乃至

八萬方呎に止まるも、平均海拔は四千乃至四千五百米突に達し、カラクル(四一九〇)、ソルクル(六九八〇)、イェシルクル(三七七〇)等の湖ありてビアンヂ(アム河の上流)、バミル、ツルツ、ムルグ、アブ、スル、ハブ、キジルス等の諸流は此の地に發す、冬季はツンムク(南西風)の吹き荒むありて、積雪甚多く、夏季には温度稍高く、灌溉の便ある地には雜草茂り、牧民の來牧するあり、樹木は稀にして、野獸には狐、狼、熊等を見るに過ぎず、而して政治上、本高原の大部はロシアに屬するも、其の他は清國、アフガニスタンの領する所なり。

チベット高原

1. Duplex
2. Elysee Re-
clus

チベット高原は其の高隆なること世界無比にして、南はヒマラヤ山系、ダヤバン山(七二四三)、ゴサインタン山(八〇一八)、ガウリサンカル山(八八四〇)、チャマラリ山(七二九八)に、北は崑崙山系に屬するアッカタハ、アルチンタハ等に依りて限られ、内部にもマルコポロ、クレボー、デブレイス、ダンラ等の諸山脈發え、火山にはエリゼルク、クリュー、ルイスブル等あり、七八千米突の高峯少なからず、殊に南東部は數山脈並行して幽谷を形成せり、土地の平均海拔は四千米突と稱せられ、ココノル(三〇五〇)、テンリノル(四六三〇)、バルチ湖(四二〇六)、ホル

パチ(五四六五)其の他、數多の湖沼ありて、黄河揚子江、メコン、サルキン、イラワヂ、ブラマプトラ、サトレヂ、インドス等の諸流皆此の地に發源す、氣候最、大陸的にして、空氣乾燥し、風力逞しく、地味多くは瘠せて、植物に乏しく、農業も多少行はれざるに非ざるも、居民は犂牛、其の他の家畜の飼養を以て主業と爲すと云ふ。

イラン高原

イラン高原は東の方バミル高原と西の方アルニア高原とを連絡し、北にヒンヅークシ山脈(カバク峠(三五四八)、チャハルダル峠(四二二六))、パロバミンヌ山脈(クローイバ(五四八六))、エルブールズ山脈(デマベンド(五四六五))等を控え、東にソレイマン山脈(ビルゴル(三五六〇))、ダフトイソレイマン(三三四三)、ブラフイ山脈(クローイムラン(三六五〇))、登々、南にザグロス山脈(クローイデナ(五二〇〇))、ジュヘルブークン(三二二三))あり、内部にはハムウン、ニリス、シラス等の鹹湖とヘルメンド、其の他の閉塞流を有し、外縁山脈を破りて流出するものはセフィールド、カプール、カルン等あり、氣候は最、大陸的にして、空氣は乾燥を極む、域内多くは大沙漠、ルート沙漠の如き不毛の地にして、牧民の漂遊するに

過ぎざるも、水利ある地方には農耕行はれ、政治上ベルシア、アラガニスタン、バルチスタンの三部に分かれたり。

アルメニア高原

大アララットの高さ

アルメニア高原はクラ、アラス、チグリス、エウフラト諸河の水源地にして長八百軒あり、潤略之に等し、内部は八百乃至二千百米突の臺地より成り、大アララット(五一五七)其の他三千米突以上の高峯少なからずして、湖には、ゴクチ(一九三二)バン(一六二五)タレミア(二二八九)あり、高臺に於ては氣候殊に酷烈なり、本高原はロシア、トルコ、ベルシア三國の分領に係り、住民は農牧に従事するアルメニア人の外、トルコ人、クルド人、タタル人、オストリア人、シオルジア人、ギリシア人、ユダヤ人、ギブシー人等あり。

高地

高地は海拔二千米突以下五百米突以上の地にして沿海シベリア、モンゴリア、カシガリアを始とし、漢土の北西部并に南部、印度支那、マライ群島、テカントアラビアとの二半島等に亘り、乾燥に失する砂礫の地たるターナルト、タクラマカン、ゴビ等の如き沙漠を抱括せるが、面積は本洲の半を超過すべし。

低地

低地は海拔五百米突以下の地にして、本洲の三分の一を占むるが、北西シベリア、トルキスタン、モンボタミア、ヒンズースタン、シム、漢土の北東部、滿洲等に存在し、地味肥沃にして吾人の生存に最、適當する平野多からざるに非ざるも、亦氣温極めて低く、生物稀なるツンドラ(凍土)あり、乾濕常なく、樹木の繁茂を許さざるキルギス、バラバ等のステップ(草原)あり、濕氣缺乏して砂礫に蔽はるるスール、カラクム、キジルクム、アククム等の沙漠あり。

窪地

窪地は死海沿岸、カスピ海の近傍に存するが、蒙古に於けるツルファン(吐魯番)附近にも海面下五十米突に位するの地ありと云ふ。

此の如く本洲には山地、高地、低地、窪地の四種備はり、最高の山岳、最低の窪地ありて肥沃なる平野、饒確なる沙漠、大高原、大低地と共に趣味ある反對を現出せり。

氣候 本洲は概して温帯に屬し、南の方熱帯にあるもの并に北の方寒帯にあるものは實に一小部分に過ぎず、大陸は極南の地たるブル岬と雖、赤道に達することなく、唯、ソンドラ列島の中央に於て、此の線の通過するあるのみ、

年同温線

然れども本洲が宏大なる陸地を爲すと、高低二地に特種の配置あるとに基づきて氣候は概大陸的と成り、寒暑の差激烈なるを免るる能はず、即南東の地方及小アジアの沿岸地方を除けば本洲は一般に海洋の温和なる影響を蒙らずして氣温變化の烈しきは實に他に其の比を見ず、ベルシア灣沿岸の地の如きは北回歸線の北にあれども炎熱の酷烈なる點より云へば稀有の地と稱すべく、シベリアのベルホヤンスクに於ける寒暑の差は六十六度餘に達し、最低最高兩温度の差は八十五度に及ぶと云ふ、然るにヨーロッパのステーデンにある同緯度の海岸にては寒暑の差の平均は十五度乃至二十度なり、要するに年同温線圖の示す所に據れば本洲の東部は西部より氣温稍低く、南部は北部に比し概高温なれども極寒極暑は極北極南と符合せず、茲に主要なる年同温線に就きて位置状態を略示せんとす。

(1) 二十度同温線 本線はシリア、メソポタミアの北方、北緯三十七度に於て最北進し、印度、印度支那の北境より尙北にありて支那の東部北緯二十六度に於て最南下し、小アジアの南岸よりテヘランの南方、ヘラット、ラササの北方、

一月同温線

琉球列島の北部を通過す。

(2) 十度同温線 本線はカフカズの北方に於て北緯四十七度に達し、カスピ海、アラル海を横ざり、バルハシ湖の南岸、北京、朝鮮半島の北部に於て北緯三十八度に下り、我が本州島の北端を過ぐ。

(3) 零度同温線 本線はウラル山脈附近に於て北上を極め、トボルスクよりオムスクの北方、トムスクの南方を過ぎ、バイカル湖の西部に於て著しく北に凸出し、湖の南岸を經、シボクアリン山脈に至りて北緯四十八度に下り、カラフトの中部、カムチャツカの南部を通過し、四條の年同温線中最、屈曲多し。

(4) 零下十度同温線 本線はオプ灣を南部に於て横ざり、略一直線に北緯六十二度のヤクトックに至りて更に北東の方ベリリング海峡に向へり。

一月同温線は概して南方に凸出し、殊に東經百二十度内外の處を以て然りとす而して北上するに従て圓形を描きて漸次半徑を短縮し、ベルホヤンスクを以て寒極とす、左に主要なる四線の位置を略記せり。

(1) 二十度同温線 本線はアラビア半島の西岸北回歸線の少しく北に於

て起り北緯十八度を境とし南方に彎曲して斜に半島の南東部を横ざり、カッ
チ灣、ガンガ河口の南を經、漸次南下しメコン河邊の北緯十七度の點に達し、
之より北東に向ひて臺灣、ルソンの間を過ぐ。

(2) 零度同温線 本線はクリミア半島に起り、チフリスの北を經てカスピ
海のカラアガス灣、タシケントの南を過ぎ、之より北緯三十五度の黄河の上
流に下り、更に漸次北東に向ひ渭水、黄河の一部と合し、山東半島の南方、朝鮮
半島の南部、我が本州島の北部を通過せり。

(3) 零下二十度同温線 本線はノワヤゼムリ島よりウラル山脈の東トボ
ルスク附近を經て北緯五十五度に下り、之よりバイカル湖の南西部までは
凸面を北に向くるも、更にケルレン河、松花江の南に下り、凹部を其の北に呈
してアムル河を含み、河口附近よりは北東に向ひカムチャッカ半島を横ざり、

(4) 零下四十度同温線 本線は圓形を描きてレナ河の下流にあり、北極圏
は其の中部を横ざりて徑と成り、百二十度、百四十度の經線は割線を爲せり。
七月同温線は最、屈曲に富み、北部にては兩線間の距離密なるも南部にて

は粗く、概して陸地の内部に於て北方に凸出せり、主要なる四線の位置大要
左の如し。

(1) 三十度同温線 本線は北緯二十度の紅海岸より北上しシナイ半島の
東、地中海岸を經、北緯四十度の線と合し、カスピ海の南岸に並行してテヘラ
ンを通過し、北東に越えてヒバを經、北緯四十二度のイシクル附近を最北
として北東揚子江を超え、西走して南に折れ、以てヒマラヤ山系を横ざり、北
回歸線附近より次第に北に向ひてイラン高原の沿海方面、アラビア半島の
東岸、南岸等を経、紅海の口を横ざり、此の如くにしてアラビア半島、メソポ
タミア平野、イラン高原、等西アジアの大部、印度半島の北西部、チベット高原の
大部、漢土の一部、蒙古の南西部、トルキスタンの南東部等は皆三十度の線内
に含まる。

(2) 二十五度同温線 本線は二あり、其の一は赤道以南のアフリカより來
り印度洋を東に進みてソンド列島の南を過ぐ、其の二は小アジア半島の北
部より屈曲して北緯四十六度のボルガ河口邊に達し、之より略一直線に東

に走りカスピ海の北部、アラル海の北岸、バルハシ湖の北方等を経、漸々南方に向ひて遼東半島より朝鮮半島の南西部を過ぎ、彎曲して本州島の中部に達す。

(3) 二十度同温線 本線は北緯五十七度のボルガ河畔よりオプ河の上流を横ぎり、バイカル湖の北西にて屈折し、湖を迂回して又著しき彎曲を描き、アムル河の下流より朝鮮半島の東岸に下り、北東に趣きて十州島の渡島半島に及べり。

(4) 十五度同温線 本線はオプ灣の南西よりイニセイ河の下流に於けるツルファンスクを過ぎて北極圏の北に出で、東に進みてベルホヤンスク附近を経て後南方に屈りカラフト島を南に下り、千島列島に沿ひて北上し、カムチツカ半島に達せり。

年同壓線

年同壓線に就きて記さんに高氣壓は大陸の内部に存し、低氣壓は太平洋、印度洋方面にあるが、南緯十五度以南の地には更に平氣壓以上の處あり。

(1) 七百六十五耗同壓線 本線は蒙古の北部(北緯四十五度よりシベリア

の南部(北緯五十五度)に亘りて東西に向ける大軸の楕圓を描けるが、アムル河の上流、バイカル湖の殆ど全部、アンガラ河及イニセイ河の上流等に屬する地域を含めり。

(2) 七百六十二耗同壓線 本線はボルガ、カマ兩河の會點よりベルム、イェカテリンブルグの間、ツルファンスクの北西を経て北東に進み、東經百五度の地に於て北緯七十度に達し、後南東東ベルホヤンスク附近に向ふが、之より東經百三十五度の經線を略、東至として南に下り、九州島の北西部を離れたる後、南西に進みて廣東の北(北緯二十四度)に至り、次第に北に偏しつつ西に趣き、ヒマラヤ山系の北、ヤルカンド、及カスピ海の南を経て小アジアの北岸に至れり。

(3) 七百六十耗同壓線 本線は二あり、其の一はシナイ半島の南部より北東に進みてザグロス山脈を横ぎり、北緯三十五度の緯線と略一致するも、東經七十五度の邊よりザンボ河の北を経て南東の方、海南島の南に下り、北東に折れて臺灣の南を過ぎ、彎曲して太平洋を通過す、其の二は東經百三十五

度附近より西經百三十度に至り、北緯三十八度乃至同六十八度に亘る連環的曲線にしてシベリア沿海州の一部、カラフト島、千島列島、カムチャツカ半島等を含みて北アメリカの北西部に及ぶ。

(4)七百五十七耗同壓線 本線も連環的曲線を描きて三ヶ所にあり、其の一は赤道以北北緯三十三度までの間にありて西は東經十五度、東は同九十八度に至り、アラビア半島の南部、イラン高原の南東部、印度半島、セイラン島、印度支那半島の北西部等を包めり、其の二は東經百五度より同百六十七度に至り、赤道の南北に跨りてボルネオ島、セレベス島、中部以南のフリッピン群島等を包めり、其の三はカムチャツカ半島の大部、千島列島の小部、アラスカ半島等に亘り、七百六十耗同壓線の内部、七百五十四耗同壓線の外部にあり。
一月同壓線に就きて述べんに低氣壓は太平洋、印度洋等にあり、最高氣壓は大陸の内部にありて七百七十八耗を示せり。

一月同壓線

(1)七百七十八耗同壓線 本線は東部シベリアより蒙古の北部に亘り、楕圓に近き形状を呈して南西より北東の方向に長徑を有し、クスケル湖、イル

クーツク、バイカル湖、オノン河を含み、レナ河畔のヤクーツクの下流等に及べり。

(2)七百七十六耗同壓線 本線は前線の外方に位し、頗る南西の方向に擴がれり。

(3)七百七十四耗同壓線 本線は七百七十六耗同壓線の外方にありて之を包める、七百七十二耗同壓線はバルハシ湖の東半、タリム河の中流以東、黄河の水源、涓水と黄河との會點、アムル河の上流、ベルホヤンスク附近を包含せり。

(4)七百六十耗同壓線 本線はノワヤゼムリア島より新シベリア群島を過ぎて東に越くものもあれども殊に著しきはベーリング海よりカムチャツカ半島の頸部を過ぎ、オホータ海の岸と畧一致して南に屈り、カラフト島、十州島を過ぎたる後、大凸出を東方に現はして西に趣き屈曲して北緯十九度或は北緯十度に達するが、ルソン島、印度支那半島、印度半島の大部、アラビア半島の全部を包めり而して本線の南に尙低壓線あり。

此の如くなるを以て冬季東部は北西又は北の風多く、南部に北東の風吹き荒み、其の他にありては風向區々たり、而して此の季の風は概して乾燥なりとす。

七月同壓線

七月同壓線に就きて記さんに最低氣壓は七百四十八耗を示し南部の高氣壓は印度洋ソンド列島に、北部の高氣壓はシベリアに存せり。

(1) 七百四十八耗同壓線 本線はイラン高原より印度半島の北西部に亘りて楕圓形を爲せり。

(2) 七百五十耗同壓線 本線はアラビア半島の東部、イラン高原の大部、印度半島の北部、印度支那半島の北西部、漢土の西部、蒙古高原の南西部、トルキスタンの南東部に跨り、東經九十度の經線下にて多少形を損せるも楕圓形に近し。

(3) 七百五十二耗同壓線 本線は前線の外方にありて一層其の包含地を廣くせり。

(4) 七百五十四耗同壓線 本線はアラビア半島の大部、イラン高原の全部

印度半島の大部、印度支那半島の北部、漢土全部、蒙古及トルキスタンの大部等を含めり。

此の如くなるを以て、アジアの北部及中部の最多風は七月に於て北東又は北の方向を呈し、西アジアにては北西、印度、印度支那并に南支那にては南西又は南なり、此等の風向中南西若しくは南の風は濕風にしてムンスーン即ち季候風なるが、其の他の風は乾風なり。

雨量は其の配布一様ならずして或は數年間一滴の降雨を見ざる處あり或は一年十五米突に達する地あり、今雨量を分かちて五等とし各に屬する地方の大略を示す。

(1) 二十糎以下の地 北極圈以北に於ける沿海地方、トルキスタン草原、ゴビ、タクラマカンの兩沙漠地方、アラビア、イランの大部、印度の北西部、デカン高原の内部にあり。

(2) 二十糎乃至六十糎の地 カムチャツカ半島の中部、宗谷海峡、朝鮮半島の北境、白河口より黄河、渭水、揚子江、メコン河を横ぎり略ヤルザンボ、インドス

河を連ぬる線の北西部、インドス河以西の殆ど全部を占む但し(1)に記せる地及アラビアの一小部等を省きスール沙漠附近の處に於て若干の地を加ふ。

(3)六十種乃至百三十種の地 黄河、揚子江の下流より帶狀を爲して南西に走り南下して印度支那半島の北東部を占め、一小支はヒマラヤ山系の北麓に亘れり、此の外、印度半島の大部、アラビア半島の南部、地中海岸、小アジア半島の北西海岸、朝鮮半島全部、カムチャツカ半島の南部等皆同量なり。

降雨時期

降雨の時期に關して記さんに、北部及コーカシアの西海岸は四季に、ギルギス草原の北部、アルメニア山麓、小アジア高原は春秋に、トルキスタンの南部、イラン高原の北部及南西部、シリア及小アジアの沿海地方等は冬季に降雨あるを見る、此の如くにして西方地中海、紅海より東方殆ど太平洋に達し南はヒマラヤ山系に界せらるる寒雨の地は降雨期至りて短く、草原若しくは沙漠を爲して地味硬確なれば牧畜には適せるが、住民甚だ稀薄なり而して耕種は絶對に行ふこと能はざるに非ざれども、非常なる勞力に依るに非ざれば効果を奏し難し、若し人力の退くことあらんか國土は一朝にして沙漠

沼澤の地と成ること西アジアの歴史の明示する所なり。

然れども眼を轉じて南東アジアの季候風地方を見よ、何ぞ情態の相反するの甚しきや、此の地方は夏秋に降雨多く、年雨量の平均は四米突に達し、中にはチラパンシの如く一千五百五十種に達する處あり、此の如く降雨多量なるのみならず、氣温は炎熱に過ぐる嫌あれども激變の憂少くして、印度ソングダ列島より南東支那并に日本の南部に至るまでの地に熱帶的植物の繁茂を來たし、又降水の多量なる爲、大河巨流多く、此等の河流は肥沃なる壤土を輸送し來りて豊富なる平野を成生し、以て全世界中人口の最稠密なる地方たらしめたり、然るに時として此の地方に猛烈なる饑饉の現出するは何の故ぞ、蓋し此の貴重なる降雨は毎年夏季の季候風が勢力を逞しうする場合に降下するものなるが、風向の變化、濕候の到來に多少の遲速ありて、温熱と降雨との關係即降雨の多寡と時機との適合ならざるが爲なり。

天産生物即動物植物の分布上、本洲の大部は舊北區に、アラビアの南部はエシオピア區に屬せるが、印度半島、澳土の南部、印度支那半島及附近の島嶼

等は東洋區の中にあつて、パリ、ロンボク及ボルネオ、セレベスの間を通過するワレース線はアジア、オセアニア兩洲の生物的境界線たり、而して生物の分布は氣候、地味等に關すること極めて大なるが故に、本洲に於ける動植物の配布は均等を缺きて偏重偏輕最著し、さればアジア全洲が人類の棲息地として均しく開明の恩澤に浴するの日は蓋し得難かるべし。

植物

植物 *グリセバチ* (*A. Grisebach*) 氏の植物分布論に基づけば二十四區中の六區は本洲に關係ありて北極帶、森林帶、地中海沿岸帶、草原帶、東方帶、印度季候風帶即、是なり、而して分布の境界に就きて本洲をヨーロッパ洲に比較せば多少退縮せるものあるを観るべし。

洲	穀類	葡萄	荷	椰子	樹
アジア	北緯	六二	北緯	四二	北緯
ヨーロッパ	同	六八	同	五二	同
					四二

北極帶は溫熱の缺乏せる爲、僅に地衣、蘚苔の生存を観るに過ぎざるン

ドラ(凍土)地方なり、森林帶は樹木繁茂の盛なる一帯の森林にしてロシア人の所謂タイガ(Tiga)なるが斷續定まりなく廣狹一ならずして稀には北緯七十度を越ゆることあるも、概し北極圈以南にありて平均一千軒内外の幅を以て西シラル山脈より東カムチャツカに亘り、宏大なる面積を蔽へり、而して樹種の主要なるものはシベリアマン(Larix sibirica)シイタン(Larix Dahurica)クタン(Pinus Pichta)セムンロマン(Pinus cembra)ニハムシツノカン、Betula nana)ヤナシ、Populus tremula)ニハムシツノカン、(Alnus viridis)等あり、草原帶は本大陸の中央に横たはれる乾燥地にして濕潤の不足と間斷とは多年性植物殊に樹木の發育存在を許さざるステップ(草原)を概括せしものなり、寒暑の變差、湿度の情態は地味、土質と相待ちて生草の種類に同異を來たすは自然の結果なれども、サクサツル(Haloxylon ammocendron)チリヌン(Lasiacotis splendens)等は當帶固有の植物として名を知らる、地中海沿岸地方の果樹に富める、東方地方の殊に耕種植物に豊なるは今更喋々するを要せざれども、天然林に減少退縮あるは起因の相反するに拘らず、此等兩地方に通ずる現

象なりとす。翻りて印度季候風帶即印度支那、印度、マライ群島（南方マライはナに屬す、イ等を觀るに、地味豊饒氣候温暖にして植物の繁茂は盛を極め、干樹萬草實に枚舉に遑あらず、就中印度の菩提樹(Ficus indica)、娑羅雙樹(Shorea robusta)、印度支那の「チー」麻栗(Tectonia grandis)、「ライ」群島の波羅密樹(Artocarpus integrifolia)、高山の「カヤ」杉「カヤ」(Cedrus deodora)、水邊の「バン」ローン(Rhizophora mangle)食品を供する「サヤ」(Sugus rahia, S. Rumphii)香料を興ふる肉苣蓉(Myriolycia aromatica)、胡椒(Piper nigrum)、肉桂(Cinnamomum aromaticum)、「ト」子(Eugenia aromatica)木材中の貴品たる紫檀(Pterocarpus santalinus)、黒檀(Diospyros peregrina)、鐵刀木(Mesua fera)、各種の用木「セ」ン「ヤ」ン(Cocos nucifera)、樹頭椶(Borassus flabelliformis)、藤(Calamus rotang)、竹類(Arundinaria, Bambusa, Phyllostachys)、「タ」ン「キ」絲蘭(Pandanus odoratissimus)等最著し。

栽培植物には米、大麥、小麥、燕麥、「ライ」ム「キ」(Secale cereale)、蕎麥、胡麻、稷、黍、蜀黍、玉蜀黍等あり、大豆、蠶豆、豌豆、菜豆、紅豆等あり、甘藷、馬鈴薯、大薯等あり、茶、珈琲、甘蔗、烟草、罌粟(Papavera sumnmutifera)等あり、綿草、大麻、亞麻、黃麻、「ム」ハ「カ」(Musa a-

動物

Lacaj ロヤンナキ (Indigofera tinctoria) 桑、楮等あり、椰子(Phoenix dactylifera) 梅、桃、杏、李、巴旦杏、荔枝、蕃石榴、葡萄、甜瓜、西瓜、橙、柚、柑、梨、林檎、枇杷、柿、胡桃、栗、鳳梨、香蕉、無花果、マン、メ、タン(Garcinia mangostana)、「オ」リ「ン」(Olea europae)等あり。

動物に就きて顯著なるものを擧ぐれば、哺乳類に狸々(Phitecus satyrus) 青狐(Canis lagopus) 銀狐(Vulpes album) 獅子、虎、豹、野貓(Viverra civetka) 靈貓(Viverra sibirica) 銀鼠(Putorius ermineus) 黒貂(Mustela zibellina) 熊(Ursus malayanus) 羆(Ursus arctos) 白熊(Ursus maritimus) 象(Seiurus vulgaris) 象(Tapirus indicus) 犀(Rhinoceros indicus, Rh. Java-nensis, Rh. Sumatrensis) 麝(Moschus moschiferus) 馴鹿(Tarandus mougiferus) 麝(Manis lactica-uda) 鱉（甲を穿し山甲と稱す） 水獺(Lutra vulgaris) 海獺(Ehydria marina) 鼈(Trionyx) 海龜(Otaria stelleri) 海豹(Phoca vitulina) 海象(Trichechus rosmarus) 海馬(Halicore dugong) 鯨等あり、鳥類に鷓鴣、金絲燕(Collocaria esculenta)、「サ」ナ「ヤ」ン(Lophophorus impeyanus) 彩鷄(Phasianus picta) 銀雉(Gallinophasis nycthemerus) 孔雀(Pavo cristatus, P. muticus) 丹頂鶴等あり、其の他に鰐魚(Crocodylus hipocatus)、「タ」ム「ン」(Gavialis gangeticus, G. shlegelii)、「タ」ム「ン」(Naja tripudians) 海蛇(Hydrophis) 鱉(Python tigris) 等あり、蛇、蟻、蠅、蝶、蜂等

に中部に在るものは朝鮮人、滿洲人、支那人、アンナム人、バルマ人、チベット人、トルコマン、キルギス等の種族に分かれ、本邦人の如きも此の派に屬するもの如し、而して黄色人種の一部はカスピ海の西なるコーカシア又は小アジアの地に於て他の人種と共に雜居せり、黄人に屬するものの總計は五億七千五百萬にして居住區域は本洲の三分の二に達すと云ふ。

ドラビダは其の系統不明なるも黄種に屬するが如し、印度最舊の住民にして他種族の來住ありし爲、今は僅に半島の南部及びセイラン島に生存せるのみなるが、其の數は四千萬内外に達するなるべし。

マライ種はドラビダの如く一亞種として黄色人種中に數へらるるものなるが、其のマライ派はマライ群島、マライ半島の一部に棲息し、總數は三千萬内外ならん、其のインドネシア派はソンド列島の内部に棲居せり。

コーカズ人種は白色人種とも云ひ二派に分かる、アーリア派、即ちインドヨーロッパ派は南部に多くして印度の平野よりイラン高原、アルメニア高原に至るまでの地を占む、而して印度に居住するものは他の人種の混化を受

白色人種

黑色人種

けたるが爲、極めて不純粹なる種族を爲し、主要なる小別をヒンヅ、ラジプト、マラーチ等とす、又スラブ人はシベリアの中部并に中央アジアに侵入し來りて狹長なる一帯の地を占め、以て二派の蒙古人種の間棲息せるが、其の數は五百萬以上に達すべし、此の外、小アジアには少なからざるギリシア人、レバント人あり、各地にイギリス人、フランス人、ドイツ人等あり、又シリア、アラビア并にエウフラートの流域にはセム派のアラビア人、ユダヤ人ありて白色人種に屬する住民の總數は二億五百萬ありとす。

黑色人種はマライ半島、マライ群島の一部等に居住し、ネグリトとバプアとの二派に分かる。

サモイエード

イウラク

タクギ

イニセア

カマシニ

イウカギル

コリエーク

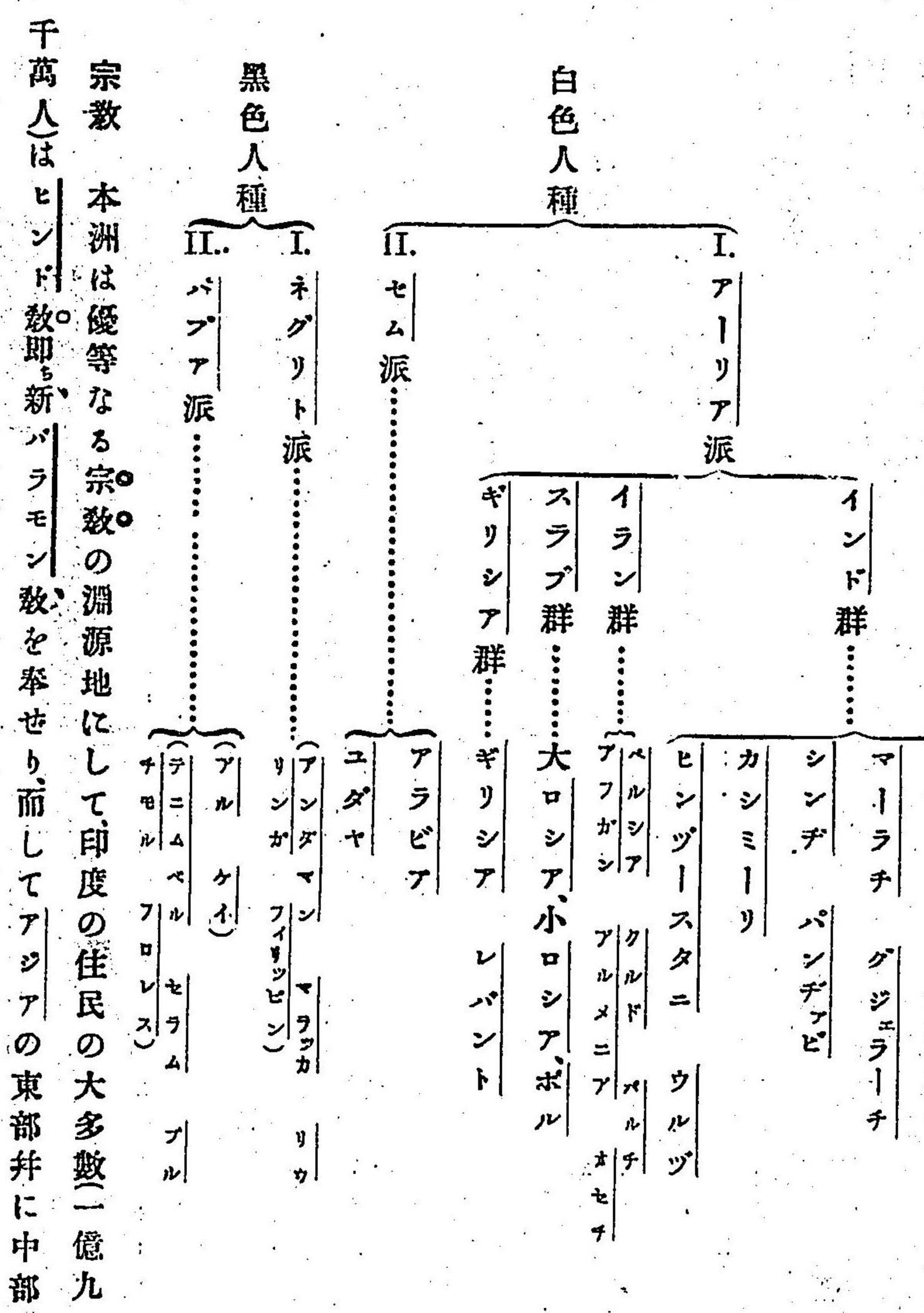
チククチ

サモイエード群

I. ウラレリア

II. ヌタイ派

世界大地誌



の黄色人種の主要部(約五億)は概して佛教を信せり此の兩教は孰もアーリア人より起れるものなるがセム人に起因せるものは三ありユダヤ教(五十萬)并にヤン教(五百萬)は小アジアアルメニアシベリアシリア印度印度支那支那等の諸地方に散居せる信者を有しマホメット教の信徒(一億三千萬)はアジアの西部并に中部を占領して尙印度地方及支那の北部に侵入しマライ半島マライ群島にも本教徒の彌漫せるあり又北部に於ける黄色人中にはシマン(薩滿)教を迷信するもの少なからず

佛教は教祖を釋迦牟尼と云ひ往時は盛大を極め教域の如きも殆ど全アジア洲に亘りしが印度教起り回教基督教來り教網亦衰へたるを以て現今に於てはセイラン、ブルマ、シム、アンナム等に小乗宗の存するありてチベット、モンゴリア等に喇嘛教の行はるるあるも漢土には天台華嚴法相真言禪淨土等の形骸を遺すのみにして韓地には戒律心宗の名の下に僅に佛陀の餘喘を保つに過ぎず獨我が國には大小二乗の教理を蓄ふるも其の實力如何を問はば亦頗る寒心すべきものあらん西人の計上する所に依れば信徒は五億

以上に達すと云ひ二億五千萬に過ぎずと稱せらるるも、眞の佛徒を求めば幾許を得んか、蓋し現在數の尠少なるに一驚を喫するならん。

印度教(ヒンド教)新バラモン教は、ベダ(韋陀)に基づき佛教を加味して往古の波羅門教を改造せしものなるが西紀八世紀乃至十世紀を以て完成し遂に印度信仰界の大部分を占領するに至れり、然れども教理は淺薄なるを免れずして往々迷信に近きもの存するあるを認む。

猶太教はアブラハム、モセスの遺訓を傳ふるものなるが、三千七百六十有餘年の長年月間に、數次の災厄を蒙り、國土滅亡し、僅少の信徒は各地に漂流する實あるも、古俗舊慣を重んじ、新舊二派の存するに拘らず、到る處に一種の異彩を放つは亦奇と云はざるべからず。

基督教は教祖を耶蘇基督と云ひ、アジアの西端に起り、ヨーロッパに傳はりて、昔時は偉大の強力を有せしが、爾來異論者出で異端説起り、之が爲に四分五裂して舊教にローマ宗、ギリシア宗、アルメニア宗、エチオピア宗、等々を觀、新教にルーテル宗、カルビン宗、イギリス宗、スコットランド宗、獨立宗、洗禮宗、長老宗、美

以宗等の存するあるに至れり、然れども現時に於て布教上尙多少の進歩あるが如し。

回教漢名なり回教人が本教を即モホメト(摩訶末)教は本名をイスラム教(イスラム)は神意に恭順するの義にして此の主義を奉ずるものをモスレミン(Moslem)と稱すと云ひ、教祖マホメト(Mohammed)の口授に係る教典、コラン(EI Quran)口碑傳説に依れる遺訓、ソムナー(EI Sonnah)等に基づける政教一致主義に成れる宗教なり、四派あり、其のソムナー(Sunnah)派、即ち正教派は四門に分かれ教主としてトルコのソルトクを戴き、其のシーヤ(Shi'a)派、即ち正義派は三十二門に分かれペルシアの「シャー」を教長と仰ぎ、其のハリヂ(Khadi)派は分離派とも云ふべきものなるが、専ら教力を信重して教主の世襲に反對し、其のワハブ(Wahabi)派は西紀十五世紀頃に起りしものにて他派の積弊を指摘して往古の如き純正教の再興を主張す、所謂純潔派、革新派なり。

薩滿教は其の起源を審にせず、シベリアの東部、黑龍江、烏蘇里江の流域地方に信者を有す、天地地獄の三界を立て、天は諸神、地獄は惡魔の居る處、地は人

の住する處にして人死せば其の靈魂は生前の行事に依りて他界に趣くものとするが魔鬼の奴隸なるシヤマンは豫言を行ひ心意を察し病氣を祈禱す。分國 本洲に於て獨立國と稱すべきは我が日本の外、韓清、シヤム、アフガニスタン、ベルシヤ、オマーン、ネパール、ブータン等の八國に過ぎずして、其の他は大抵イギリス、フランス、オランダ、ポルトガル、ドイツの如きヨーロッパ諸國及アメリカ合衆國に屬せるが、殊に北部より西部に亘れる廣大なる地は二大洲に跨れるロシアの大部を占め、西部には三大洲に跨れるトルコの主要部あり、此の如くにして本洲内には獨立國、屬地の外、本洲以外の地と合して始めて一國土を爲すべきものあり、而して主權者のアジア的なる否と否ざるに依りて本洲(四四五五萬方疋)を區分すれば其の五割七分(二五四二萬方疋)は後者イギリス、オランダ、フランス、アメリカ、ポルトガル、ドイツの六國に屬する地にアフアロシアを合算したる者に屬し、前者は反りて百分の四十三を保有するに過ぎざるを觀るべし、又住民に就きて同様の別を爲さば前者獨立國にアフアトルコ併にアラは四億二千八百十五萬人と成りて總人口八億一千二百七十六萬人の五割二分に當たるべし。

分國表

分國表		分國表	
地名	地積	人口	疎密 首府、都邑
日本帝國	四一、七四二 <small>方疋</small>	四六五二、二三二四 <small>人</small>	一一一 東京
韓國	二一、八六五〇	七五〇、〇〇〇〇	三四 京城
清國	一一一三、八八八〇 <small>三、三〇一三、〇〇〇〇</small>	三〇	北京
シヤム國	六三、三〇〇〇	六三三、〇〇〇〇	一〇 パンコク
ブータン國	三、四〇〇〇	二〇、〇〇〇〇	六 タシスードン
ネパール國	一五、四〇〇〇	三〇〇、〇〇〇〇	一九 カトマンヅ
アフガニスタン國	五五、八〇〇〇	五〇〇、〇〇〇〇	九 カブール
ベルシヤ國	一六四、五〇〇〇	九〇〇、〇〇〇〇	六 テヘラン
オマーン國	一九、四二〇〇	一〇〇、〇〇〇〇	五 マスカット
小計	一四九九、三二四二 <small>四、〇八六七、一三二四</small>	一七二二、五〇五六	二七
アジアトルコ	一八三、五八六九	一七二二、五〇五六	九

世界大地誌

直轄部	一七六、六八〇〇	一六八九、八七〇〇	七十
シナイ	五、九〇〇〇	二、四五〇〇	九
キプロス	九六〇一	二、七〇二二	二五
サモス	四六八	五、四八三四	一七
アジアロシア	一七三一、三八〇八	二四七五、五一八一	一、四
ユーカシア	四七、二五五四	九二五、一九四五	一九
中央アジア	三五五、一三〇八	七七二、一六八四	二
カスピ海 アラル海	五〇、六四五七		
シベリア	一二五一、八四八九	五七三、一五五二	〇、五
ブハラ	二〇、五〇〇〇	一二五、〇〇〇〇	六
ヒバ	六、〇〇〇〇	八〇、〇〇〇〇	一三
關東州	三一七〇	二五、〇〇〇〇	八〇
小計	一九一四、九六七七	四一九七、〇二三七	二
イギリス領	五六〇、〇四四五	九九一、三二二三	五三

印度	四〇四、六七三五	八二四八、四二〇〇	六九
印度支那	四四、三九八五	七六〇、五五六〇	一七
其外	三三、一三〇〇	二〇〇、〇〇〇〇	六
パルチスタン	四三、二〇〇〇	一〇四、五四一七	二、四
セイラン	六、五六一〇	三五七、六九九〇	五五
マラヤ	三〇〇	三、〇〇〇〇	一〇〇
海峽殖民地	四一二二	五七、三六五三	一三九
マライ保護國	七〇〇〇〇	六七、六一三八	九
シオホル	一、八〇〇〇	二〇、〇〇〇〇	一一
北ボルネオ	七、三二四〇	一八、〇〇〇〇	二、四
ラファン	一三三	五八五三	四四
ブルネイ	二、一〇〇〇	五、〇〇〇〇	三
サラワク	一〇、三三一一	三二、〇〇〇〇	三
香港	七九	二九、七二二二	七十一

世界大地誌

九龍租借地	九七四	一〇、〇〇〇	二〇〇	七十二
威海衛租借地	七三八	一二、三七五〇	一六八	
マレーン	六〇〇	六、八〇〇	一一三	
カマラン	一三〇	一〇〇	一	
オランダ領	一五二、〇六二八	三四八一、九五二七	二二三	
ジババマツラ	一三、一五〇八	二五六九、七七〇一	一九五	パタビア
スマトラ	四二、〇三八二	三四七、一六九〇	八	バレンバン
リウ	四、二四二〇	一五、〇〇〇	四	
バンカ	一、一五八七	九、三六〇〇	八	
ビリトン	四八四二	四、一五五八	八	
ボルネオ	五五、三三四〇	一一八、二〇〇〇	二	パンツハイヤン
バリロンボク	二、〇五二二	一〇四、四八〇〇	九九	
セレベス	一二、八四七八	一四四、八八〇〇	一一	
メナド	五、七四三六	五四、九二〇〇	九	

アムボイナ	五、一四六五	二九、五七六八	六	
ラルナト	六、二五九二	一〇、三四〇〇	一、六	
チモル	四、六〇五六	七四、二〇〇〇	一六	
フランス領	六六、三五〇九	一八〇七、三一八五	二七	
印度支那	六六、三〇〇〇	一七八〇、〇〇〇〇	二七	ハノイ
印度	五〇九	二七、三一八五	五四五	ボンヤシニリー
廣州灣	八四二	一八、〇〇〇〇	八七	
アメリカ領	二九、六三一〇	七〇〇、〇〇〇〇	二四	マニラ
ポルトガル領	一、九九一八	八五、〇九一七	四三	
マカオ	一一二	七、八六二七		マカオ
印度	三六五八	五七、二二九〇	一五六	ゴア
チモル	一、六二四八	二〇、〇〇〇〇	一一	
カンビン	九二〇	一一、〇〇〇〇	一一〇	
ドイツ領	九二〇	一一、〇〇〇〇	一一〇	
膠州灣	九二〇	一一、〇〇〇〇	一一〇	

世界大誌

小計	八二〇、〇八一〇三、五九八五、六七四二	四四	七十四
合計	四二二四、三六二九八、一〇四九、八二九三	一九	
無所屬	二二七、二〇〇〇	一	
總計	四四五五、三六二九八、一二七六、〇二九三	一八	

前表に基づき本洲に於ける主要政治區劃に就きて地積、人口、及其の密度を比較すること左の如し。

地積順	人口	人口疎密比	疎密順
一 アジアロシア <small>一万七千</small>	一 清	三三〇、一	一 日本
二 清	二 イギリス領	二九九、一	二 イギリス領
三 イギリス領	三 日本	四六、五	三 ボルトガル領
四 アジアトルコ	四 オランダ領	三四、八	四 韓

五 ベルシア	一六四	五 アジアロシア	二四、七	五 清	三〇
六 オランダ領	一五二	六 フランス領	一八、〇	六 フランス領	二七
七 フランス領	六六	七 アジアトルコ	一七、二	七 アメリカ領	二四
八 シアム	六三	八 ベルシア	九、〇	八 オランダ領	二三
九 アフガニスタン	五五	九 韓	七、五	九 ネパール	一九
一〇 日本	四一	一〇 アメリカ領	七、〇	一〇 シアム	一〇
一一 アメリカ領	二九	一一 シアム	六、三	一一 アジアトルコ	九
一二 韓	二一	一二 アフガニスタン	五、〇	一二 アフガニスタン	九
一三 オマーン	一九	一三 ネパール	三、〇	一三 ブリタン	六
一四 ネパール	一五	一四 オマーン	一、〇	一四 ベルシア	六
一五 ブリタン	三、四	一五 ボルトガル領	〇、八	一五 オマーン	五
一六 ボルトガル領	一、九	一六 ブリタン	〇、二	一六 アジアロシア	一、四

生業 北部の林業、鐵業并に西部の牧業は現今該地方の居民が最要の業
世界大地誌 七十五

務と爲す所なり、然れども南部シベリア、トルキスタン、モンボタミア、小アジア、シリア等は勿論アラビア地方にも多少の沃土のあるありて、人力の補助と交通の開進とを待ちて將に穀類、煙草、珈琲等を産出せんとするものもの如し、是はカスピ鐵道がアム河沿岸の地に一大變動を惹起し、シベリア鐵道がシベリアに於ける各種産業の勃興を促せるに依りて、明らかかなり、而して今後アジアの北部并に西部が充分に發達して幾分の工業興るに至るとも、生産力上より觀れば、該地方は到底第二流の地位に立たざるを得ざるべし。

眼を轉じて豊饒なる印度地方并に殷富なる東部アジアを見るに、此の地方は夥多なる原料を供給するのみならず、又稠密饒多なる人民は製作したる物品を需用するが故に、工藝的貨物の好販路たり、是はヨーロッパの各強國が重きを本洲に置く所以なり。

要するに本洲に於ける生業は原産に屬するもの多く、工業は日本清國印度等に於て稍盛なるに過ぎずして、交通機關の發達も充分ならざれども、他日アジアの生業に大進歩を來たし、石炭と金屬との無盡藏に依り、多量の原

交通

料に廉價なる人力を加へば、優にヨーロッパ并に北アメリカに於ける諸國の産物と競争するを得るは素より論を待たず。

交通に關して尙數言を費さん、本洲は三大洋に面すと雖、北極洋は到底船舶の航行に適する能はず、其の他の二大洋殊に太平洋は遠洋航線の擴張と海底電線の發達とに相聯關して將來益重要に越くべく、内部には航河、湖の存するあれども、其の配置は稍偏し、且、道路も全洲に亘りて整備せざるを以て、陸上交通の發達は鐵道の敷設と最親密なる關係を有せりと云ふべし、而して西アジアのスマイルナ、スクタリより起れる線は紅海岸附近とペルシア灣の岸とに達することあるべく、コーカシア線はイラン高原の西部を横ざりてオルムス海峽の岸に出づべく、カスピ鐵道は該高原の東部を経て印度の鐵道線と連なるべきが、現にアラル海の北東を経てコーカシア線と共にヨーロッパに通せり、又ヨーロッパ、アジアの二洲に亘れる最、主要なる線はシベリア鐵道にして、東省鐵道と連絡して日本海の沿岸地に通ずるが、キツンタより分岐して庫倫、張家口を経て北京に到らしむるの計畫あり、漢土に

は少なからざる既設未設の線あり印度支那に於ける數線の北上を待ちて相結合せんとするものの如く韓國に於けるものも或は北西に進みて滿洲の鐵道に連なるに至らんか。

● 韓 國

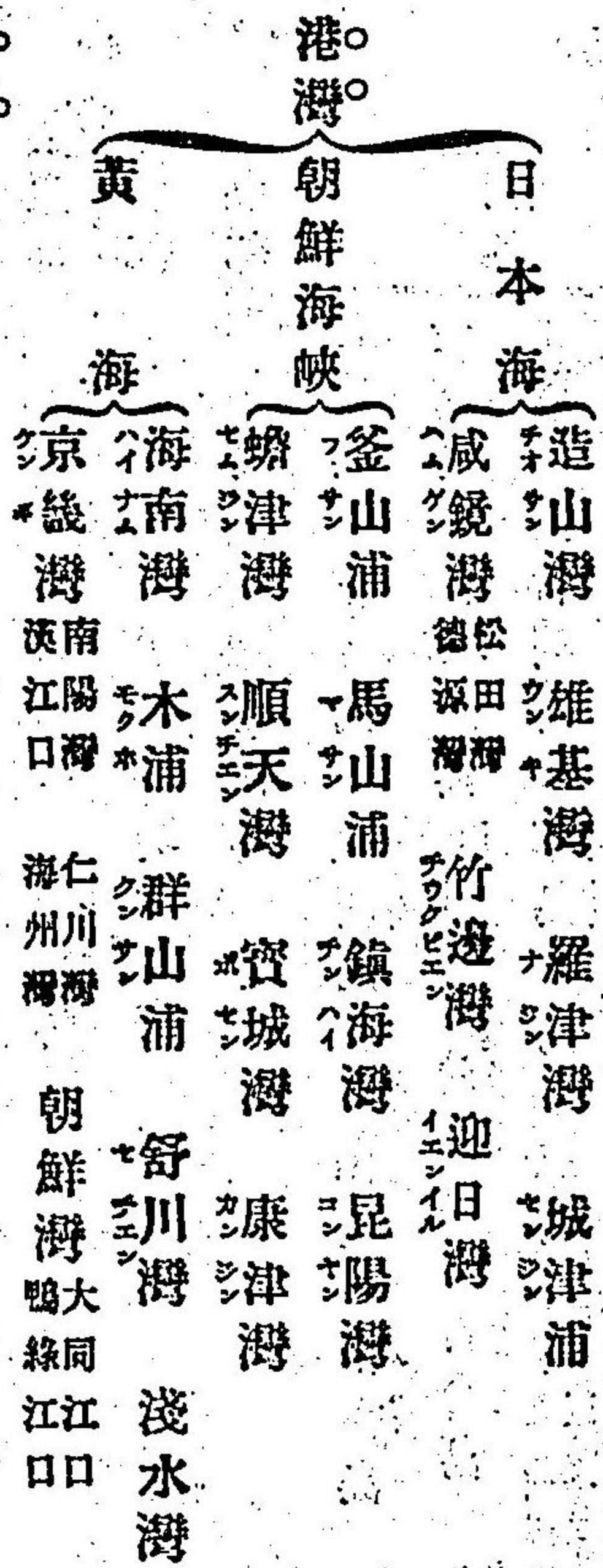
境域 韓國は舊名を朝鮮と云ひアジア洲の東部にある狹長なる半島國なり其の極南の地は濟州島の毛毳浦にして北緯三十三度四十六分に當り其の極北の地は豆滿圖們江沿岸の永遠近傍にして北緯四十三度二分に當り又極西は小乳露角の東經百二十五度五分極東は豆滿江口の東經百三十三度五十八分なり而して北は豆滿江海蘭河との合流點以下不減長白山脈鴨綠江を挟みてアジアロシア并に清國と隣し東は日本海南は朝鮮海峽を隔てて我が日本國と對し西は黃海に臨みて清國に向へり。

廣袤

廣袤は甚だ大ならず長は凡九百軒幅は約二百四十軒あり面積に就きてはアルマナードゴター(Almanach de Gotha)及トログニツ(Trögitz)は二十一萬八

千六百五十方軒としセンマルテン(De Meuse)は二十一萬八千九百九十二方軒ストレルビツキ(Strelbitsky)は二十二萬三千五百二十五方軒とするも其の平均は二十一萬九千七百五十四方軒即ち二十二萬方軒あれば我が帝國の半より稍大なりとするは適當なりと信ず。

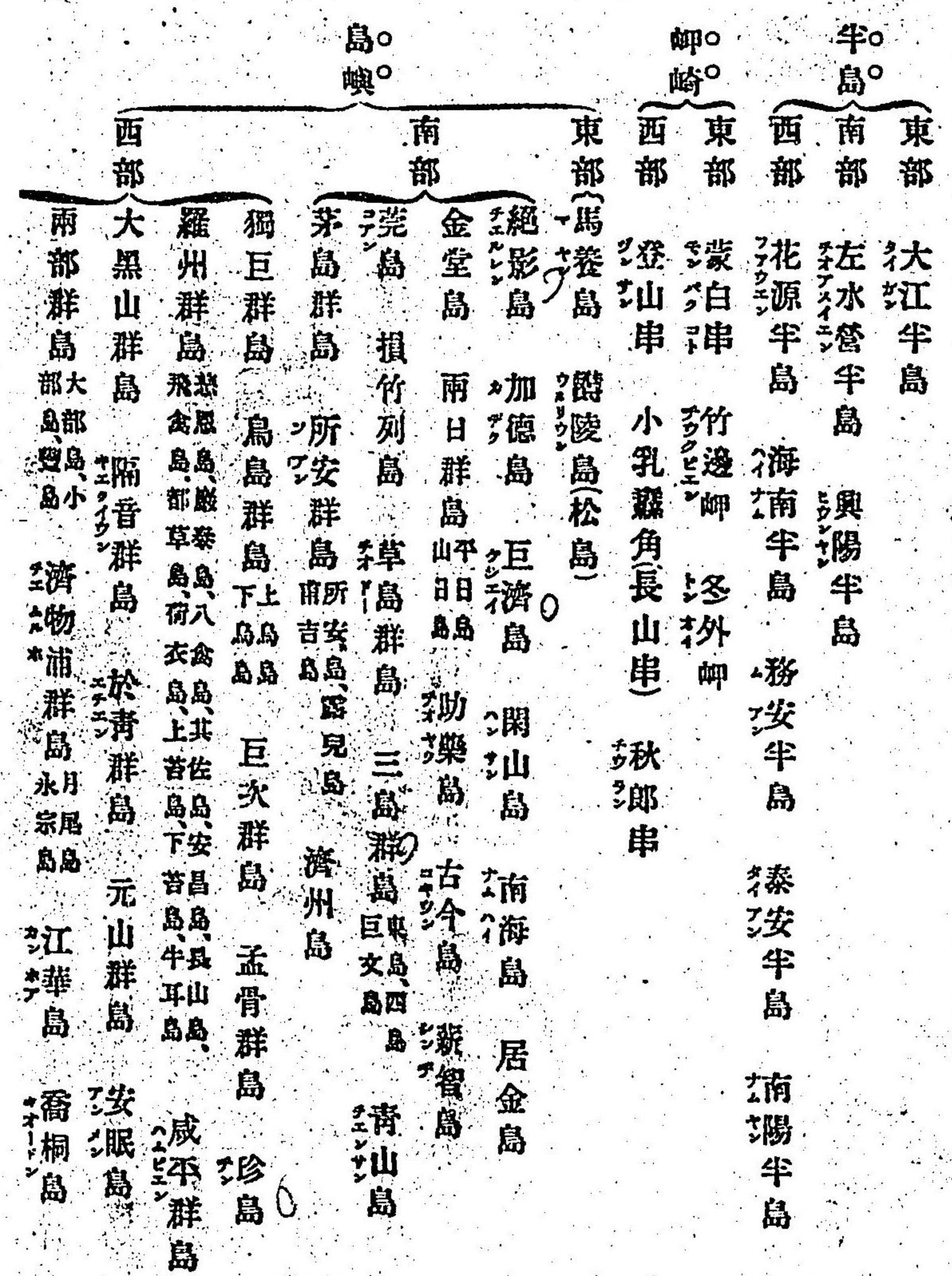
海部 港灣海峽の主要なるものを擧ぐれば左の如し。



海峽(慶尙海峽) 全羅海峽 双子海峽

陸部 東海岸は半島岬崎の著しきもの少なけれども南と西とは多くして島嶼も亦主として此の方面に配列せられたり。

世界大地誌 あじあ洲 韓國



海岸 韓半島は三面に海洋を繞らし海岸線の延長は一千七百餘裡に達すべし而して其の東岸は屈曲に乏しけれども南岸には數多の彎曲あり西岸は南部に於て出入に富めども北方に越くに從て漸單純なり附記す此の地の湖沙滿干の差は非常に著しき處ありて西岸の中部にては十米突以上に達し南下するに從て漸減少し忠清地方にては七米突全羅地方にては四米突と成り釜山に於ては二米突に達せず元山に至れば三粉なりと云ふ。

山誌 韓半島は山岳丘陵の多き地方なり主要なる山脈は北部には不咸(長白山脈の外江南狄嶺妙香の山脈ありて各西西南より東東北に走れり南部には蘆嶺車嶺の二山脈南西より北東に向ひ前者は太白聯脈に後者は小白聯脈に交はれり而して小白聯脈は北微東の方向を取りて太白聯脈と會し太白聯脈は北微西の方向に伸びて半島の東部に偏在す又中部には滅惡山脈慈悲山脈等ありて東西に走り馬息山脈九月山脈等は斜行せり今之を表示すること左の如し

延平列島 鋸齒列島 大青群島 大和島 身尾島
 大青群島 白翎島 大和島 身尾島

世界大地誌 あじあ洲 韓國

不成山脈 白頭山(三七〇〇)
 緩項嶺(六四〇) 三綵嶺(八一〇) 牙得山
 江南山脈 巴鷹嶺 衝天嶺
 北部 秋踏山脈 天磨山 雪梅嶺(一四六〇) 秋踏嶺(九七〇) 勿移山
 妙香山脈 妙香山 狼林山 劔山 黃草嶺(一〇九〇) 赴戰嶺
 厚致嶺(一四〇〇) 大元山(二四〇〇) 江陵山
 中部(滅惡山脈) 慈悲山脈 馬息山脈 九月山脈
 濟州島 漢羅山(二〇四三)
 車嶺山脈 車嶺
 南部 盧嶺山脈 蘆嶺
 小白聯脈 天德山 獅子山 知異山 德裕山 秋豐嶺 小白山
 太白聯脈 大關嶺(八〇〇) 太白山 五臺山 金剛山
 前記白頭山漢羅山は火山質なり然れども本半島の内部に於ける火山脈は著しからずして活火山の噴出あるを聞かず又温泉も多からざれども南

豆満江

部の鷲岩山、金井、密陽、北部の温水坪、臥龍山等を著名なりとす。
 水誌 水誌上、韓半島は日本海、朝鮮海峽、黄海の三斜面に分かる、而して大同江口、德源灣以北に於ては日本海斜面、黄海斜面に各、大河を見るも、以南の地に於ては巨流は黄海或は海峽に注げり、然れども韓國は元來一小半島に過ぎざれば、大河、巨流と稱せらるるものも、其の長は四百軒を超ゆるもの唯一の鴨綠江あるのみ、今左に顯著なる河流を列舉せり但し括弧内の數字は河長の軒數なり
 日本海斜面 豆満(圖們)江(三二〇)
 海峽斜面 洛東江(二八〇) 岳陽(塘)江
 黄海斜面 榮山(靈)山江 萬頃江 錦(鎮)江 漢江(二〇〇) 金川江
 大洞江(二八〇) 清川江 博川江 鴨綠江(四二〇)
 豆満江は白頭山に發源し、北東に向ひて流れ、會寧附近より北に轉じ、後南東に折れて一大彎曲を爲し、以て日本海に朝す、長は三百二十軒あり、下流は清國及ロシアと韓國との境界たり、而して慶源以下は河幅四五百米突に達し、水深九米突に近き處多し、然れども河口より溯航し得るは二十餘軒に過

世界大地誌 あじあ洲 韓國

洛東江

洛東江は源を太白山に發し、行く行く沿岸の地を潤し、南流又東流して尙州の東を過ぎ、更に方向を南に轉じて海峽に向ひ、營江の東方に迂流し、金海の東に至りて海に注ぐ。本流は源委通じて二百八十軒あり、河幅は約三百三十米突に達す、而して水量の増減甚しきも、下流百三十軒は通舟の便を與ふ。支流には左岸より來るものに漆川、伽陽川等あり、右岸より來るものには陝川、南江等あり。

錦江

錦江は一に鎮江と云ふ、雲梯山の南に發し、燕岐近傍にて北より來れる東津江と合し、屈流して江景、舒川、群山を過ぎ、黃海に終る。本江は沿岸の内浦地方に水運の便を與ふること多く、將來有用の航河たるべし。江景の下流四十軒以上の間は河幅百八十米突乃至九百米突ありて、四五百石の帆船通航し、四五十石の小船は江景の上流八十軒に溯るを得。

漢江

漢江は源を五臺山に發し、南流又は西流して、忠州近傍に於て俗離山より來る達川を合はせ、北西に向ひ、楊根の南西を過ぎたる後、龍津に於て北より來る春川江を容れ、京城の南を經、一百三十軒の間、航運の便を與へて海に注ぐ。長は二百軒に過ぎざれども、國都に近く流るるを以て著名なり。支流は右岸の春川江、臨津江を主とす。春川江は鐵嶺并に金剛山に發源して、照陽江と云ひ、狼川、春川等を経て漢江に入る。臨津江は馬息嶺の南に發し、伊川、朔寧等を経て落花渡に於て漢江に合す。

大同江

大同江は劔山に發源し、數支流の水と合同して南西に向ひ流るること二百八十軒にして、朝鮮灣に入る。下流の鐵島附近に於ける河幅は約四軒に及び、水深三十六米突に近く、航通上に便益を與ふること少なからず、而して戰史上著名なる本江には成川、成計江、信川等の支流あり。

鴨綠江

鴨綠江は古來著名にして、當國第一の河流なり、其の源は白頭山に起り、濁流滾々として流るること四百二十軒に達すと稱せらる。韓國と清國との境界を爲し、下流には數多の洲嶼を抱きて、朝鮮灣に注水す。渭源以下百二十軒に通舟の便ありて、尙百六十軒間は筏を流下せしむるを得るも、氷結すること

沼湖

と四閩月に及ぶ支流には、盧川江、長津江、悉魯江等ありて左岸より會し、修佳江、靈河等は右岸より來る。
沼湖には著大なるものなし、白頭山の火口は水を湛えて周圍十軒に近き小湖を爲せりと云ふ。

地勢 半島の地勢は北部最高、東部之に次ぎ、西部と南部とは稍低くして概して高山秀嶺と稱すべきものは存在せざれども、丘陵は甚だ多く、平地の地は少なきが如し、而して其の平野と稱すべきものは多くは河流の沿岸若しくは海濱にありて廣袤の大なるものなし、されば中に就きて稍著しきものを列舉せんに、咸鏡平野は長四十軒に達し幅は十六軒ありて地味も亦佳良なりと云ふ、洛東平野は洛東江の沿岸にありて廣袤は大ならざれども、潤宜しきを得地味も亦惡しからず、錦江平野は概豊沃なるが如し、漢江平野は稍鹵瘠を覺ゆれども、大同江平野は廣袤稍大にして地味は肥瘠相半せり、其の他沿海の小平野には肥沃の地なきにしも非ざるも、概土地瘠せて田園を開くには適せざるが如し。

氣温

氣候 當國はシベリア并に滿洲に連続せる一の半島にして、三面に海を控ゆれども、黒潮暖流の餘派は僅に南東の海岸に接觸するに過ぎざるを以て、氣候は概大陸的にして夏季には炎暑に苦み、冬季には嚴寒を覺え、寒暑の差極めて甚しとす、而して氣候稍温和なる中部の地方と雖、冬季に至れば河水の水結することあり、北部の豆滿江の如きは六閩月にして始て解氷すと云ふ、釜山、元山、仁川の三處に於ける觀測に據れば、温度の年平均は十二度以下九度以上にして最高は三十四度に昇り、最低は零度下十六度二分に降ると云ふ。

降雨

降雨は夏季に最も多くして、豪雨の來ることあり、冬季は稍乾燥なれども亦降雪なきにしもあらず、其の量は地方に依りて多少の差異あり、東岸并に西部の北部は積雪三米突餘に及ぶ處あるも、氣候温暖なる南東地方は一粉に過ぎず。

觀測地	一月平均	八月平均	雨量
釜山	〇.〇	三三.〇	二〇.〇

世界大地誌 あじあ洲 韓國

元山	仁川	(一)四五	(一)四六	八十八
(一)一三	(一)一三	二五六	一六二	
		二一四	一一四	

天産 韓半島は天産に豊富なる地と稱すべからざるも各種物産の生出するありて其の量も亦少なからざるが如し。

礦物には金、銀、鉛、銅、石炭、硫黄等あり。

植物には五鬚松 (Pinus Koraiensis)、落葉松、樅、白楊、山毛櫸、樺、杉、檜、楡等あり。

漆樹、桑等あり、米、小麥、燕麥、稷、黍、玉蜀黍、蠶豆、胡麻等あり、馬鈴薯、南蕃瓜、蓮等あり。

人蔘 (Acanthopanax quinquefolia)、煙草あり、大麻、藍 (Polygonum tinctorium)、紫草 (Lithospermum erythrorhizon)、紅草 (Carrhanus tinctorius)、樺 (Broussonetia papyrifera) 等あり。

動物には虎、豹、貂 (Mustela melanopus)、黑貂 (M. zibellina)、熊 (Ursus arctos, U. japonicus)、栗鼠類 (Lutra vulgaris) 等あり、鴉、鷲等あり、龍、鱒、鮭、鯉、鯛、大口魚、明太魚 (Gadus chalcus)、鰻 (Grammus)、鮮鰻、鮑、螺、牡蠣、烏賊、鮪、海鼠等あり、牛、馬、犬、雞、雀、蜂、蠶等あり。

沿革 朝鮮半島は其の始、君長なし、桓王儉なるもの自立して王と成り、檀君と稱し、平壤に都して國號を朝鮮と云ふ、之を前朝鮮と爲す、檀氏に次ぎて

沿革 朝鮮半島は其の始、君長なし、桓王儉なるもの自立して王と成り、檀君と稱し、平壤に都して國號を朝鮮と云ふ、之を前朝鮮と爲す、檀氏に次ぎて

礦物 植物 動物 前朝鮮

後朝鮮

三韓

高句麗

百濟 新羅

新朝鮮

此の土に王たりしものを箕氏とす、傳へて箕準に至り、衛滿の亂ありて箕氏亡び (西紀前) 又後、朝鮮は衛氏と共に滅亡して (西紀前) 漢の版圖に入れり (前)

五 此の朝鮮の地は滿洲奉天省の東部より韓國の黃海、江原以北六道に及び

しが、京畿以南の地に於ては、西部に馬韓、東部に辰韓、南部に卍韓の三國即ち三

韓ありて、馬韓の箕氏最、強大なりき、三韓の亡ぶるや、北部に高句麗、起り、南西

に百濟、現はれ、南東に新羅あり、神功皇后の親征に依りて、新羅は我が國に降

り、百濟も亦歲貢を致ししが、半島の南部にありて、我が保護の下に存せし任

那は先、新羅の滅する所と成り、百濟、高句麗、後に倒れて新羅は統一の業を爲

せり、新羅 (六六八—九四三) の衰ふるや、再、三國に分裂せしが、之を統合せしは

王建にして國號を後高麗 (九四二—一三九三) と改め、松岳山の南 (今松都と云ふ)

に奠都せり、王氏は蒙古及倭寇の爲に苦められて國勢振はず、遂に李成珪立

ちて王と成り、國名を再、朝鮮と改め (一三九二) 漢陽に都せり、之を新朝鮮と稱

す、明の萬曆二十年頃日本の侵掠 (一五九二—一五九八) を蒙りて國殆ど亡びんとせ

しが、明軍の援助ありて僅に存立するを得たり、而して明亡びて清之に代る

や、朝鮮は清國の附庸の地と成り(一六五二)以て二百餘年を経過し、明治九年(一八七六)に至り、其の獨立は我が日本の認むる所と成りたり、之よりアメリカ合衆國(一八八二)、イギリス、ドイツ(一八八三)、イタリア、ロシア(一八八四)、フランス(一八八六)等も朝鮮を以て獨立國なりとし、之と條約を締結せるに、北京朝廷は自國の屬地なりと主張し、遂に日清の間に開戦(一八九四—九五)を見るに至りしが、清國は連戦連敗し、明治二十八年には朝鮮公然獨立し(一)下關條約締結せられて(四)其の獨立は世界萬國に公認せらるることと成れり。此の如くにして、我が國は朝鮮の扶導に従事せしが、下關條約後幾もなくして政變あり、朴泳孝内閣仆れ(七)遂に閔后殺害の椿事を生じ(十)平島に於ける我が勢力は次第に減するに反し、ロシアの勢力は益盛に趣き、翌明治二十九年(一八九六)國王世子はロシア公使館に遷幸し、日本黨の大臣金宏集等は斬殺せられたり(三)由りて我が國はロシアと共に朝鮮を助けんと欲し、京城に於て覺書(五)モスクバに於て議定書(六)を作りて、第一回の協商を行へり、議定書の第一條中に曰はく、

日露兩國政府は朝鮮國財政困難を救済するの目的を以て、朝鮮政府に向つて一切の冗費を省き、且其の歳出入の平衡を保つことを勸告すべし、若し萬止むを得ざるものと認めたる改革の結果として、外債を仰ぐこと必要なるに至れば、兩國政府は其の合意を以て朝鮮に對し救助を與ふべし。

大韓

明治三十年(一八九七)朝鮮王は慶運宮に還幸し(三)國號を大韓と改めたり

(十)其の後、ロシアの勢力稍減せし爲、か、明治三十一年(一八九八)日本との間に

第二回の協商を行ひ、兩國孰も干渉せざることを成れり、協約の中に曰はく、

第一條 日露兩國政府は韓國の主權及び完全なる獨立を確認し、且互に同國の内政上には總て直接の干渉を爲さざることと約定す。

第三條 露西亞帝國政府は韓國に於ける日本の商業及び工業に關する企業の大に發達せること及び同國居留日本國臣民の多數なることを認むるを以て、日露兩國間に於ける商業上及び工業上の關係の發達を妨碍せざるべし。

一度手を韓國より引きたるロシアは明治三十三年(一九〇〇)北清事件に當り、滿洲を占領し撤兵の實を履行せず、而して先に結べる協商を無視して韓境に逼り、明治三十六年(一九〇三)兵を進めて龍巖浦の經營に着手せり、先之我が國はイギリスと協約を結び(一九〇二)清韓の獨立保全を計るに熱心な

る際なるを以て、韓國の安全、帝國の國利を保持せんが爲、ロシアに對して交渉すること久しかりしが、遂に圓滿なる協定を見る能はず、今年明治三十七年(一九〇四)三月十日宣戰の詔勅公布せられ、同月二十三日日韓議定書の調印を見るに至れり、該書の要項、左の如し。

第一條 日韓兩帝國間に恒久不易の親交を保持し、東洋の平和を確立するため、大韓帝國政府は大日本帝國政府を確信し、施政の改善に關し其の忠告を容るること。

第三條 大日本帝國政府は大韓帝國の獨立及び領土保全を確實に保障すること。

第四條 第三國の侵害に依り若しくは内亂の爲、大韓帝國の皇室の安寧或は領土の保全に危險ある場合は大日本帝國政府は速に臨機必要の措置を取る可し、而して大韓帝國政府は右大日本帝國政府の行動を容易ならしむるため十分便宜を與ふることにす。

大日本帝國政府は前項の目的を達するため、軍略上必要の地點を臨機收用することを得ること。

第五條 兩國政府は相互の承認を経ずして、後來本協約の主意に違反すべき協約を第三國との間に訂立することを得ざること。

種族 韓人は外觀上單純の種族にして蒙古人種に屬し、容貌、骨格は殆ど日本人に同じく、唯、毛鬚の少なきを以て異なれりとするのみ、然れども細に觀察すれば、上流人士には額廣く鼻梁秀でたるもの多く、下等社會并に北方咸鏡、平安等の地方には鼻柱低く額狭きもの多く、又平安地方の人は身體稍太なるが如く、多少の差異點存す、要するに韓人は數派の民族の混合より成れるに似たり、説を爲すものは土人に交ふるに印度種族を以てせしと云ひ或は土民と滿洲種族との混和したるものと云ひ或は扶餘、靺鞨、大和、獺、類等諸種の血脈を有すと爲せるものあり。

人口 住人の多少に就きては確數を得る能はず或は六百萬内外に過ぎずと云ひ或は一千三百餘萬に達すと稱す。

年次	人口	推算者	年次	人口	推算者
一七六三	七三四、二三六	センマルラン	一八八七	二三八一、六〇〇	朝鮮政府
一八〇四	七一五、〇〇〇	全	一八九一	一〇五二、九〇〇	ワグネル
一八六一	六二五、〇〇〇	全	一八九七	七五〇、〇〇〇	ゴター

世界大地誌 あじあ洲 韓國

一八八三—一〇五二、八九三七—一〇七二

一九〇〇

五六〇、八一五—韓國統計

女少國

一千八百八十三年調の人口(兒童を省きたるもの)に就きて男女別を擧ぐれば男五百三十一萬二千三百二十三人、女五百二十一萬六千六百十四人なり、又前表中一千九百年に於ける人口は納稅義務者の人員にして男三百十萬二千六百五十人、女二百五十萬五千五百一人に分かる、此等の二回の調査に就きて見れば韓國は女少國なり、粗密に關しては一方糶に付き最少二十六人最多六十三人の割合なる、當國に於ける統計は極めて不完全なれば七百五十萬を以て算、眞に近しとすべし、從て一方糶の人口は三十四人と成る、又當國にては野外に居住するもの甚多く市街民は總人口の十分一に達せざるべし、次に在留外人は凡三萬六千にして日本人三、〇〇〇〇及支那人五〇〇〇〇は其の主要部を占め、アメリカ人三〇〇〇、イギリス人二二二、フランス人一〇〇〇の多くは宣教に従事せり。

在留外人

言語は國內到る處同様なれども、地方に依りて語調に多少の訛あり、語脈はウラル、アルタイ系の南派ツングスに近しとするあり、ドレー

諺文

三〇はドレービダ系に關係深しとするが、要するに所屬不明なり、其の語法は日本語と同じく單語も頗一致せる所あり、文學に關しては中流以上の社會にては漢字、漢文を使用すれども、普通には諺文と稱するもの專行はるるが如し、而して諺文は梵字より出でたりと爲す人あり、一千年以來使用せられ、今日の諺文は十七の父字と十一の母字とを組合はせて語音を現はせり。

教育 往昔は文化の盛なる國なりしが、今は百事衰頹し、學問の如きも僅に虛文を尊崇するのみにして、現に外國語學校、師範學校、少數の小學校等に於て普通學を授け、字房と稱する私塾に於ては經書、詩文、習字等を授くるに過ぎず、上記の外武官學校、醫學校あり、日本人が韓人教育の目的を以て設立せる學校は次第に増加するの傾向あれども、語學の才に富める韓人は未だ古風の陋習を墨守し、徒に舊時の事蹟を慕ふに止まりて、内外の事情に通じ、自國の改良進歩を計るが如きは、殆ど其の念頭に存せず、教育の目的は畢竟官吏を養成するにありと信するもの如し、女子は裁縫、其の他の家事を業とするのみにして、文字を學ぶものは甚稀なり。

宗教 現今韓國に於て最、勢力を有するは一種の鬼神教なれども、普通稱する所に従へば、韓人の多數は儒道を信奉し、孔孟の教を以て人倫道德の基と爲し、冠婚葬祭の儀式の如きも、概、儒式と云ふものを用ふ。佛教は昔時甚盛なりしが、現時にありては衰微の極に達し、僧侶自身の外は殆ど顧みるものなく、僧侶にして抄紙、菓子賣、大工等の業を營みて、生活するもの稀ならずと云ふ。基督教は近來信徒漸増加し、新舊兩派を合はせて八萬三千人に近く、其の五萬六千人はカソリック教徒とす。

氣質 韓人は往古にありては半島に獨立し、學を勵み業を勤めし、人民にして文化の度も高かりしが、中古以來近隣強大國の侵略を蒙りて漸次に衰微し、遂に今日あるを致せり、されば此の土の住民の氣質に就きては實に詳言するに忍びざるものあり、膽力なく、氣力なく、遊惰風を爲し、目前の娛樂を事として永遠の計に注意せず、輕燥にして怒り易く、恨を含むの質あるも、些少の失敗に忽、挫折するの癖あり、要するに非常の手段を用ひて根本的に氣風を一變するに非ざれば、韓人の改良進歩は得て望むべからず、然れども氣

質は地方に依りて自、異なる所あり、北東部は强悍樸野なるも粗暴にして頑愚なり、南部は稍、活潑にして業務に従事するを嫌はず、西部は怠惰に流るるの傾向あり、北西部は鈍にして吝なりとするも、勞働には堪ゆるもの如し、尙、韓人が今日の如き氣質を有するに至りしは、長幼嫡庶及、階級制度に依りて甚しく人心を束縛せしに基づくこと、少なからざるべし。

風俗 韓人には兩班、中人、常漢の階級あり、近年の改革に依り、此等は平等の名を有すれども、實之に従はずして社交上、政治上の勢力に大なる懸隔あり、兩班とは東班、西班を合はせ稱したるものにして、東班、即、文班は朝儀に際して東に列し、西班、即、武班は西に列し、共に王族以外に社會の上流を占め、生れながらにして官吏と成り、政權を掌握するを得、中人は兩班、常漢の間に位するより起れる稱呼なるべきが、知識は班人に比して一頭地を抜けるものあれども、未だ有力なるに至らず、常漢とは我が國の平民の如きものを云ひ、農工商等の實業に従事する被治者なり、以上三級の外、奴隸、僧侶、皮漢、才人等ありて社交下、常漢の下位に立てり。

兩班

中人

常漢

衣服

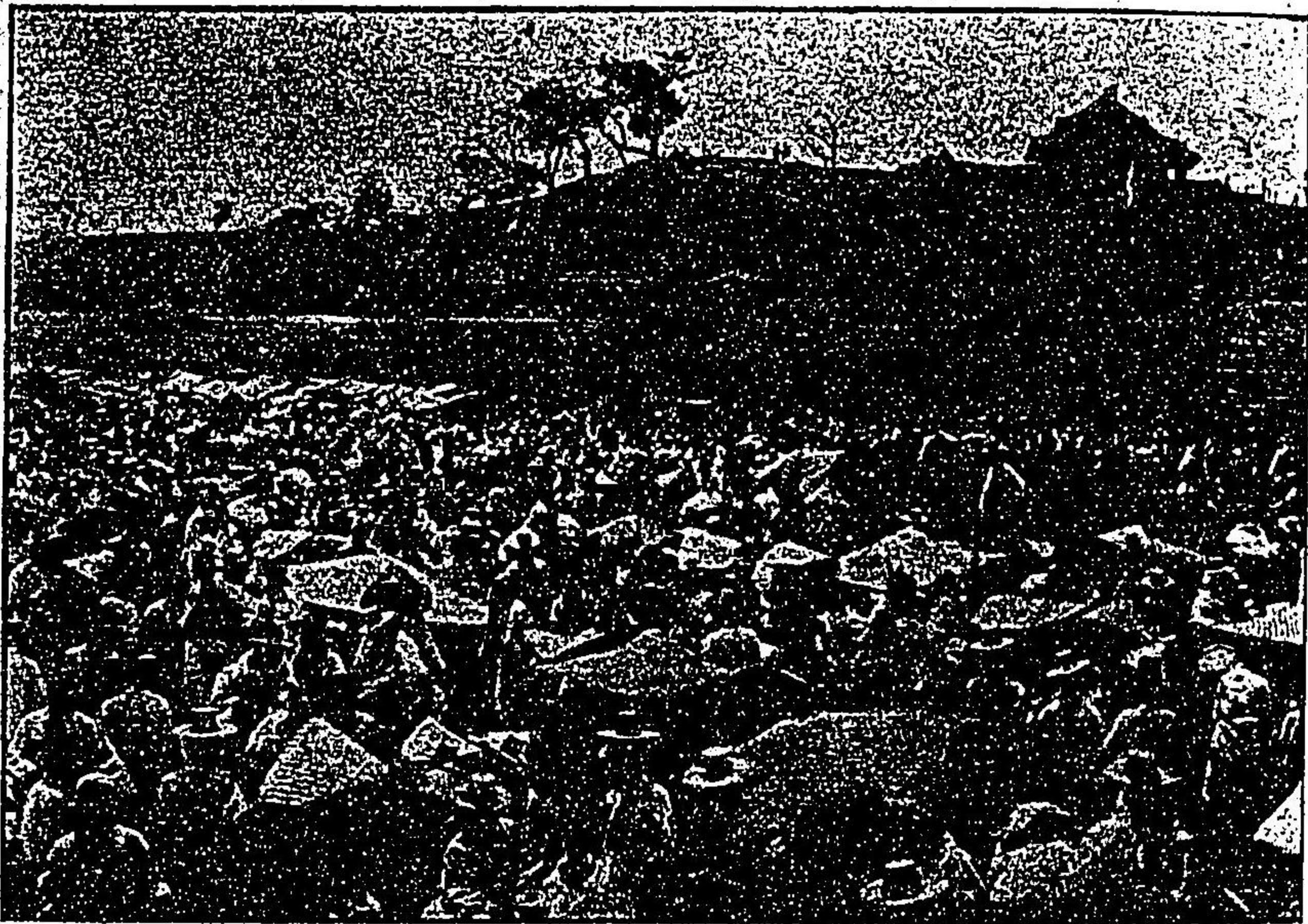
食物

住居

衣服には緩濶なる筒袖の上衣と膝下に於て括約せる廣濶なる袴とを用ふ。布地は概粗織の綿布麻布を以てし稀には紗、絹綸子を用ふることあり。服色は白色、青色多くして、小兒は紅、青、紫等を用ふ。而して寒氣の凜烈なるにも拘らず、厚く綿を入れたる衣服を用ひざるは蓋、平常温室内に起臥するが故ならん。履物は藁を以て造るを常とし、上流者に非ざれば革沓を穿たず。冠は階級に依りて各、其の趣を異にすれども、男女一般に之を着用し、冠と婚とは同期に行はる。

食物は米、麥を主とし、魚、鳥、蔬菜、獸肉等を副とするは恰、我が國に似たり。唯、肉類を食すること稍多く、殊に普通の人民には犬肉を食ふもの甚多し。飲料には米麥より製したる酒類又は茶、蜜水を用ふ。

住居は概、矮少にして層樓なき藪葺なり、故に官廨若しくは富貴の家に非ざれば瓦を用ふることなく、通常の家屋は三室より成り、一を居間と座敷とに宛て、一を物置とし、一を竈のある處とす、殊に奇なるは屈爐の築造にして、其の法、床下に石を疊みて、細路を縦横に設け、室を温むるに便ならしむ。而し



大市—大邸の景



民家

大韓國制

議政府

て宮殿寺院の建築には頗る廣大なるものあれども、其の結構は粗雑なるを免れざるが如し。

政治 此の國の憲法とも稱すべき大韓國制に據れば、大韓國の政治は萬世に亘りて變せざる專制政治にして、皇帝は無限の君權を有す、而して現行の制度に従へば、議政府なるものありて、皇帝を補佐翼賛し、百般の政務を處理す。議政府は議政及外部、内部、度支部、軍部、法部、學部、農商工部、警部に長官たる各大臣、并に五人の贊成、一人の參贊より組織せられ、中央の政權を掌握す。地方には觀察使、郡守、府尹等ありて、各種の行政を司れり。此の外法規、校正所、議政府の諮問機關たる中樞院等あり。

司法に關しては、漢城に平理院、控訴院、各道に地方裁判所を設け、漢城并に各開港場に特殊裁判所を置き、皇族の犯罪に對しては特別法院を開くの規定あり。

行政區劃 往昔は八道に分ちしが、現今は十三道に大別して、每道に觀察使を置き、各道を若干郡に細分して、各郡に郡守を置く、其の數三百三十一な

十三道

郡

道	郡府		古	號	面數	郡府		古	號	面數	觀察府所在地
	等	名				等	名				
一	廣	州	南	廣	三三	一	開	松	都	七	廣州
二	江	華	江	必	一八一	仁	川	郡	城	一〇	江華
三	水	原	漢	隋	四〇三	驪	州	永	義	一三	水原
四	楊	州	見	昌	三三三	長	湍	夜	牙	二二	楊州
五	通	津	守	比	二四	坡	州	坡	平	一一	通州
六	京	三	安	史	二四	坡	州	曲	城	百	京三

世界大地誌

あじあ洲

韓國

百

最近の調査に基づき更に十三道及各道内の府郡の名稱等級古號面數等に就きて一表を掲記せん。

道	面	府	郡	里	洞	面	人口	使
全羅道	一、七六〇〇	三六	七四〇	二二二、五〇〇	〇	全州		
慶尙道	四、二五五〇	七九	九九〇	二二七、二〇〇	〇	大邱		
江原道	二、二七〇〇	二六	二〇二	七五、〇〇〇	〇	原州		
咸鏡道	五、五四五〇	二四	二二三	八二、五〇〇	〇	咸興		
計	二二、八三四二	三二〇	三八四九	一三八一、六〇〇	〇			

道	面	府	郡	里	洞	面	人口	使
平安道	一、一八五〇	四二	四四〇	二三四、七〇〇	〇	平壤		
黃海道	一、七六〇〇	二二	二九三	一一〇、四〇〇	〇	海州		
京畿道	二、三三〇〇	三六	四〇九	一〇九、三〇〇	〇	漢陽		
忠清道	二、七四〇〇	五四	五五二	二〇〇、〇〇〇	〇	公州		

今八道の府郡里洞面等に關する統計二十年以前調を掲ぐれば左の如し。

り而して或る道には郡と並びて府を設けたる所あり廣州開城江華仁川東萊德源慶興三和務安の九府之なり府の長官を府尹と云ひ濟州島には特任牧使を置けり此の牧使府尹郡守は觀察使に統率せられ間接に内部に隸すれども首都たる漢城府の判尹は直接に内部に屬し各開港場の行政を司る監理は外務大臣の監督の下にあり又我が國の市町村に當るものに面洞里の三自治團體あり面は二千餘戸より五六十戸を有し其の長を風憲一に檢督と稱へ洞里は七八百戸乃至五六戸に過ぎずして洞の長を尊位或は上楔執綱と云ひ里の長を所任又は里任と云ふ。

世界大地誌
あじあ洲
韓國

慶	尙	南	道									
三	三	三	四	四	四	四	四	四	三	三	三	三
蔚山	昌寧	居昌	陝川	咸陽	梁山	靈山	巨濟	昆陽	漆原	安義	丹城	泗川
河曲	昌山	居烈	大良	合城	良州	尙藥	裳那	昆朋	武陵	利安	關支	史勿
島城	夏城		江陽		順正	鷲山	岐城	昆山		花林	丹溪	泗水
一一三	一一三	一一三	二〇三	一八三	六四	七四	六四	七四	四四	二四	八四	八四
宣寧	昌原	河東	咸安	固城	彦陽	機張	草溪	三嘉	八鎮	知品川	南海	熊川
宣春	屈自	韓多沙	咸州	古伽耶國	獻陽	車城	八溪	三支	八鎮	會稽	轉也山	熊只
檀山	河南	金羅	鐵城	獻山			清溪	岐山	牛山		花田	屏山
一九	一六	一一	一一	七	六	一四	一八	一一	一一	一四	一七	三五
						晉州						

百九

慶尙南道

道	北											
二	一	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
金海	東萊	長署	玄風	慈仁	興海	咸昌	開慶	禮安	新寧	軍威	清河	榮川
麗洛國	莨山	只香	苞山	其大	義昌	古寧	冠文	善谷	史丁火	赤羅	海阿	剛州
金官國	蓬萊	蓬山	玄豐	仁山	曲江	咸寧	開喜	宣城	花山		德城	奈靈
一八二	八一	三	一七	八四	八四	六四	二四	七四	七四	一〇	五	一三
密陽	晉州	計四二	高靈	比安	慶山	英陽	知禮	開寧	迎日	義興	眞寶	奉化
歸化	晉陽		大伽耶國	屏山	押梁	古隱	知品川	青州	臨江	龜山	眞安	鳳城
靈山	普川		靈川	比屋	章山	延陽	龜城	甘文	鳥川	龜城	青寶	玉馬
一六	七一	四九五	一四	九	五	八	四	八	八	一一	一六	一〇
												大邱

百八

成鏡南道

世界 大地誌	道	南	鏡	咸	道						
	四	四	三	三	四	四	四	四	四	四	
	高	利	甲	定	北	平	康	平	蔚	平	
	原	原	山	平	青	川	源	橫	楊	狼	
あしあ洲	德	時	盧	宣	三	吳	泉	橫	忽	往	
	寧	刺	川	威	撒	林	井	川	次	川	
	洪	阿	夷	中	安	福	德	花	楊	華	
	源	沙	山	山	比	州	州	田	滯	陰	
韓國	六	三	一	九	一	九	二	八	八	六	
	四	四	三	四	九	三	二	四	四	四	
	洪	文	長	三	安	永	咸	計	安	洪	
	原	川	津	水	邊	興	興	二	峽	川	
百十三	洪	妹	長	三	淺	博	文	窮	猪	綠	
	獻	城	幸	江	城	平	眞	岳	足	饒	
	洪	伊	登	登	登	唐	咸	安	猪	花	
	肯	均	州	州	州	文	州	朔	蹄	山	
百十三	六	六	七	三	二	一	二	二	三	四	
	六	六	七	三	二	一	二	三	三	四	
	六	六	七	三	二	一	二	三	三	四	
	六	六	七	三	二	一	二	三	三	四	
							咸				
							興				
							春				
							川				

江原道

原	江					道					北		安		
	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四
	高	通	寧	伊	襄	江	春	厚	泰	雲	郭	碧	朔	龍	
	城	川	越	川	陽	陵	川	昌	川	山	山	潼	州	川	
達	林	奈	伊	伊	臨	牛	河	光	雲	長	碧	寧	安		
	環	生	珍	文	屯	首	山	化	陽	利	圓	塞	興		
	忽	奈	買	文	屯	首	山	化	陽	利	圓	塞	興		
	忽	奈	買	文	屯	首	山	化	陽	利	圓	塞	興		
豐	金	奈	花	峴	溟	安	寧	雲	定	林	龍				
	巖	蘭	城	山	州	陽	朔	中	襄	土	州				
	豐	蘭	城	山	州	陽	朔	中	襄	土	州				
	豐	蘭	城	山	州	陽	朔	中	襄	土	州				
七	八	七	一	二	一	二	八	六	六	七	一	八	九		
	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四	四		
	杆	旌	平	三	鐵	淮	原	計	慈	博	熙	嘉	渭		
	城	善	海	陟	原	陽	州	二	城	川	川	山	原		
邊	仍	斤	陟	鐵	淮	平	慈	博	威	信	渭	長			
	買	乙	州	圓	州	原	城	陵	城	都	城	寧			
	買	乙	州	圓	州	原	城	陵	城	都	城	寧			
	買	乙	州	圓	州	原	城	陵	城	都	城	寧			
守	桃	箕	真	東	交	成	德	清	撫	乙	銅	山			
	源	城	珠	州	州	安	昌	塞	寧	沃	山	山			
	源	城	珠	州	州	安	昌	塞	寧	沃	山	山			
	源	城	珠	州	州	安	昌	塞	寧	沃	山	山			
八	四	七	一	九	六	二	一	八	九	五	八	五	六		
	四	七	一	九	六	二	一	八	九	五	八	五	六		
	四	七	一	九	六	二	一	八	九	五	八	五	六		
	四	七	一	九	六	二	一	八	九	五	八	五	六		
							寧								
							邊								

合	九府	一牧	三百三十一郡	三千七百七十五面
道	四明川	明厚	計	計
北	四穩城	多温平	七四茂山	三山
鏡	四鏡城	木郎古	富寧	石幕
咸	三會寧	阿未河	慶源	孔州
一慶興	孔城	禮城	九三鐘城	愁州
			七二吉州	鏡山
			計	計
			二九	八二
			七	九
			八	八
			二	鏡城
			五	七
			一六六	
			百十四	

兵備 舊式の兵士は一萬以上ありたれども兵器なく訓練なくして更に實際の用を爲さざりしを以て之を廢し今はヨーロッパ風に訓育せられたる一萬七千許の兵を備ふべく規定せられたり即京城に侍衛聯隊親衛聯隊履衛隊(以上近衛兵)砲騎工輜重の諸兵隊を置き江華水原大邱平壤北青の五處に鎮衛聯隊濟州島に鎮衛大隊を置くの制なり然れども實際には五千有餘の兵を有するに過ぎずと云はざるべからず又海防に關しては二十八處に砲

國名	條約締結の時			國名	條約締結の時		
	年	月	日		年	月	日
日本	一八七六	二	二七	フランス	一八八六	六	四
アメリカ	一八八二	五	五	オーストリア	一八九二	六	二二
イギリス	一八八三	一	二六	清國	一八九九	九	一一
ドイツ	一八八三	一	二六	ベルギー	一九〇一	三	二二
イタリア	一八八四	六	二六	デンマーク	一九〇二	七	一五

臺を築造すべく豫定せられたるが軍艦は現今一隻を有するもの如し。
外交 韓國と修好條約を締結して通商貿易を爲す國は日本アメリカ合衆國イギリスドイツイタリアフランスオーストリア清國ベルギーデンマーク等なり。

財政 韓國の財政は從來甚だ不整頓なりしが近年豫算表の調製あるを見るに至りしは一小進歩と稱し得べし而して光武八年一九〇四の歲出入は孰も約一千四百二十一萬圓に止まれり。

年 度	歳 入	歳 出	歳入超過
光武八年(一九〇四)	一四二一、四五七三	一四二一、四二九八	二七五
光武七年(一九〇三)	一〇七六、六一一五	一〇七六、五四九一	六二四
光武四年(一九〇〇)	六二六、二七九六	六二六、一八七一	九二五

今光武七年に於ける歳入の内譯を示せば左の如く地稅其の大都を占む、

歳 入	前年度剩餘金	歳 出
地 稅	關 稅	農部所管
戶 稅	雜輸入稅	中樞院費
雜 稅	鑄造費	扈衛隊費
		電信郵便費
		量地衙門所管
		臨時費
		豫備費

該歳入に對する歳出は軍部所管、度支部所管、皇室費、等を主とす、

歳 出	法部所管	警部所管	學部所管
皇室費	一〇七六、五四九一	三六、一三三二	一六、四九四三
宮内府所管	一〇〇、四〇〇〇		
	二六、一〇二二		

者老所費	農部所管	農部所管
元帥府費	二、四〇二六	四、六三〇〇
議政府費	六、五八五三	一、八五八〇
内部所管	三、八七三〇	二、〇九九三
外部所管	九八、〇五三三	四六、一九三五
度支部所管	二七、八一九八	七、一〇一八
軍部所管	一六六、六七二六	五、六二四〇
	四二二、三五八二	一〇一、五〇〇〇

貨幣

貨幣の制度は大に紊亂せしが、光武五年(一九〇一年)貨幣條例の發布ありて貨幣製造發行の權は政府に屬し、金貨本位の名を有するに至れり、而して其の制度は我が國に則りしものにして、金貨に二十圓、十圓、五圓あり、夫、日本の二十圓、十圓、五圓の金貨と同質同量なり、又補助貨には銀貨に半圓、二十錢、白銅貨に五錢、赤銅貨に一錢あり、此の外舊貨幣あり、即ち五兩、我が一圓、二兩、二十錢の銀貨、二錢五分(五錢)の白銅貨、五分(一錢)の厘銅貨、一分の黃銅貨、葉錢等なり、一分黃銅貨、葉錢は孰も我が二赤に通用す、而して葉錢は一文錢、五文錢

の類を云ひ、大小善悪ありて一ならず、以上は内國貨幣に就きて記せるが、外國貨幣は日本銀行兌換券、第一銀行一覽拂約束手形等主として通用す。

生業 往昔は百業稍發達し、産物にも觀るべきもの多かりしが、外には強大國の壓抑を受け、内には苛法重斂の餘弊を被りて、遂に今日の如き悲況を現出するに至れり。

林業

林業は目下盛況を呈せず、人工林の如きは殆皆無にして、濫伐を事とせるの結果、森林の存するは關北面及兩平安道地方に限れるが如し、而して平安北道の江界郡より咸鏡北道の茂山郡に至る地域は鴨綠豆滿兩江の上流地方を包めるが、東西三百二十軒、南北四十乃至八十軒に近き森林を有し、五葉松落葉松樅之が主木たり、其の鴨綠江を下る木材は毎年三百萬乃至五百萬本に達すと云ふ。

牧業

牧業は韓國生産力の一要部を占む、牛は各地に産し、其の種も佳良なり、馬は體軀矮小なれども、力役に堪ゆるが如し、犬豚は食料に供するの目的を以て廣く飼養せらるるを見る、而して地味氣候の適するあるを以て養蠶業

水産業

は衰運恢復の望充分なりと云ふ。

水産業は其の利權殆本邦人の掌中にありて、日本海より朝鮮海峡を経て京畿道の近海に至るの間、我が漁船の往來するを見る、殊に近時平安道沿海の漁業權も獲得せるを以て、將來益盛運に向ふべきが、毎年の漁獲高三百萬圓内外に達すと稱せらる、魚類は本邦の近海にあるものに似て、鯨、鮪、鯖、鯛、鱈、明太魚等あり、就中鯛及鮪を以て主要とす、兩者共に殆産せざる處なけれど、主産地とすべきは、鯖は三南面の沿海、鯛は尙之に加ふるに江原、黄海の二道なりとす、此の外、海鼠、淡菜、天草等の産あり。

農業

鹽も亦極めて發達せざれども、鹽田は少なからず、南東部にありては、迎日灣内の三島、洛東江口の鳴湖を以て著名とす。

農業は其の耕種法の不完全なると、灌漑法の不整備なるとに拘らず、韓國生産の主力たるを失はずして、我が日本の農業に類し、耕地の面積は百八十八萬町歩内外即ち、約一萬八千方軒を有せり、而して農産物には、米、大麥、小麥、燕麥、高粱(Holcus sorghum)、大豆、蠶豆、人蔘、煙草等あるが、殊に米、大豆、人蔘を以て主

商業

す、蓋し韓人が勞力に乏しきと資本の多からざるに、施政宜しきを得ざるに
 等はその主因たるべし。
 商業に就きて記さんに内國商業は微々として殆ど見るに足らず、其の原因
 は主として物産の饒多ならざるに基づくべしと雖、道路水路等の交通機關
 の整備せざると他に種々の情弊の存するあるに因らざるばあらず、然れ
 ども外國貿易は漸次進歩して二千萬圓を超ゆるに至れり。

年次	輸出	輸入	輸出入全計	輸入超過
一八九八	五七〇、九四八	一一八一、七五六	一七五二、七〇五	六一〇、八〇七
一八九九	四九九、七八四	一〇二二、七三四	一五二二、五一八	五二二、九四九
一九〇〇	九四三、九八六	一〇九四、〇四六	二〇三八、〇三七	一五〇、〇五九
一九〇一	八四六、一九四	一四六九、六四七	二三二五、八四九	六二二、四五二
一九〇二	八三一、七〇七	一三五四、一四〇	九二一八五、八四七	五二二、四三三

重要貿易品

重要貿易品は輸出に金(五〇六萬圓)、米(三五二)、豆類(一八二)、人蔘(一二〇)、牛皮(六九)等あり、輸入に綿布綿絲類(五三六)、絹布(八五)、石油(七九)、金屬(五八)、草蓆(五六)。

貿易港

嶺山用品(四六)、鐵道用器具(四五)等あり。
 貿易港は從來仁川、釜山、元山の三港に過ぎざりしが、近年に至り新に木浦、鎮南浦、馬山浦、群山浦、城津浦の五港を開き、將に龍巖浦の開港を見るに至らんとす、又開港市場には京城及び平壤あり、八開港に於ける沿岸貿易は左の如し。

港	一千九百一二年		一千九百一一年	
	輸入	輸出	輸入	輸出
仁川	二五二、七八一	九、二四四	一九九、一七五	九、八三六
釜山	四四、三三三	五八、七五三	四五、五二五	四四、五九六
元山	五二、四九三	五七、三〇二	三〇、六九〇	六二、六九六
鎮南	八、三八〇	八〇、三八二	三、四六六	七〇、八五六
木浦	一〇、五五七	八一、七三五	一〇、四九二	四五、六六三
群山	七、三六九	五二、七二八	五、七二二	四七、二八五
馬山	一、〇八九	一九、一五四	一、五二七	一一、〇九六
城津	九、四九九	八、四八九	七、八四三	七、四八二
計	三八四、四九五	三六七、六七九	三〇四、四二四	二九九、五二二

道路

交通。道路の設備は至りて不完全にして極めて不便を感ず所謂王路は國內の主要都會を連絡すれども之を修繕改築すること絶えてなく行路の難き實に名狀すべからず然れども地方に依り多少の差異ありて京城より開城、平壤等を経て義州に至る街道は稍良好なるが如し王路の外には村落を連絡する通路あるも多くは踏み分け道なれば到底普通の道路として使用し得べきものに非ざるなり。

里程表

京城より各地に至る日本里程表

仁川	八、一六	全州	四四、一六	晉州	七五、一六
水原	八、一六	元山	五四、〇〇	木浦	七六、〇〇
春川	一八、〇八	平壤	五九、〇〇	馬山	七九、〇〇
忠州	二四、三三	鎮南	五九、〇〇	釜山	八四、〇〇
公州	二八、一六	大邱	五九、二〇	義州	九六、〇〇
海州	三三、二八	光州	六四、〇〇	城津	一二七、〇〇

鐵道

鐵道には京仁、京釜、京義の三線あり京仁線は明治二十九年（一八九六）三月アメリカ人モールズ其の敷設權を得たりしが工事中途にして同三十一年（一九〇八）十月邦人の手に移り京仁鐵道會社起り同三十三年（一九〇〇）七月全線四十三軒の間開通するに至り京釜線は明治三十一年九月の京釜鐵道合同條約に基づき同三十四年（一九〇一）九月京城釜山兩方面より起工せり全線四百六十餘軒中未設の處あれども京仁、京釜兩會社の合同後我が政府は京釜鐵道會社の規則を改正し銳意其の急成を計りつつあり而して京義線に關しては三十七年（一九〇四）三月敷設工事に着手したりと云へば本線開通の日も遠きに非ざるべく要するに韓國の鐵道は一切日本人の經營する所と成れり。

- 京仁線 京城—南大門—龍山—永登浦—柱峴—仁川
- 京釜線 永登浦—始興—水原—成歡—沃川—大邱—密陽—釜山（草梁）

水路

京義線 京城—開城—平壤—安州—定州—義州
 電氣線 道は明治三十二年(一八八九)より營業開始せられ、京城の内外に既
 設線十三杆あり、未設を合はすれば四十杆に達すべしと云ふ、此の經營は韓
 廷宮内府とアメリカ人との組織せる起業會社に屬せり。
 水路に就きては陸上に洛東江、大同江、等航行し得べき、大河あれども、河道
 を改修し土砂を浚渫すること無きを以て、充分其の効を奏する能はず、海路
 に關しては凡そ二千七百哩の海岸線あるに拘らず、脆弱なる帆船と三隻、一千
 百六十八噸の汽船とを有するに過ぎざれば、輸出入の貨物の運搬を始とし、
 主要なる沿海諸港の航行に至るまで、均しく外國船、特に日章旗船に依頼せ
 ざるべからず、其の船舶の主要なるものは日本郵船會社、大阪商船會社、大家
 汽船部、仁川堀廻漕店、等に屬せるが、韓國諸港の入船隻數、噸數、等左の如し。

入港船舶表

旗章	帆船		汽船		合計	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
日本	一五一六	六、二二二	一九〇四	八七、七一九	三、四二〇	九三、八三一六
韓	六四一	一、二二七	八四五	一六、五七八	一、四八六	一七、八〇五九

入港船舶表

如し

前表に見えたる五千四百六十二隻、百二十四萬餘噸を港別にせば左記の

港	帆船		汽船		合計	
	隻數	噸數	隻數	噸數	隻數	噸數
仁川	四五二	一、七五四	五三三	二八、七八五	九八四	三〇、五三九五
世界大地誌		あじあ洲		韓國		百二十七
計合	二、五六〇	八、〇五三	二、九〇二	二六、〇八九	五、四六二	一、二四、一四三
イギリス	四	二九四	一三三	一〇、一三三	一三七	一〇、二五一六
清	三三九	三五三	四	一九九	四	一九九八
イタリヤ	—	—	—	二七九	—	二七九
アメリカ	五九	一五七〇	三三	四八〇	九一	二〇五〇
フランス	—	一七四四	—	—	—	一七四四
ドイツ	—	—	—	一三七九	—	一三七九
ノルウエー	—	—	二	五〇	二	五〇

釜山	九五六	三、〇四九九	七八六	三七、九六六二	二七四二	四一、〇二六二
元山	八六	八七三二	三三五	一五、一五八九	四一一	一六、〇三一一
鎮南	八五五	一、六七六七	二八三	五、八六二六	一一三八	七、五三九三
木浦	七二	三八三〇	三七三	一六、五二二六	四四五	一六、八九四六
群山	六九	一四九三	一六七	三、五七七五	二二六	三、七二六七
馬山	六二	八二七	二〇七	二、九七四九	二六九	三、〇五七六
城津	九	八五八	二二八	五、二五二七	二二七	五、三三八五

次に釜山を起點とし内外の諸港に至る漕程は左の如くなるが、京釜鐵道完成後は門司釜山間約八時間釜山京城間約十八時間合計二十六時間にして京城に達し得べし、又航路、標識は三十二ヶ處と成るべき豫定なり。

内國	木浦	一九二	仁川	三七四	元山	三〇六
航路	群山	三三一	鎮南	五六五	城津	四七〇
外國	竹敷	五二	長崎	一六二	大阪	四〇八
航路	下關	一二四	神戸	三五六	ウラサオストク	六三〇

郵便

郵便は近年の創設に係り一千九百一年より萬國郵便聯合に加盟したり京城に郵便總司ありて三百六十四處の郵便司を管轄し、線路の延長は一萬六千餘り、一千九百一年に於ける郵便物の發着數は百七十萬二千通なり、開港、開市の地には日本郵便局の設けあり。

電信

電信は一千八百八十五年より其の線の架設を見、今日に於ては延長三千五百餘りに達し、電報司は凡そ二十ヶ處あり、一千九百一年に於ける發電數は十五萬二千四百八十五にして京城釜山間、京城仁川間等の電線は我が國の架設に係れり。

電話

電話は京城内に存するのみならずして仁川、麻浦、水原、開城、平壤等の間にも通信の便を興ふ。

處誌 京畿道を中心とし、他の十二道を分ちて三面とす、其の三面は南部に位する南と北との忠清、全羅、慶尙の六道を云ひ、其の關西面とは北西にある三道を云ひ、其の關北面は北東に於ける三道を稱する名なり、而して此の國は平低の地少なく、住民多からざるが爲、か都會の地に乏しく、首府を除

京城

ければ人口五萬に達するものは唯一あるのみ。

京畿道 京畿道は韓國の中央部に位し西は黃海に面せり、漢江、臨津江之を潤し、水陸運輸の便、比較的に備はり、當國の首腦たる處なり。

京城 北緯三七度三〇分、東經一二七度四分、一名を漢陽、漢城と云ひ又セウルと通稱す、今を去ること五百年前、李氏の立ちて朝鮮王と成るや、都を此處に定めしが、今尙、韓國の首府として人口二十萬を有す、此の地は漢江、西江の二水に挾まれ、三方に山脈を控え、要扼の區たり、氣候は寒暑の差稍、烈しきも雨雪甚多からず、我が札幌地方に類する所あり、市街は南北二千三百米突、東西三千三百米突に近く、周圍には胸壁を備へ、其の延長十八軒、高三米突許あり、而して諸道に通する大路の起端なる興仁、東大門、崇禮、南大門の外に六門を構ふ、城内を分ちて東、西、南、北、中の五署と爲し、更に之を坊、契に細分するを以て、通計四十七坊、三百四十契あり、坊は我が通、にして契は町なり、道路には大路、中路、小路の三種あり、街衢は概して宏濶ならざれども、其の本街は頗、端麗にして幅十五米突を下らず、市内の四分の一は宮殿、官衙、公署、貴族の邸宅之を占め、古宮殿

泥岷

には昌德宮、景福宮あり、昌德宮は殿宇今や傾敗して往昔の壯觀を存せず、景福宮は市の北西部に位し、其の外廓は四軒餘にして、壘壁の高は四米突に近く、河流を引きて、塹濠を爲し、幅四米突許あり、門は東、西、南、北に各一を設け、其の南にある正門を光化門と名づく、門前の大街の左右には諸官衙相並べり、景福宮の南方西署貞洞の一隅に慶運宮と稱する大闕ありしが、今年祝融の禍に罹れり、此の附近に各國公使館あるが獨、我が日本公使館は木、竟山、即、南山の麓形勝の地に位し、領事館は南大門に近き處にあり、俗に日本居留地と稱せらるる泥岷の邊には日本守備大隊本部あり、日本人は三千餘人を以て京城在留外人の首位を占め、山口、長崎の二縣人最多し、此等の同胞は貿易其他の雜業に従事し、居留地役所、商業會議所、學校、病院、社寺等を有せり、京城は開市の一なるが、固有の商業にも見るべきものありて、泥岷、貞洞は其の中心なり、而して電氣鐵道の通せる鐘路街には六矣座ありて、織物紙、魚類等を賣捌き、雜踏甚し、城内及、近傍の名勝、舊蹟には、増田長盛の築きし倭城臺あり、又蠟石の塔、龜碑、關羽廟、大院君の墓所なる孔德里、其の他孔子を祭れる文廟

獨立門等皆著はれ、城内には一の寺院も存するあるなし。

龍山は京城を距ること六軒漢江に瀕し水運の便多し、此の地に貨幣の製造所なる典園局あり、麻浦は京城の附庸港にして仁川に往來する艀船又は小蒸汽船の發着地なり、永登浦は沃野の中にありて漢江に接す、京仁、京釜兩線の交叉點にして頗有望の地なり、仁川港(一六〇〇)北緯一三七度二八分は一に濟物浦と云ふ、韓國第一の貿易場にして京畿灣中の仁川灣に瀕す、往時は寂莫たる小漁村なりしが、明治十六年(西紀一八八三年)を以て開港の舉あるや乍變じて繁華なる小都會を爲すに至り、一千九百年に於ける住人は韓人(八三七〇)、日人(四二二五)、清人(一二六三)、其他八六合はせて一萬三千九百三十四人なりき、此の地は京城を距ること鐵路四十三軒、我が長崎を距ること四百五十餘裡にありて、月尾島と相對し、其の間は船舶の碇泊場たれども水底淺くして大船は海岸に近く投錨する能はず、本港輸出品中の重要なるものは米、紅蔘、大豆の外、小麦、牛皮、毛皮、小豆、黍、砂金等にして、綿布、毛布、雜貨等を主要輸入品とす、市街は其の形勢我が神戸に類似せる所ありて、朝鮮街と居

仁川

留地とに分かる、日本居留地は清國居留地と各國居留地との間に位し、日清兩國の居留地は各自領事の專管に屬し、各國居留地は監理領事代表者より成る行政團の管理に係れり、在留同胞は九千餘人に及び、商店を開き倉庫を設けて盛に貿易を營み、領事館の外、學校、病院、公園等ありて、恰内國にあるが如し、而して日韓貿易殊に大阪、神戸に對する貿易の發達と居留民の増加とは居留地域の擴張を促し、遂に海岸埋立工事を起すに至りき、本港を南東に距ること四軒餘の地に仁川府あり、府尹の駐在地たるも市街には記するに足るものなし。

水原

廣州

水原は京城の南に位し、王城堡障の一にして觀察府あり、商業稍、見るべきものあり、南陽は小灣を有す、安城は金嶺のある處なり、驪州は漢江に沿ひ京城との交通便にして商業稍盛なり、廣州(一〇〇〇〇)は國都の東方にあり、百濟温祚王の古都なるが、仁祖李倧清兵の爲に陥られ、一六三七事定まるに及びて堡障の重地とし、九寺を設けし處たり、楊州の清涼里に故閔后の墓あり、洪陵と稱せらる、碧蹄館は礪石嶺の北にあり、文祿の役、明將李如松の大敗せ

開城

し處なり、長湍は臨津江の要津にして大豆の輸出多し、開城(五、〇〇〇)は一に松都と云ふ、當國第二の都會なり、高麗の王氏四百年間の舊都にして民俗古を尙ぶの風あり、此の地は王城堡障の一にして府城あり、城の内外の構造京城に似て規模小なり、紙類、油紙を製し、人蔘、金、煙草、大豆を集散し、商業上、仁川と親密なる關係を有せり。

江華島

江華島は東西四十餘軒、南北二十軒あり、建築石材、石灰、莞草を産す、島の東岸に江華あり、此の地は蒙古の兵を避けて高麗が約二十年間(一五九三)都を移し、仁祖も亦清兵を避けし處なるが、現今離宮あり、皇帝の避難に備へ、記録の保存せらるるもの少なからず。

永宗島

永宗島は長十二軒、幅四軒あり、明治九年(一八七六)我が軍艦雲揚が砲撃を受けし處なり。

月尾島

月尾島は周回四軒に過ぎずして日本海軍の貯炭庫を有す、關西面、關西面とは黃海道及南と北との平安道を云ふ、滅惡、妙香、狄隄、江南の諸山脈之を横ぎり、金川江、大同江、清川江、博川江、鴨綠江等の流域に當れ

海州

黃海道

海州(一、〇〇〇)は同名の灣に近く位し、觀察府の所在地なり、

り、耕地多からざるも、鑛山、森林に富めり。

平壤

平安南道

平壤(四、〇〇〇)は關西第一、韓國第三の都會にして、觀察府の

所在地なるが、大同江江口より約百軒に瀕し、大城山に據り、天險稀に見る要害なり、附近の地は肥沃にして物産少なからず、箕氏、衛氏、往古此處に都し、文祿の役には、小西行長が祖承訓に勝ち(元年)李如松に破られ(二年)日清戦争に當りては、我が軍が敵軍を包圍攻撃して大捷を得し地なり、市街は内城、中城、

鎮南浦

外城東北城の四區に分かれ大同門通、朱雀門通等は商業盛なる處とす殊に此の西京は明治三十一年(一八九八)より開市と成り砂金大豆小豆米牛皮煙草等を輸出し紡績絲綿布摺付木紙卷煙草等を輸入す本邦居留民も逐年増加して帝國領事分館あり又箕子廟、牡丹臺、玄武門、哀悼碑等は最名高し鎮南浦即鎮南浦は平壤の下流三十七哩にあり明治三十年(一八九七)より開港たり二千噸内外の船舶は容易に碇泊し得れども冬季二三月間は結氷するの不便あり本港の貿易は著しく發達せざれども綿布石油摺付木陶器等を輸入し米金牛皮木材等を輸出して漸次好況を呈す我が居留民は未だ五百人に達せざれども鎮南山の麓に設けらるる日本領事館は旭岡公園に接し眺望絶佳の地にあり成川は大同江の一支に近く煙草人蔘を以て名あり三和は成川の北方にあり府尹の駐在地なり般山、价川は大同江の中流に於ける産金地なり寧邊は一に鐵鑛と稱せられ本道北東部の要地たり安州は清川江を距ること遠からずして稍名ある處なり

三和

寧邊

平安北道

寧邊は清川江の一支に近く位し觀察使の駐在する處なり雲

義州

龍巖浦

山は金を産す定州は天磨山の南方にありて絲を産す明治三十七年戦役の際我が陸軍が始てロシア兵に接したる處なり義州(一〇〇〇)は鴨綠江に臨みて丘陵に據り戦史上著名の地たり而して柵門大市を開くに當りては百貨の輻湊すること夥しと云ふ龍巖浦は鴨綠江口を溯ること二哩にありて碇泊に便なり昌城、楚山、渭原は北西境に近き地にありて渭原は李世梁の祖地なり江界は秃魯江に沿ひ人蔘の産あり
關北面 關北面とは江原道及南北の咸鏡道を云ふ北部に狄隘、妙香等の山脈あり南部に太白聯脈の近く海に迫るあり平地港灣は乏しけれども天産は少なからず

鏡城

慶興

城津

咸鏡北道

鏡城は本道海岸の中部に近く位し觀察府を有せり茂山は會寧、鏡城、稔城、慶源、慶興と共に六鎮に數へられ豆滿江に沿へり會寧は加藤清正が二王子を擒にせし處とす慶源は水運の便あり商業稍盛なり慶興には府尹を置くロシアとの陸路貿易行はる雄基は豆滿江口の一小部落に過ぎざれども一小灣に臨み百貨の集散地として有望なり城津は本道南部の港

成興

にして明治三十二年(一八九九)以來、外國貿易の爲に開かれたり、未だ見るべき發達なきも、交通上の要區として頗る有望の地なり、我が居留民は一百内外に過ぎざるも既に帝國領事分館の設あり、温水坪は城津に近き温泉地なり、

成鏡南道

成興は北緯四十度に近くして觀察府を有す、此の地方に梨の

元山

産あり、北青は鐵の産地なるが厚致嶺の南方に位し北境に通ずる要路に當れり、端川は北青の北東にある金産地なり、甲山は盧川江の流域にありて銅を出だす、元山(二〇〇〇)北緯一三九度一〇分は德源府の南東にあり、一千八百八十年以來開港の一にして釜山を距ること三百六浬、陸路六百浬の處にあり、錨地は德源灣の南隅に當り長德島を北東に控ゆるも、北風の際には起浪の恐あり、然れども貿易は漸次發達し、大豆、小豆、明太魚、砂金、苧麻布等を輸出し、綿布、綿絲、石油、摺付木等を輸入す、市街は四區に分たるるが、北長德山に據り北と東とに海を控え領事館の設あり、在留本邦人の數は一千五百に餘り、學校、醫院、寺院等を有す、又守備隊の駐劄するあり、我が海軍の石炭庫あり、市街の南方赤田川を隔てて韓人の居住する處あり、元山里と云ふ又元山の

春川

北西約八浬に滿德山あり、文祿の役加藤清正が據りし處なり、安邊は一小都會に過ぎざれども太祖の建立せる釋王寺あるを以て名を知らる、

江原道

春川は觀察府の所在地、穢狛の古都なるが漢江の支流に沿へり、金剛山は勝地にして正陽寺、良安寺、表訓寺等あり、鐵原は臨津江に臨み古

來鐵を産す、新羅の王子泰封弓裔の都せしは此の地なり、堂岷は鐵原の北東に位し金の産出あり、原州は洪川江の上流にあり交通の要衝に當りて稍繁華の地たり、江陵は五臺山の東方にあり、山海の景勝を以て著はる、

爵陵島は日本名を松島と云ふ、竹邊岬の沖にあり、杉、松等の良材を産し魚類多し、

爵陵島

大邱

三南面 三南面は南と北との忠清、全羅、慶尙の六道を云ふ、日本海、朝鮮海峽、黃海に臨み、南部より西部には島嶼に富み、又海岸には屈曲多し而して木白聯脈、小白聯脈の外、車嶺、蘆嶺等の山脈ありて、洛東江、岳陽岳、榮山江、錦江の流域には平野稍廣く、韓國の富は三南にありと傳へ來れり、

慶尙北道

大邱(二〇〇〇)は漆川に沿ひ觀察府のある處なり、此の地は

舟楫の便を有し商業頗盛にして毎年四月及十月に會市を開く慶州は大邱の東に當り雞林君子國と稱せし新羅の舊都たり高靈は大邱の南西に位し往昔安羅と稱せし處なりと云ふ星州は高靈の北にあり古の星山伽耶國にして山水明媚の地たるのみならず兵事上の要區なり善山は洛東江に臨み英秀なる人物を出だせし地なり諺に曰はく朝鮮の人才は半嶺南にあり嶺南の人才半は善山にありと當今の善山果して如何の感あるか尙州は水陸の要衝に當り股脈の地なり安東は巨川の支流に臨み名所舊蹟に富み文人墨客の來賞するもの多し青松は安東の南東に當り織物を産す

晋州

慶尙南道 晋州は晋江に跨り本道の首府なり木綿綿花麻布紙を出だす泗川は晋州の南にあり島津義弘が大捷を獲たる處なり固城は泗川の南東東に位し一大灣を有して形勝の地たり鎮海は同名の灣に瀕す交通上并に軍事上要地たるべき處なり馬山北緯三三度五分 東經一三八度五分釜山の西方陸路五十六軒海路三十九裡にあり明治三十二年(一八九九)より開港と成り軍艦商船の碇泊に便を與へ米大豆砂金牛皮等を輸出し綿絲綿布石油線綿等を輸入

馬山浦

す此の地に我が領事館あり居留民少なからず舊馬山浦は馬山居留地を距ること約四軒の處にあり從來稍繁華なる一邑なりしが新馬山の開設以後漸次衰頽の徵あり金海は靑洛國の都なりし處なるが洛東江に瀕し海峡に枕む天宮の地にして軍事上の鎮鎗なり三浪津は龜浦下端浦と共に洛東江上の一津にして貨物の集散地なり密陽は金海の北方に於ける形勝の地にして一城を構ふ温泉あり商業も亦股脈なり

釜山

東萊は府尹の居城を備ふる一小都會にして之を距る八軒許の處に梵魚寺と稱する巨刹あり釜山北緯三三度五分 東經一三三度三分は東萊の南十三四軒にありて我が對馬島と相對し其の間僅に四十裡なりされば兩地の關係は古來密接なるものありて明治九年(一八七六)日本との通商地と成り其の後明治十三年(一八八〇)に至りて一般の互市場と成れり港は洛東江口を距ること東方十六軒にありて絶影島の爲に東と南との兩部に分たる淺き南灣は漁船の根據地と成り深き東灣は三千噸の汽船をして自由に碇泊せしむれども北風の起る時は波浪高きを欠點とす港内長十六軒濶四軒乃至八軒

にして防波堤、波止場等の設備あり、當港の貿易に就きては米、大豆、小豆、海參、干鮑、干鰯、牛皮等の輸出ありて綿絲、綿布、摺付木、食鹽、煙草、陶器、繩類、石油、雜貨等の輸入あり、仁川の開港以來少しく衰微せるの傾向なきに非ざれども、此の國屈指の要港たるを失はず、日本居留地(東四二十町、南北十町、面積凡十萬坪)は龍頭、龍尾二山の麓にありて絶影島に對す、住民は山口、長崎の二縣人を主とし、總計一萬人に餘り、本町、北濱町、幸町、辨天町は商賈軒を並べ頗る繁華なり、而して領事館、居留地役所、商業會議所、學校等のあること、仁川の如くなれども、釜山は一層日本的に發達せり。

草梁は釜山の北東三四丁にあり、監理衙門の所在地にして清國居留地住居者二百餘人あり、釜山鎮は草梁の北四軒にあり、東に城廓ありて西に小西行長の城趾あり、金井に温泉あり、蔚山は壬辰の役、加藤清正が明の三十三將と朝鮮の七將との合圍を受けて苦戰せし處なり、蔚山沖は明治三十七年の役、ロシアの艦隊が敗戦せし處なり、絶影島は一に牧島と稱す、釜山と相對し、周回二十八軒ありて南北に長く

絶影島

巨濟島

開山島

光州

木浦

東西に短し、島内丘陵多く平地稀なり、浦口に面する處に日本の貯炭所あり、巨濟島は馬山浦鎮、海灣の南に位し、良港多きが殊に竹林浦は、大軍港たるに適せりと云ふ。

開山島の附近は壬辰の役、海戰のありし處なり。

全羅南道

光州は榮山江の流域にあり、觀察使の駐劄する處にして米穀、

木綿、紬、生絲等を輸出す、羅州は光州の南西にある商業地にして米穀、竹器、扇籬を産す、榮山浦、沙浦は水運の便あり、木浦北緯三四度四七分、東經一二六度二〇分は務安府及榮山江口を距ること遠からず、明治三十年(一八九七)以來開港の一たり、後方一帯に丘陵を負ひ、前面に島嶼を控ゆるを以て港内浪靜にして水深く、錨地は水深十三米突を下らず、汽船は直に岸際に泊するを得、誠に天成の良港たり、重要輸出品は米、大豆、小豆、海草等にして、綿布、綿絲、石油、摺付木等を主要輸入品とするが、群山開港の舉ありしより稍衰へしもの如し、居留地は諒達山の南東にありて凡二千名の日本人は居留民の殆ど全部を占め、領事館、商業會議所等あり、市街の中、領事館通の東部、務安通等は最繁華の處とす、海南は同

古今島

名の半島の北西部にあり、壬辰の役に日本水軍の敗れし處なり。
古今島は助藥島、新智島と共に長直路を爲せり、良好なる錨地にして二十七八年の役、我が海軍が據りし處なり。

巨文島

巨文島は北に東西の二島を控えて一港を抱く、西人の所謂ポートハミルトン (Port Hamilton) にして往年イギリス艦隊が一時占領せしことあり。

濟州島

濟州島はオランダ人のケルバルト (Quelpert) にして漢名を耽羅と云ふ、半島の南端を距ること八十四軒を出でず、東西六十九軒、幅の平均二十四軒、面積一千九百四十三方軒、周圍百八十五軒あり、海岸は著しき出入なく、山岳谷は千態萬狀を呈せるが土壤は火山質なり、島の北側并に東側は概開墾せられ、耕地は海拔六百米突に達し小麥、大麥等の産あり、而して島内樹林多く漢羅山 (二〇四二) の最高部を除く外、松柏鬱蒼たり、沿海は附近の牛島、竹島と共に鮑、海鼠、海藻等の水産物に富めり、島の北岸に山底浦あり、佳良の錨地とす、同浦を距ること二軒の地に濟州あり、牧使の駐在する處なり、板浦に接する大靜、并に東岸にある旋義は島内の名邑たり、住民は約一萬人にして男子

羅州群島

は舟を造り漁獲を専にし、女子は耕種、伐木に従事す。
羅州群島に飛禽島、都草島、荷衣島、上下苦島、其佐島并に若干の小島あり、圍座して八口浦を包む、港内水深く、風浪の憂少なく、船舶の停繫に便にして數多の港口を備ふ、實に無比の良灣にして兵備上頗重要な處なりと云ふ。

全州

全羅北道

全州は本道の凡中央部に位す、此の地は觀察府、祖陵即李太祖

群山

の墳墓のある處にして、又後百濟の舊都たり、魚鹽の利舟楫の便共に備はり、市街繁盛實に全羅地方第一の都會とす、産物の中殊に著名なるは籐なり、南原は南部の一都會にして城郭を構ふ、壬辰の役に激戦ありし處なり、益山は全州の北西に當り形勝の地なり、龍華山は益山の北に當り山上に箕準、古都の趾あり、西浦は錦江に臨み物貨の集散少なからず、群山北緯三十五度五九分、東經一二十六度四二分、は明治三十二年 (一八九九) より開港と成り、錦江の口に位して北西に向へり、而して主要輸出品は米、桐材、麻布、牛皮、紙等にして、重要輸入品は綿絲、摺付木、陶器、酒、石油等なり、貿易は仁川或は木浦との間に行はるるもの多く、日本居留地には五百内外の本邦人ありて、領事分館、居留民會學校、寺院等の建設あり。

公州

忠清南道

公州(一〇〇〇)は觀察府のある處なり、錦江を控えて水陸交

通の要衝に當り、春秋二季の大都市には取引盛なり、恩津は公州の南南西に位す、灌燭寺あり、彌勤の石像を以て有名なり、扶餘は南西に當り、百濟の都城ありし處なり、江景は交通の便に富み、韓國南部の商業地たり、漢山は江景の下流にありて、錦江に沿へり、牙山は本道の北部にあり、明治二十七年(一八九四)清國海軍が朝鮮救護兵を上陸せしめし處なり、成歡は牙山の北東東に位し、二十七八年の役我が大島旅團が大勝せし處として著はる、近傍の稷山は金鑛を有す、鷲岩山は東境に近き温泉地なり。

忠清北道

忠州は漢江に近く位して交通の要衝に當り、商家幅濶して市

街稍盛なるが、觀察府の所在地にして壬辰の役に日本諸將が勝戦せし處とす、可興は金遷と共に漢江上流の要津なり、清州は東津江を距ること遠からず、南北往來の要路に當れり、沃川は錦江に沿へる綿産地にあり。

忠州

中華

清國

名稱 當國には古今に通ずる定名なし、國人自稱して中華、華國、中國と云ふも、其の境域明確ならず、建國以來屢革命ありて、歴代其の國號を異にし、夏殷周、秦漢、晋、唐、宋、元、明等あり、當朝は滿人の愛親覺羅氏の世祖順治帝の創立(皇紀正保元年(西曆一六四四)に係り、國號を清と云ひ、大清國と稱す、而して我が國にては支那と通稱す、蓋し西人の稱呼に基づけるなるべし、始、ギリシア人がマライ人、印度人等の媒介に依りて、東洋の強大國の存在を知り、泰をシネ(Sine, Sura)と爲せしを傳へて、シナ(China)イスマニア、シノーヌ(China)イタ、チアイナ(Ch-
ina)リス、等と訛りたりしが、獨、ロシア人は蒙古的稱呼キターン(契丹)に基づき、てカタイ(Cathay)、キタイ(Kitai)と呼ぶ。

位置 清國はアジア洲の東部より起りて中央部に達する一大帝國なり、其の極南の地は海南島の南端にして、北緯十八度十三分に當り、其の極北の地は蒙古のイルキクタールカック(噶爾奇克達爾嘎克)山脈の北端、北緯五十六度

四十分なり、又極西は新疆の西端、東經凡七十三度にありて、極東は黒龍江とウスリ(烏蘇里)江との相會する點、東經百三十五度にあり。

境域 清國の形狀は東部の海岸線を底とし、パミル高原の東邊ムスタハアタ(Mustag Ata)山を頂點とする所の一の孤狀線三角形なり、北西及び北は天山アルタイ(阿爾泰)等の山系并に黒龍江に依りてロシアのシベリアに境し、東はウスリ江、不成山脈、鴨綠江等を挟みてロシアの沿海州及韓國に隣り、黃海、東海に瀕す、又南は南支那海(南海)を受け、フランス領印度支那并に印度帝國のバルマに連なり、南西はヒマラヤ(喜馬拉耶)山系、カラコラム(喀喇崑崙)山脈、パミル(巴密爾)高原等を隔ててイギリス領印度、ブータン、ネパールに接し、西はロシアの中央アジアに限らる、廣袤は南北凡三千五百軒、東西凡五千二百軒あり、面積に就きてはストレルビツキ(Strelbitsky)は一千百六萬七千八百十五方軒、ステートマン(Stein)は一千百七萬七千八百七十七方軒、トログニツ(Trognitz)は一千百八萬一千千方軒とするが、アルマナードゴターに據れば一千百十三萬八千八百八十方軒、約一千百十四萬方軒と成り、イギリス

面積

ス、ロシア、フランスに次げる大國にして、我が日本國の二十六倍、アジア洲の四分の一に當れり。

海岸 清國は邦土の廣大なるに拘らず、海洋を控ゆる處は東部のみにして、港灣、海峽等は悉く太平洋に屬せり、而して沿海には北海、黃海、東海、南海等の名稱あり、北海は廟列島以西を云ひ、黃海は朝鮮の海岸を以て東界とし、山東半島より揚子江口に至る灣岸を以て西界とす、東海は揚子江口より朝鮮の南西端に至る虛線以東、九州島、琉球列島以西の稱にして、臺灣海峽以南の海を南海と云ふ、此等の海岸は概して屈曲に乏しきを以て海岸線の發達は充分なりと云ふを得ず、其の延長は三千五百軒に過ぎざるべし、彎曲の大なるものは北都に存すれども、良港と稱すべきものなく、中部の東海并に福建海峽に瀕する海岸には顯著なる出入を見ざるも、亦佳良なる港形を呈せざるに非ず、又南部の南海に接する海岸にありては、廣東灣、其の他二三の小灣を見るのみなりとす、左に海灣、海峽、半島、地角、島嶼に關する一表を示さん。

(北海、渤海)

遼東灣

直隸灣

萊州灣

世界大地誌

あしあ洲

清國

黄海 朝鮮灣 膠州灣
 海灣(東海(東支那海) 揚子江口 杭州灣 寧波灣 温州灣 福州灣
 福建(臺灣)海峽 泉州灣 厦門灣
 南海(南支那海) 廣東灣 廣州灣 東京灣
 海峽(直隸海峽 福建(臺灣)海峽 海南海峽
 半島(遼東半島 山東半島 雷州半島
 地角(旅順角 山東成山角 揚子角 冠頭角
 島嶼 光祿島 長山列島 廟列島 雲台山 崇明島
 舟山列島 厦門島 東海島 海南島
 山誌 世界の屋棟と稱せらるるパミル(巴密爾)高原、カラコラム(喀喇崑崙)
 山脈より發する數條の大山脈は開きたる扇の骨の如く或は北東に行き或
 は東に向ひ又南東に走り、以て此の廣大なる支那の國土を抱括せるが其の
 北東に行くものは天山山系、アルタイ(阿爾泰)山系の一派にして、其の中部に
 於けるものは崑崙山系に屬し、其の南東に走れるものはヒマラヤ(喜馬拉耶)

山系なり、然れども概言せば大山脈は西部に於て東西の方向を取り、東部に
 於ては北東-南西、南東-西北に走れるに似たり、今左に一表を作りて主要なる
 山脈と顯著なる山岳とを列記せり。

パミル(巴密爾)高原 ウスベル越(四六三〇)
 エムスタハアタ(タガル)マ山(七八六〇)

天山山系 天山山脈 ハンテンリ山(七三四〇) ボロホロ山脈 テスメゲンウラ(六〇〇〇)
 エデメク山脈 ボケドウラ(六〇〇〇)

アルタイ山系 エクダハアルタイ山脈 ツアサクツボケド
 タンヌ(唐努)山脈 ハンタイ山脈
 ハンアイ(杭愛)山脈 ケンタイ(肯特)山脈

サヤン(塞楊)山脈 イルキクタルカク(噶爾奇克達爾嘎克)山脈
 キリア山脈 アガメツツド越(三一七〇)
ヤシロ越(四八八〇)

西崑崙 崑崙山脈 ナイケハン峰(五九六) ツグスタパンタハ山脈
サンヒタパン峰(五〇〇) アルチンタハ山脈 マッカダハ山脈

崑崙山系

北脈 南山山脈 ブルハンブダ、トライ峙(トライ峙) 西傾山脈
 中崑崙山脈 積雪山脈 マルコボロ山脈

南脈 バヤンハラ(巴顏喀喇)山脈 ダンラ(當拉)山脈
 東崑崙山脈 北脈 大行山脈

支那山系 苗嶺山脈 南嶺山脈 大瘦嶺山脈 仙霞嶺山脈
 岷山山脈(秦嶺山脈) 伏牛山脈 桐山山脈 大巴山脈

天山山系

天山山系はキジルアルト山より起り、東西二千五百軒に達し、數山脈より成れり、脈中の最高峰をハンテンリ(七三四〇)と云ふ、此の外デスメゲンウラ(六〇〇〇)、ボグドウラ(六〇〇〇)等の諸山を有せり、而してハミ(喀密)とバルク(巴里坤)との間に於ける山道は二千七百六十米突に達する處あり。

アルタイ山系

アルタイ(阿爾泰)山系はアルタイ山脈とサヤン(塞楊)山脈との二部に大別せらるるが、數多の山脈より成り、平均高度は凡一千五百米突にして、ツアクツボグドは四千三百米突に達せり、此の外尙三千米突以上に及ぶものあり。

崑崙山系

崑崙山系は清國の脊骨を爲して東西に亘ること四千軒に及び、其の西崑崙山脈はキリア、崑崙の二脈に分かれて六千米突内外の平均海拔を有し、其中崑崙山脈は南、中、北の三脈に分かれて平均四千米突以上の海拔を有し、大河の水源と成り、其の東崑崙山脈は三千米突を超ゆること稀なりとす。

支那山系

支那山系即南山山系は時として崑崙山系の一部と見らるることあり、苗嶺、仙霞嶺等の諸山脈を包含し、南西より北西に走り、遂に我が日本に達すと稱せらるるが、本山系中の山岳は二千米突に及ぶものなし。

水誌 清國は土地廣大にして高嶺秀峰に富めるを以て長流、巨川に乏しからず、特に降雨、積雪の多量なる地方に發する江河は多量の水を輸送するを以て灌溉の利と交通の便とを興ふるもの甚多し、而して山脈の趨勢と流域の状態とに依りて江河を類別するときは北極洋、太平洋、印度洋の三斜面と中央閉塞地とに屬し、北極洋斜面、印度洋斜面に在るものは概其の上流のみ清國內にあるを見る。

北極洋斜面 イリ(伊犁)河、イルチン(也兒的)石河、イニセイ(葉尼塞)河
 世界大地誌、あじあ洲、清國、百五十三

セレンガ(薛靈哥)河

黒龍江 烏蘇里江 豆滿江 鴨綠江 遼河 東遼河

太平洋斜面 北河 永定河 黄河 洮河 無定河 汾 淮河 滹沱河

揚子江 江 鴨龍江 岷江 嘉陵江 烏 珠江 西江 北江 紅河(上) 瀾滄江

印度洋斜面 怒江 龍川江 サンボ(藏布)河 サトレチ河(上) 印度河

中央閉塞地(タリム)塔里木(河) 喀爾喀(和蘭)河(カシガル)略什

黒龍江 滿名をサハリンウラ蒙古は一にアムルのムラン(Altun)江を訛傳せし者

と稱す、アジア東部の一大河にして、其の源流に二派あり、其の一をインゴタ河と云ひ、ロシア領のソホンド山より發し、其の二をオイノン(敖嫩)河と云ひ、外蒙古のケンタイ山脈より出づ、此の二流の相合するやシルカ(什勒喀)河と成り、オルクナ(額爾古納)河を容れて始て黒龍江と稱す、本江は松花江即ちスンガリウラ(松嘎里烏喇)の白江と稱せらるる巨大なる合流を受けて、江身を増大し、曠野の地を過ぎて或は多くの分流を生じ、或は湖澤の狀を呈す、而してウスリ(烏蘇里)江を合はせたる後は、江身愈々廣濶と成り、流向を北に轉じて森林

黒龍江

黄河

地を潤し、處々に洲嶼を形成せり、下流は甚だ濶大にして、波濤の起ること恰、海洋の如く、水層は極めて重厚なりと云ふ、兩岸は高隆にして、樹木鬱蒼たり、江口はタタル海峡の北方テパフ岬とブロンク岬との間にありて、カラフト島に對せり、本流の長は凡そ四千四百八十軒、流域は二百萬方軒ありと稱す、黄河は青海蒙古の南西、バヤンハラ山脈の北東に於ける高地より流出す、諸水相合してアルタン(阿爾坦)河に匯し、チャリン(查靈)オリン(鄂靈)の二湖を經、カトン(喀屯)河と稱し、峡谷の地を東流し、甘肅省に入りて始て黄河と云ふ、蓋し河水濁濁なるを以て此の名あり、黄河は山地を流下して、大通河、洮河を容れ、蘭州を過ぎ、長城に沿ひ、清水江を合はせ、沙漠の地に北行し、以てアラシアン(阿拉善)オールドス(鄂爾多斯)の界を爲し、一大彎曲を呈して、河套を繞り、平坦なる沙原を流るるや、水勢漸、散漫し、河水愈々黃濁を加ふ、南流して、漢土に入り、無定河、汾水、洛河を受け、涸水に會して、流向を東に轉ず、往時は東流して、東海に達せしが、現時は開封の附近に於て、流向を北東に改め、大清河の古道に依りて、直隸灣に趣けり、本河の全長は凡そ四千二百軒にして、流域は九十八萬方軒

に達す、實に清國屈指の長流なり、而して灌溉上又は交通上多少の利便を興へざるに非ざれども水勢の急激なると河道の一定せざるとに依り大害小益の河流たるを免れず。

揚子江

揚子江は世界有数の大河にしてアジア第一の巨流なり、北緯三十二度乃至三十六度の間に於てパヤンハラ山脈とダンラ山脈とに挟まるる海拔五千米突以上の地に發源するケテンゴル(Keten Gol)及クトクトナイ(托克托奈)は相合してムルイウス(穆魯伊烏蘇) 蒙古語にて曲流の義と成り、カッチ(噶齊)及ナムチツ(那木七圖)等若干のウランムレン(烏蘭木倫) 蒙古語にて紅河の意に會し河幅は二百二十五乃至一千六百米突に達するを以て海拔四千米突河口より五千軒の距離に於て既に一大河たり、然れどもプリニワルスキー(Priewalski)の言に依れば二千軒流降したる處にありては反て一百乃至一百二十米突に過ぎずと云ふ、本江の最、黄河に接近するや距離は僅に二百五十軒のみなるも、中間に位する山脈は高隆にして積雪を戴けるを以て、江河に分配せらるる水量は尠少ならず、南東に流れて東チベットに趣くや、ドチャデーチ、プリチウ(布墨楚) チベット語

流に河等の名稱の下に峡谷を急走し、南流して金沙江と成りて漢土に入る、チリチウに瀕する巴塘附近に達するや、海を抜くこと二千五百米突、河幅二百乃至二百五十米突、水層七米突なり、三流を合はせ來るテンチウ(二五〇) 無量河等を客れ、瀾滄江(メコン)の上流、潞江(サルキン)の上流等が南流するに拘らず、本江は獨、斷然東向を採り奔流激湍を爲して雅龍江を合はせ、白水江と成り、滇池の水、牛欄江等を客れ、叙州に於て岷江に會し、大江と稱す、沱江、赤水河を受け水勢稍、緩慢なるも、處々に急流することあり、然れども重慶、海拔二六〇米突に至り嘉陵江を容るるや、河幅は七百米突ありて巨舟の航行を妨げず、烏江を受け夔州を過ぎ、峽江、即、鎖江、一八九軒を爲し、清江を客れ、沙市を經、太平運河に依りて洞庭湖に通じ、迂曲を呈し、武昌、漢口、漢陽の三都會の集合地に於て本江最要の支流たる漢江に會す、河口を距ること一千百軒なる當處に於ける大江の幅は二千四百米突に達せるが、屈曲多き流向を以て冲積平野を南西位に通過し、鄱陽湖に依りて贛江一帯の水を受け、風色に富める地を北西に流れ、江寧附近に達するや、兩岸は再、逼りて江幅は縮少するも、水深

西江

は四十米突内外にして、稀には一百米突を越ゆることあり、然れども江口に近づくと従て江床は少しく隆起して沙洲の成生を促すが如し、江口の幅員は百軒餘に達するも若干の島嶼、沙洲の横たはるありて南北の二口を呈せしが、數年以來沈砂は漸く積みて崇明島を大陸に連ぬるに至りしを以て、大江の海に通ずるは同島の南方よりするのみ、斯の如く沈砂多きが故に水底は四米突内外に過ぎざるも、潮汐は季節に従て三米突乃至四米突半に達するを以て吃水五米突以下の船舶は自由に通航するを得べしと云ふ。

西江は雲南府を北東に距る百三十軒の地に發す、八達河と稱し、南西流して撫仙湖の澮を過ぎ南流して由江臨安江を客れ、流向を北に轉じて九龍江を合はせ、南盤江と成り、東流して廣西省に入る、馬別河、北盤江、蒙江、巴盤江等の水を受けて紅水江と云ひ、水量に豊なる柳江を合はせて漸く巨流と成り、都泥江、黔江又は北江と名づく、潯州附近に至るや、本江源流の南派と認めらる、鬱江、即南江に會して潯江と云ふ、兩岸相迫りて水勢漸く急なり、龍江を容れたる後、梧州に於て桂江を合はせ、廣東省に入りて始て西江と稱す、南流して

沼湖

賀江、龍水江、新興江等を受け、不定の水深、深處は五十四米突ありしを以て肇慶に達す、同處に於ける河幅は二千米突あり、數多の沙洲を抱き、新興江を合はせたる後は兩岸再々逼りて河幅は二三百米突に過ぎざるも、水深は二十米突を越ゆと云ふ、此の峡谷を出づるや、河幅は一千五百米突に達するも、水深は三四米突に過ぎずして巨船の通航を許さず、實に河口を距ること百三十軒なり、三水附近に於て運河に依りて北江に通じ、三角洲に入る、本江は南流して最西の派流大西江を爲し、右岸より來る新會江と共に數派を爲して更に別個の三角洲を爲す、而して北江は南東に流れ、廣州府の前を過ぎ、東江に會し、南流して珠江(Bocca Tigris)と成り、伶仃灣に越き、西江と共に幾多の島嶼を挟みて南支那海に通ず、本江は源委通じて一千八百軒なりと云ひ、流域の如きは四十萬方軒と概算せらる。

沼湖 清國は邦土の廣濶なるに拘らず、著大なる湖澤を有せず、然れども其の數は少なからずして淡水なるあり、鹹水なるあり、或は無口のものあり、主として東部の沿海の地、揚子江畔并に北西、南西の高原等に存す。

北東部〔ハンカ(興凱湖)四九〕 フロン(呼倫池) ヘル(貝爾池)

クスクル(庫蘇庫兒湖)一六二二) ウグサ(烏布薩湖)八一〇)

北西部 カラノル(哈拉泊) イクアラク湖(伊克阿拉古泊)二一七〇)

バグラチャクル(九〇〇) ロブノル(羅布泊)七九〇)

南東部(洪澤湖) 高郵湖 寶應湖 太湖 鄱陽湖 洞庭湖

南西部 コノノル(庫々諾兒)三〇五〇) テンリノル(騰里泊)四六三〇)

バルチ(巴爾齊)湖四二一〇) マナサラワル湖(四六〇〇)

洞庭湖

洞庭湖は清國第一の大湖にして長二百二十軒幅六十軒あり、五千方軒の面積を以て湘江、沅江、資水の外、澄水、微水を容れ湖口に依りて揚子江に通じ此等相關連して交通、灌溉の便を興ふること多し、湖中には看龍山、石門山、明山、君山等の島嶼の出現せるあり、殊に君山最著名にして高凡六百米突乃至九百米突に達し、冬季、春初、揚子江の水涵るるに當りては陸地に接續するに至る能云ふ。

地勢 西部より北西部は七百五十萬方軒の面積を有して、帝國全土の五

三漢

分の三に當り、一大高原を爲して周圍には高山秀嶺に富める山脈を繞らせり、其のヒマラヤ山系の北面にありては平均四千米突以上の高臺を成せるが、數個の階段を爲して漸次に低下しゴビの沙漠蒙古の草原と成れば、一千一百乃至九百米突に下れり、殊に天山山系の北方なるツンガル(準噶爾)盆地の如きは六百米突に達せざるなり。

北東部并に南東部にありては、中央の臺地より分派せる數多の並行山脈は、高地より流れ來る諸水の流域谷地を形成し、黄河と大江との流域は殊に廣大なりとす、而して南東部は殆ど漢土の全部に當りて黄河の流域に當れる北漢(俗に北清と云ふ)は、一般に黄土即、ロニスに蔽はれ肥沃の地に乏しからず、中漢(南清と稱す)は揚子江の勢力を逞しうする處にして山岳、谿谷多く平地廣からず、地貌極めて錯綜せり、南漢(廣東地方)は起伏に富み平地少なし。

氣候 清の國土は甚だ廣大なれば其の氣候の一様ならざるは勿論なれども、元來海洋に瀕すること多からざるのみならず、又中アジアの高地に關連せるを以て、自然の結果として大陸的ならざるを得ず、されば氣候は概して

シベリア的の凜烈候に非ざれば、熱帶的の炎暑候にして中和を得たる好氣候の地は殆ど缺乏せるに似たり、而して本帝國の外藩部并に黄河以北の地は、溫度の變化も亦甚急激なるが、空氣は乾燥にして雪線はヒマラヤ山系の北面に於て五千六百米突、崑崙山系に於ては四千八百乃至六千米突に達せり、大江并に南部河江の流域は夏季酷暑を覺え冬季は温暖にして春季は降雨多けれども秋季は無上の好氣候なり、然れども大風タイフーンと稱する旋風の害を免るる能はず。

天産 清國は土地大にして山岳多く河流少なからず、高原あり、沙漠あり、沃野あり、草原、森林あり、嚴寒の地、炎暑の土の存するあり、是、各種の天産物を、して此の地に現出せしめたる所以なり。

鐵物には金、銀、鐵、銅、錫、鉛あり、石炭、陶土、石材、石油あり、特に水晶、斐翠石、其他、數種の玉類の産出するありて古來有名なり。

植物に就きては北部并に西部には松柏科に屬するものあれども、概して草木に豊ならず、之に反して南部、東部は濕潤にして温暖なる天候の下にあ

動物

植物

動物

漢 秦

唐

れば、植物は大に繁茂して其の種類も亦多きが如し、されば單に著名なるもののみを擧ぐるも紫檀(Perocarpus santalinus)、黒檀(Diospyros peregrina)、桑、漆、樹、竹類、籐(Calamus ratang)、沈香(Excoecaria agallocha)、龍眼等あり、其の他、穀類、綿、茶等あり。

動物は北部に熊、虎、豹、略駝、四不像(Cervus davidianus)、騾、驢等あり、南部に猿、犀の類あり、西部には麝(Moschus moschiferus)、羚羊あり、其の他、牛、馬、水牛、山羊、綿羊等は中央并に北西の臺地に産す、又鳥類は南部に多くして殊に彩鷄(Phasianus-plata)、銀雉(Gallus phasianus nycthemerus)、鸚鵡、孔雀、鴛鴦等を以て顯著なりとす。

沿革 太古漢族は黄河の流域に來りて繁殖し漸次に國を組成せしが、其の領する處は未だ廣からず、秦(四世紀元前二五)に至りて漢土の大部より滿洲、印度支那に亘る地を領し、前漢(前二〇三)は四川省の南西部雲南等をも従へ、使を西域に遣はし、後漢(二五〇)の代には前漢の時遠く漠北に退けられし匈奴全く勢力を失ひ、後漢の國威は遠くバミルの西に及べることあり、降りて唐(九七〇)の世には版圖擴張して北はシベリアのイニセイスクに達し、東は朝鮮半島に跨り、南は印度支那に及び、西はチベット、カシミール、ペルシアの北

契丹

宋、金

東部中央アジアに至る地を含むに至れり而して匈奴の衰へし後は鮮卑、柔然、突厥等の諸夷著はれしが、唐末の頃より契丹、即ち後の遼(九一六―九五)は隆盛に越きて日本海より天山山系に達するの地を占め、南下して五代(九六〇―七)北(九六〇―七)の諸國を苦めたり、遂に金(一一一五―一三二四)南宋(一一二七―一三二七)は魯、淮水を境として南北に相對し、西にはペラサダンに都せる西遼(一一一五―一二二五)ありしが、成吉思汗出でしより蒙古は切に征伐に従事したり、されば蒙古人の威令はシベリア、印度支那、印度の各大部、アラビア、小アジアの一部を除きたるアジア大陸及ヨーロッパの南東部等に及びて元(一二〇六―一三六八)は其の四汗國と共に空前の境土を有せり、然るに元も漸く瓦解して漢土に明(一三六八―一六四四)興れり、明に代れるは滿洲の愛親覺羅氏にして國號は初、後、金と云ひ、後、清と改め(一六四四)たり。

清は康熙より乾隆に至る百三十餘年(一七九五―一八二一)の間に臺灣、西藏、外蒙古、青海、新疆をも従へ、安南の事に干渉し、ネパールのグルハを伐ち、其の極盛に達せり、然れども、乾隆の後、内亂外患屢生じ、鴉片戦争(一八四〇)に依りて香港

清・明・元

をイギリスに割き、長髮賊の亂(一八五〇)に當りてはイギリス、フランス連合軍の侵入(一八六〇)を蒙り、北京條約を結びて九龍半島の一部をイギリスに與へ、後、フランスに破られて安南を放棄し、明治二十七八年の役(一八九四)には臺灣島を失ひ、戦後列強に威嚇せられて數區の租賃を許諾し、事實上、其の領土の幾部を失ひたり。

先之夙に侵略に熱中せるロシアは愛理條約(一八五八)を締結して黒龍江以北の地を奪ひ、北京條約の際、清國に恩を被らせて烏蘇里江東を取り、又伊犁を占領せることありしが、義和團の亂(一九〇〇)に際しては清朝祖宗の起れる滿洲を占領せり、我が日本とイギリスとの兩帝國は協約を結びて清韓の獨立保全を計りしかば、ロシアは陽に滿洲の撤兵を約して而も全く之を履むに至らず、由りて遂に我が國はロシアに對して戰を宣するに至れり、今や皇軍の向ふ所風靡せざるはなく、忠勇義烈なる我が大和民族の手に依りて滿洲が再、清の確實なる領土と成るの日は幾もなくして來らんとす。

人口 清國は土地の廣大なるのみならず、人口も亦極めて多し、然れども

住民の總數

住民の配布

其の計数は甚だ不正確にして、或は三億三千餘萬に過ぎずと云ひ又は四億二千餘萬と稱せらるるが、世界總人口の五分の一以上に達せりと爲すは妨なきが如し、而して本帝國を組織する各部に就きて住人の配布を考査せんか、非常なる差異の存するあるを見るべし、或は稠密にして一方籽に就き二百二十一人を有するあり、或は十方籽に就き僅に六七人を有するに過ぎざる部分あり、殊にゴビ沙漠若しくは西部の山地に於ては殆ど無人の地たるが如き處あり。

アルマナードゴダー(Almanach de Gotha, 1904)に據れば、

清國全部	一一一三、八八八〇	三、三〇一三、〇〇〇	一、三〇〇
漢土(十八省)	三八七、七〇〇	三、一九五〇、〇〇〇	八二
滿洲(東三省)	九三、九二八〇	五五三、〇〇〇	六
蒙古	二七八、七六〇〇	一八五、〇〇〇	〇、六
新疆	一四二、六〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	〇、七
西藏(岡伯特)	二二〇、九〇〇〇	二二五、〇〇〇	一

ステートマンイーヤブック(Statestman's yearbook, 1904)に基つけば、

清國全部	一一〇七、七八七〇	四、二六〇四、七三二五	一、三八
漢土	三九六、八九六七	四、〇七三三、七三〇五	一〇三
滿洲	九四、一七五〇	八五〇、〇〇〇	九
蒙古	三五四、二〇八四	二五八、〇〇〇	〇、七
新疆	一四二、五三八一	一一〇、〇〇〇	〇、八
チベット	一一九、九六八八	六四三、〇〇〇	五

ビビアンドセンマルラン氏(一千八百九十七年調)に依れば、

清國全部	一一〇八、一一〇〇	四、三〇〇二、〇〇〇	
十八省	三九七、〇〇〇	四、一八八九、〇〇〇	
滿洲	九四、二〇〇〇	五七五、〇〇〇	
蒙古(タルバカタイを含む)	二八三、一〇〇〇	二二〇、〇〇〇	
新疆(曲城を含む)	一四二、六〇〇〇	一二八、〇〇〇	
チベット、ココノル	一九一、二〇〇〇	二〇〇、〇〇〇	